

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

# 柳井谷遺跡

農用地利用増進対策事業(柳井谷地区)  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。

1984.3

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

## 序 文

志布志を含む大隅地域は、昭和57年新たに発見された小牧古墳、タグリ岬の飯盛山や駆崎、唐仁、横瀬などの古墳群をはじめ、昭和39年発掘の片野洞穴、昭和56年発掘の東黒土田遺跡など、縄文期から弥生、古墳時代に亘る埋蔵文化財の包蔵地であり、地理的にも、学術的にも古代文化解明の重要な地域であります。

これらの文化財は、私たちの祖先がながい歴史の中で培い、保護保存してきた国民的財産であるとともに、私たちの生活の進歩と伝統の新しい展開を育んできたものであり、これらの文化財をながく後世に継承し、文化の創造に役立てることは、現代に生きる私たちに与えられた責務だと考えられます。

特に埋蔵文化財については、考古研究者や関係者等により数多くの遺跡が確認されているが、今後の調査に委ねているものが大部分であり、その究明を待たなければならない状況にあります。

心の豊かさを要請される今日、文化遺産に対する关心と愛護活動が尚一層重要性を増してきているものであります。

本町では、これらの文化財の保護保存の重要性に鑑み、埋蔵文化財への認識と理解を深めていくべくよう文化財愛護思想の普及啓蒙と周知を図っており、埋蔵文化財遺跡の保存整備や調査等に努めるとともに周知の埋蔵文化財包蔵地において、現状を変更する工事等が計画されるときは、その事業計画前に確認調査等を実施して、できるだけ現状保存に努めてきております。

今回の調査は、農用地利用増進特別対策事業柳井谷地区に係る柳井谷遺跡の発掘調査を行ったものであります。

この調査には、本町在住の考古研究者である日本考古学協会会員・瀬戸口望氏を調査担当者として依頼、実施したもので、鹿児島県教育庁文化課等の指導協力を得て調査が行われ、昭和57年度は報告書概報にまとめたもので、このほど出土遺物の整理、学術調査を行い、記録を終了したので「柳井谷遺跡発掘調査報告書」として、刊行したところであります。

調査報告書の刊行にあたり、終始、真摯な学究的態度で調査に臨まれた瀬戸口望氏の献身的なご努力とご功績に対し、深く敬意を表し心から感謝申し上げる次第であります。

更に指導協力をいただいた、鹿児島県文化財保護審議会委員・河口貞徳先生、鹿児島県教育庁文化課並びに発掘調査にたづきわれた関係者、農用地利用増進特別対策事業に係わる関係者の方々に深甚のお礼を申し上げ、本書が広く郷土理解と文化財愛護に役立つよう念願するものであります。

昭和59年8月

志布志町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、農用地利用増進対策事業（柳井谷地区）に伴い鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会が行った柳井谷道路の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施するにあたっては、鹿児島県教育委員会文化課の指導、助言を得た。
3. 発掘調査に必要な器材や用具は、鹿児島県教育委員会文化課の備品を一部借用した。
4. 発掘調査の実施、調査区の設定、レベル測定、実測等は、担当者瀬戸口望が行った。
5. 遺物の水洗いは現場で行い、注記、接合等は鹿児島県教育委員会文化課収蔵庫で行った。
6. 出土土器の復元作業、遺物の実測、拓本等は瀬戸口望が行った。
7. 本書の執筆、編集作業は鹿児島県教育委員会文化課主事牛ノ浜修、長野真一氏其の他の各位の指導や助言を得て、瀬戸口望が行った。
8. 本書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。
9. 発掘調査によって出土した遺物の保管場所は、鹿児島県志布志町教育委員会である。

# 目 次

## 序

### 例言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたるまでの経過	1
第2節 発掘調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 調査の概要	4
第2章 位置と地形、環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 環 境	6
第3章 トレンチの設定、層位	10
第1節 トレンチの設定	10
第2節 層 位	14
第4章 遺構と遺物	18
第1節 遺 構	18
1. 石 組	18
2. ピ ット	18
第2節 遺 物	20
1. 土 器	20
2. 特殊な装飾土器	59
3. 土器破片の加工品	64
4. 石 器	67
5. 扱状耳飾り	82
6. 炭 化 物	84
7. 黒 磨 石	84
8. 其 の 他	84
第5章 まとめにかえて	86

## 挿 図 目 次

第1図	柳井谷遺跡並に周辺遺跡	8	第34図	第9類土器	52
第2図	地形図並に調査トレンチ配置図	9	第35図	第10類土器並に第11類土器	53
第3図	主トレンチの配置図	11	第36図	第12類土器	54
第4図	基本層序	13	第37図	底部	56
第5図	壁面実測図(1)	15	第38図	底部	57
第6図	壁面実測図(2)	16	第39図	底部	58
第7図	壁面実測図(3)	17	第40図	底部	59
第8図	石組遺構実測図	19	第41図	特殊な装飾土器	62
第9図	第1類土器並に第2類土器	22	第42図	特殊な装飾土器	63
第10図	第2類土器	23	第43図	特殊な装飾土器	64
第11図	2層(攪乱層)出土土器	24	第44図	土器破片の加工品	66
第12図	2層(攪乱層)出土土器	25	第45図	土器破片の加工品	67
第13図	第3類土器	26	第46図	石皿	70
第14図	第3類土器	27	第47図	磨石	71
第15図	第3類土器	28	第48図	石斧	72
第16図	第3類土器並に第9類土器	29	第49図	石ヒ、石斧、块状耳飾	73
第17図	第3類土器	30	第50図	石斧、棒状槌石、玉石(攪乱層出土)	74
第18図	第4類土器	31	第51図	角形状蔽石	75
第19図	第5類土器	34	第52図	棒状石槌	76
第20図	第5類土器並に第7類土器	35	第53図	石錘、棒状槌石	77
第21図	第6類土器	36	第54図	石錘、磨石、玉石(攪乱層出土)	78
第22図	第6類土器	37	第55図	玉石、磨石	79
第23図	第6類土器	38	第56図	玉石、円盤状石器	80
第24図	第7類土器並に第9類土器	41	第57図	台石	81
第25図	第7類土器	42	第58図	块状耳飾出土分布図(九州)	84
第26図	第7類土器	43	第59図	遺物の出土状況(3層 <sup>a</sup> )	89
第27図	第7類土器	44	第60図	遺物の出土状況(3層 <sup>b</sup> )	90
第28図	第7類土器	45	第61図	遺物の出土状況(3層 <sup>a</sup> )	91
第29図	第7類土器	46	第62図	土器出土状況実測図	92
第30図	第7類土器	47	第63図	土器出土状況実測図	93
第31図	第7類土器	48			
第32図	第8類土器	49			
第33図	第8類土器	50			

## 表 目 次

第1表 植井谷遺跡並に周辺遺跡	7	第8表 土器破片の加工品(メンコ)	65
第2表 発掘調査報告並に内容報告された 遺跡	10	第4表 石器類一覧表	82
		第5表 块状耳飾一覧表	88

## 図 版 目 次

図版1-1 遺跡の遠景	94	図版14-1 台石出土状況	107
図版1-2 遺跡の近景	94	図版14-2 石組遺跡	107
図版2-1 発掘状況	95	図版15-1 第1類並に第2類土器	108
図版2-2 発掘状況	95	図版16-1 第2類土器	109
図版3-1 遺物の出土状況	96	図版16-2 第2類土器	109
図版3-2 遺物の出土状況	96	図版17-1 第2類土器	110
図版4-1 遺物の出土状況	97	図版17-2 同裏面	110
図版4-2 遺物の出土状況	97	図版18-1 第3類土器	111
図版5-1 土器出土状況	98	図版18-2 第3類土器	111
図版5-2 土器出土状況	98	図版19-1 第5類土器	112
図版6-1 土器出土状況	99	図版19-2 第8類土器	112
図版6-2 土器出土状況	99	図版20-1 第4類土器	113
図版7-1 土器出土状況	100	図版20-2 同隆起部拡大	113
図版7-2 土器出土状況	100	図版21-1 第7類土器	114
図版8-1 遺物の出土状況	101	図版21-2 第5類土器	114
図版8-2 壁面露呈の石皿	101	図版22-1 第6類土器	115
図版9-1 块状耳飾出土状況	102	図版22-2 第6類土器	115
図版9-2 底部出土状況	102	図版23-1 第8類土器	116
図版10-1 A-3トレンチ	108	図版23-2 第6類土器	116
図版10-2 遺物の出土状況	108	図版24-1 第9類土器	117
図版11-1 第6トレンチ終了	104	図版24-2 第7類土器	117
図版11-2 第7トレンチ終了	104	図版25-1 第7類土器	118
図版12-1 北拡張トレンチ終了	105	図版26-1 第7類土器	119
図版12-2 第5トレンチの壁面	105	図版26-2 第7類土器	119
図版13-1 B-1トレンチ	106	図版27-1 第8類土器	120
図版13-2 B-2トレンチ	106	図版27-2 第8類土器	120

図版28-1	第10類土器	121	図版37-1	黒曜石剥片	180
図版28-2	第3類土器	121	図版38-1	円盤状石器	181
図版29-1	第12類土器	122	図版38-2	石斧	181
図版29-2	同隆起部拡大	122	図版39-1	块状耳飾, 石器	182
図版30-1	第5類土器	123	図版39-2	炭化物	182
図版30-2	木ノ葉压痕底部	123	図版40-1	燧石, 玉石	183
図版31-1	底部	124	図版40-2	石鍬	183
図版31-2	底部	124	図版41-1	石皿	184
図版32-1	装飾土器	125	図版41-2	鐵石	184
図版32-2	装飾土器	125	図版42-1	石皿	185
図版33-1	装飾土器拡大	126	図版42-2	石皿	185
図版33-2	装飾土器拡大	126	図版43-1	石皿	186
図版34-1	装飾底部側面	127	図版43-2	石皿	186
図版34-2	装飾底部側面	127	図版44-1	石皿	187
図版35-1	装飾土器	128	図版44-2	石皿	187
図版35-2	装飾土器	128	図版45-1	石皿	188
図版36-1	土器破片の加工品	129	図版45-2	石皿	188
図版36-2	土器破片の加工品	129			

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査にいたるまでの経過

農用地利用増進対策事業は各地に推進されつつある。こうしたなかで、純農村地柳井谷集落にも柳井谷地区農用地利用改善事業の実施団体が発足し、昭和58年8月20日を完工予定に、昭和57年10月20日、瀬戸口台地の改善工事に着手したのである。

この工期中の昭和58年1月12日、当時、八野校区十文字原地区改善事業に先づて発掘調査が鹿児島県教育委員会文化課によって実施されており、その一環である周辺遺跡の分布状況調査で長野真一主事が施工を知ったのである。もともと、瀬戸口台地に柳井谷遺跡が存在していることは、遺跡地名表にも記載があり、一般的に広く周知されていた。早速、同氏を含め、牛ノ浜修主事、瀬戸口望日本考古学協会会員が調査を行い、志布志町教育委員会にその報がもたらされたのである。

この報に接した志布志町教育委員会は、現地調査を行い確認のうえ、鹿児島県教育委員会に報告を行い、今後の対策を協議した。なお、この間、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏の調査と助言もあった。

その結果、改善工事の全面停止を関係施工者に求めると共に、工区内にある包蔵地の消失予定期部の完全発掘調査を行い、調査結果を記録保存すると共に、包蔵の分布範囲を把握し、これの保護対策資料を得ることとした。

調査期間は、工期並に作付けの関係等を考慮し、昭和58年1月24日より2月8日まで実施し、発掘調査後の出土遺物の整理作業は、鹿児島県教育委員会文化課収蔵庫で行い、報告書の作成は、発掘担当者に依頼することとした。

発掘担当者については、鹿児島県教育委員会文化課と協議を重ねたが、調査員の都合がつかず、その推挙によって、瀬戸口望日本考古学協会会員に依頼した。

### 第2節 発掘調査の組織

発掘調査の実施については、次のような体制でのぞむことにした。

発掘調査主体者	志布志町教育委員会		
発掘調査責任者	教育長	川之上後一	
発掘調査事務局	志布志町教育委員会		
	社会教育課長	山畠 敏寛(当時)	
	同	加藤光三郎	
	社会教育課長補佐	那加野久廣	
	同 文化係	東迫 光博	
発掘調査担当者	日本考古学協会会員	瀬戸口 望	

発掘作業員 柳井喜子、和田信子、川原田千代子、坂口清美、西山きぬ子、  
新地サカエ、柳井節子、敷根貞美、柳井ヤチヨ、柳井ヤヨイ、  
柳井しづみ、新地トモ子、新地福蔵、新地伯、新地トシ子、  
坂口チズ、和田キヨ子、柳井信子

以上の体制で発掘調査を実施したが、発掘期間はもとより発掘終了後多くの御協力や指導、  
助言を得ている。記して深謝の意を表したい。（敬称略）

鹿児島県教育委員会文化課	
鹿児島県文化財保護審議会委員	河口 貞徳
志布志町文化財保護審議会委員	各 位
鹿児島県教育委員会文化課主事	牛ノ浜 修
同上	長野 真一
大隅土木事務所	
改良工事施工者	内山組、田中組
内山組測量士	菊原 俊輔、西村 春幸
柳井谷地区土地改良事業共同施工代表	新地 福蔵
志布志町農政課	
志布志町社会教育指導員	酒匂 正

### 第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和68年1月24日より2月7日まで実質14日間実施し、翌8日は器材返還作業等の後かたづけにあてた。その間の経過については、日誌抄をもってかえたい。

#### 調査日誌抄

- 1月24日(月)晴 定刻作業員全員が参集したが、発掘作業器材が未着のため、一応、調査発掘の主旨や目的、並に、作業上注意すべき点等の説明を行う。その後、台地全域の表面採集作業を実施した。結果は、土器片、石器等合せて數十点をこえ、散布状況は、台地全域に及んでいることが判明した。器材到着後早速、改善工事によって消失が予定されている第8号農道（西より東方向巾4m、長さ102m）部分に、直ねる長軸で、4m-10mのA-1トレントを設定、掘り下げ作業を行う。表層から第2層に可なりの土器片や石片等の混入が認められたが、この層までは以前の耕作土層で擾乱の状態である。第3層上部に至りやや正常な埋蔵が認められ、トレント西側寄りに多く検出されるので、残していた台地末端方向（西側）へ、2mの拡張を行う。
- 1月25日(火)曇 A-1の掘り下げ作業を続行、土器の小片や小石片等の出土で進展しない。作業員が頭うらの状態で、分散の必要が生じたので、A-2トレントを設

定(4m-6m)。このトレンチも表層から2層に遺物の混入が認められた。

- 1月26日(水)晴 A-1は第8層まで掘り下げる。遺物の出土がめだって多くなるが、一部耕作作業による擾乱もある。(芋っぽがあちこちに認められた)。西側寄りに多く出土し。うち、市来式あるいは指宿式と推定できる土器、ノミ状石器等の出土があった。
- 1月27日(木)晴 A-1、A-2区の8層整理、まとまった市来式土器の出土があり、出土状況の写真撮影終了。A-2区東に、2mの間隔をおき(ここにも基準杭の設置があった)、2m-5mのトレンチ設定を行い、A-3区とした。表土の取除き作業を行ったところ、内蔵の可能が強まつたので、巾を1.5mづつ拡張した。従って、A-3は、5m-5mである。なお、A-1トレンチより南側25m地点、北側25m地点に、各々1m-5mの設定を行い、A-4、A-5トレンチとした。更に、A-5の東50mのところに同じ規模の、A-6トレンチ設定を行った。地層並に分布状況を把握する目的である。A-4は、遺物の出土が全く認められなかつたので、第6層までで作業を終了する。A-5は、第8層に至り7点の土器、石片の検出があり、A-6は、表層(擾乱層)に石鏡1点、第8層に至って土器18点の出土があつた。
- 1月28日(金)晴 分布状況を把握するため、改良地域に含まれていない北側隣り畠地(約2m段差がある)に、1m-5mのA-7トレンチ設定。第5層まで掘り進んだが、以下シラス層で、遺物の出土は全くなかつた。写真撮影のあと埋め戻し終了。台地東南端に、B-1(2m-8m)、B-2(2m-5m)を設定。B-1に石組造構、土器破片等の出土があつたが、B-2の出土なし。A-1、A-2、A-5、A-6、B-1の平板終了。
- 1月29日(土)晴 基準杭が設置してあり未発掘であったA-1区、A-2区の間(巾2m)をA-2西拡張区として掘り下げ作業を行う。表層並に第2層に遺物の出土がめだつた。A-1、A-2、A-5、A-6のレベル測定終了。
- 1月30日(日)雨 朝のうち降雨があつたので発掘作業中止。晴れ間をみて、担当者だけでA-1、B-2の石組造構並に集中して出土した市来式土器等の平面実測を行う。
- 1月31日(月)晴 A-1、A-2、A-3の8層の整理終了、出土状況の写真撮影。A-1～A-3の北側と、接続して北拡張トレンチ(巾8m)を設定し、掘り下げ作業を行う。表層に遺物の混入が認められた。B-1区のレベル測定と取り上げ終了。
- 2月1日(火)雨 降雨が強いので作業員は休日にしたが、作業が若干遅滞しているので、担

	当者が友人等を含め、北拡張区の表層掘り下げ作業を行う。
2月2日(水)曇	北拡張区の掘り下げ作業、A-8区8層下部の整理並に撮写。A地点並にB地点の地形実測。A-8の直立して出土した市来式土器の実測。A-1、A-2の3層出土の遺物取り上げ、水洗い、整理作業を終え箱づめ。
2月3日(木)曇	北拡張区の3層整理、A-2拡張区8層の平板、レベル、遺物取り上げ作業、A-1、A-2の8層下部への掘り下げ作業、A-1、A-2、A-2拡張区の8層下部の整理、写真撮影。
2月4日(金)晴	A-1～A-2区の8層下部の平板、レベル測定終了。北拡張区の整理作業、並に平板、レベル測定。8層下部へ掘り下げ作業、A-8出土の集中土器の実測、取り上げ後遺物の水洗い、箱づめ作業。
2月5日(土)晴	農道の基準杭のあるA-2、A-3区間の未発掘部分(巾2m)の掘り下げ開始(杭の移転を依頼した)。A-2に残置していた市来式上器集中個所の実測と取り上げ。A-4、A-5の壁面実測、写真撮影。
2月6日(日)晴	A-3拡張区8層の整理並に平板、レベル測定後遺物の取り上げ。北拡張区の8層下部の整理、平板、レベル測定、遺物取り上げ終了。北拡張区の北壁面にそい巾1mの壁面実測用の溝の掘り下げ作業。4層に至って、黒川式土器の集中出土あり。
2月7日(月)晴	北拡張区の黒川式土器のレベル、平板、実測等終了。更に掘り下げ作業を行うも遺物出土全く無し。第8層上部まで掘り下げ終了。のち壁面実測。A-4～A-6の埋め戻し作業、A-1～A-3並に北拡張区の埋め戻しは不要である(いずれ削取される部分)。取り上げた遺物の水洗い、ラベル取り替え、箱づめ、器材器具の点検整理、荷作り作業等すべて終了。
2月8日(火)晴	鹿児島県教育委員会文化課より借用の器材を、十文字原地区発掘現場事務所(倉園集落・倉橋氏宅)に返還、志布志町教育委員会搬出の用具等の返納も終り、柳井谷遺跡の発掘調査は総て完了した。

#### 第4章 調査の概要

柳井谷の発掘調査は、造成工事の着工からすでに1ヶ月以上を経過しているので、あらかじめ基礎的な行程は終了し、以前確認されていた散布地はおおかたが消失し、唯工事区域から除外された台地北端部がわずかに原形をとどめていたにすぎない。特に消失が激しかった区域は、南から南東部の一帯で、この辺りの工事は、畠地の区画も大きい、道路の部分が残るのみで、包蔵部分と推定していたところは全面消失の難にあっていった。従って、発掘調査の区域はおのづから限られ、消失予定の8号道路を主体にしなければならなかった。

幸い、この部分は、土砂が不足した場合の、盛り土用に残っていたため、工事以前の耕作面が一部保たれていた。新設される農道は、全て幅員4m、それに0.8mの排水溝が付設される。

1号道路から分岐し、東の綾掘まで伸びる8号道路は、ゆるやかな登り勾配となるので、分岐点よりでは両側の畠面と約2mの段差が生じ、なお、上面に向って逆八字状の傾斜を有する切り通し道になる。この切り通し道は約30mで平坦にもどるが、この区間の包蔵部分は完全に削取され、消失することは必至のことである。そこで、限られた期間内にこの部分に魅力を結集し、完全発掘を期し、なお且つ、余力を以て周辺の分布の状況、包蔵の範囲を把握しなければならない。

トレンチの設定も、こうした状況を充分ふまえたうえで設定しなければならない。設定の過程や規模等については後述。第3章第1節トレンチの設定の項で述べることにしたい。

## 第2章 位置と地形、環境

### 第1節 位置と地形

柳井谷遺跡の所在するところは、鹿児島県曾於郡志布志町帖柳井谷である。

鹿児島県の最東部に位置する志布志町は、北東から東側を宮崎県都城市及び串間市と接し県境をなし、北西から西側は鹿児島県曾於郡末吉町、松山町、有明町と接し、南は瀬戸内海を太平洋に開く志布志湾に臨んでいる。

町の総面積は188.9km<sup>2</sup>、東西の最大巾約28.9km、南北に約28.9kmあり、縱長の形状をなしている。気候は年間を通じ温暖なほうで、降雪は稀である。年間の降雨量は2,200mmと可なり多く、志布志湾に流入する河川は、安楽川をはじめ、前川、福島川の上流大矢取川を含め、大小十指をこえている。町の地勢は、山地、台地、低地に大別することができる。県境をなす北部から東側一帯は、日向山脈の支脈鷹那山塊がはしり、極北の三角点 691.6m を最高に、御在所岳(580.4m)笠祇岳(444.2m)、陣岳(849.8m)の峯々が連なり、200m前後の峯や稜がこれに接し、さらには、ゆるやかな丘陵となり台地化している。山地の基盤層は、中世古第三期～新第3期に隆起した日南層群からなりたち、笠祇岳山頂附近から貝化石等の産出もみられる。台地は侵食作用に もろい火山噴出の火山灰堆積層(シラス)で、1層あたり最高21、平均11ヶ所を数える谷密度を示し、樹枝状に発達する侵食谷は、大小さまざまな台地を造り出している。台地は町北部で約200m前後の標高から、南に徐々に低くなり、海岸に面する市街地北背の台地では、50m前後となっている。低地は、河川によって侵食されたわずかな面積の谷底平地と、河岸段丘、河口の三角洲、海食によって神礎化した海岸線など、その面積は限られており、総面積の10%にも満たない。<sup>(注1)</sup>

柳井谷遺跡はこうした地勢のなか、海岸線に発達した行政中心の市街地より、車で約20分の行程の柳井谷にある。直線で結ぶときはほど離れていないが、陣岳山塊を北に大きく迂回しなければならない。北東部の山麓に源泉し多くの小流を合した前川は、市街地東端をかすめ志布志湾に流出している。柳井谷集落は、この川にそい県道110号線を約5km廻り、立花迫集落で南に分岐し、田床川にそって曲りくねった町道を4km程南下したところにある。県境はこれより約

500mである。この辺りは、笠祇岳、蘿岳青山塊に囲まれた小盆地で、東南の県境方向がわずかに閉折している。

遺跡の立地する台地は、通称瀬戸口台地と呼ばれ、集落の北入口にかかる柳井谷橋の東側にある。標高は100m～110m、北背に笠祇岳の支峰285m峰があり、巾約300m、突出部約200m、南から西方向にひらけ、足下は目測で約20mの低地になり、谷沢によって隣り台地と分断されている。可なり以前から畠地として利用され、台地東端の稜根辺りの一角を、寺跡、とも言っている。

畠地が限られた柳井谷集落では、この台地が最大の農作地に利用されたので、以前から全面に遺物の散布が多く見られ、農道の土手、畠のすみ、木の根元等に採集することができたが、当時の面影は全くなかった。

なお、柳井谷集落は、藩政時代、辺路番所が設置されており、古くから内陸部の交通の要路となっていたことで有名である。

## 第2節 環 境

志布志町内に所在する遺跡の数は、昭和57年末現在で、126ヶ所にものぼり、内訳は、縄文時代遺跡70ヶ所、弥生時代遺跡88ヶ所、古墳時代遺跡18ヶ所である。<sup>(注2)</sup>この数字は、鹿児島県では少い方ではなく、むしろ濃密地帯といえよう。

特に、縄文時代遺跡についてみると、山塊を背景にした数多くの山麓や谷底、樹枝状に流出する河川の発達、気候の温暖に加えて照葉樹林帯の繁茂等、さまざまな要因が重なり、好条件を生んだものと推察できる。先づ年代の順に述べると、前川上流県境に近い東黒土田遺跡の発掘調査では、縄文土器（縄文草創期に比定される）に伴い、堅実類（ドングリ類）の炭化したもののが、貯蔵の状態で発掘され、放射性炭素測定の結果では、 $11,800 \pm 180$ 年が示されている。<sup>(注3)</sup>これは国内最古の炭化物といわれている。なお、柳井谷遺跡の北2.0kmに所在する錦石橋遺跡の発掘調査（鹿児島県考古学会長河口貞徳）でも、東黒土田遺跡出土の縄文土器に類似するものが、最下層（7層）に数点検出され、同層位に炉跡などもあったことから、縄文草創期文化の一端を知る手がかりを与えたのである。<sup>(注4)</sup>また、昭和39年8月発掘調査が行われた片野洞穴の結果では、縄文早期から古墳時代まで人の住みついていた事実が判明、狩猟や漁労で生活していた内容が示された。食生活の具体的な内容としては、貝類のはか、猪、鹿、獐、熊、かえる、むささび等で、他に骨角器（カンザシ）も出土し、研究者の注目するところとなっている。<sup>(注5)</sup>弥生時代の遺跡では、町内全域に散発的に発見されているが、安楽川下流域の安楽地区辺りに多く判明している。古墳時代に至っては、県内最古の高塚古墳（畿内形古墳）、飯盛山古墳（別名ダグリ古墳）が、夏井ダグリ岬に発見され、貴重な遺物を出土したが、現在国民宿舎となっている。また、ごく最近、安楽川下流小字小牧に古墳が発見され、小牧古墳群1号墳と名付けられ、志布志町指定文化財となっている。

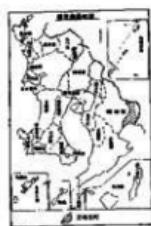
以下参考のため、発掘調査、あるいは採集遺物の内容等、報告や発表されたものを表1にまとめてみた。

番号	遺跡名	所在地	時代	主な内容	備考
1	柳井谷	帖瀬戸口	縄文後、晚期	岩崎上層、指宿、市来式	昭和58年発掘調査
2	鎌石橋	帖瀬戸11218	・草創期～	細石刃、隆帶文、炉跡	〃 56年 〃
3	上出水	内之倉前畠	・早期	石坂、吉田式、住居跡？	〃 57年内容発表
4	十文字	内之倉4081	・後期	岩崎上層、指宿式、石斧	〃 57年発掘調査
5	片野跡穴	内之倉片野	・早～中期	片野、西平式、骨角器	〃 89年 〃
6	倉塙A	内之倉大原4648	・後期	指宿、鎌ヶ崎式	〃 49年内容発表
7	倉塙B	内之倉食國	・早期	吉田、石坂式、石斧	〃 57年発掘調査
8	山之上	帖6423	・早・前朝	石坂、塞之神式	〃 89年 〃
9	野久尾	帖8197	・早～後期	撫糸文、曾畠、指宿式	〃 58年 〃
10	小筒	帖小瀬6425	・後期	指宿、市来式、石斧、石錐	〃 89年 〃
11	別府	帖別府	・早・前朝	吉田式、前平式、塞之神式、鎌ヶ崎式	〃 54年 〃
12	前之段	帖下原	・晚期	網目文、戴石、すり石	
13	上岡	夏井上岡	・前期	塞之神式	
14	夏井ケ浜	夏井舎之口	・後～中期	西平、三万田、御領式、石斧	〃 48年内容発表
15	ダグリ古墳	夏井ダグリ	古墳	前方後円墳	
16	小牧一号古墳	安美小牧	・	前方後円状	
17	宮脇	安美宮脇1106	縄文後期	市来、指宿式、石錐、石皿	
18	百堂穴	安美岩戸	・前期	轟式、石斧	
19	小瀬A、B	安美小瀬	・後期	指宿式、石斧	
20	山角	安美山角	・後期	西平式、御領式、石斧	
21	柳	安美柳	・早・弥生	吉田式、住居跡（弥生時代）	〃 55年発掘調査
22	橋之口	内之倉橋之口	・晚期	入来系	〃 47年内容発表
23	橋野	内之倉橋野555	・後～晚期	市来、夜白系、石皿	
24	今別府	内之倉今別府	・晚期	大石系、黒川式、石斧	
25	山久保	田之浦蔵窪	・晚期	大石系、石斧	
26	小牧	田之浦小牧122	・中～後期	岩崎上、下福式、石斧	
27	大越	田之浦高瀬原348	・早期	吉田、前平、石坂式	
28	白木八重	田之浦白木八重1089	・早期	橋田押根文	〃 48年内容発表
29	自野	田之浦古原1171	・早～前期	押型文、吉田、石坂式	〃 〃 〃
30	家の原	帖家の原10767	・後期	指宿、市来式、石斧、石皿	
31	下出水	内之倉上原	・早期	吉田式、炉跡	

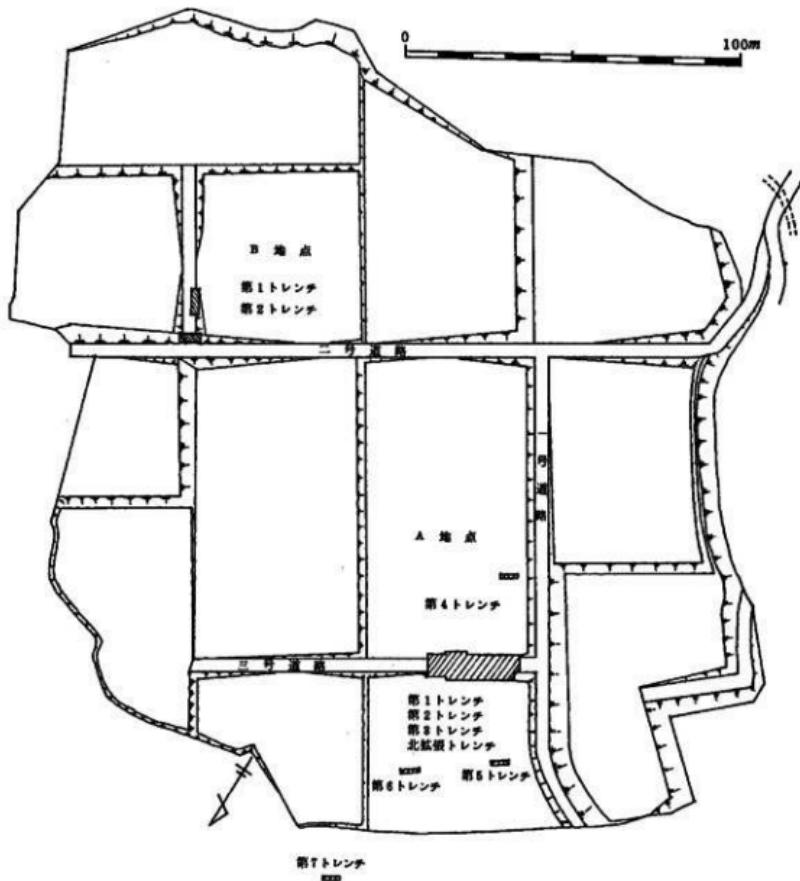
(番号は第1図に準ずる)

第1表 柳井谷遺跡並に周辺遺跡

# 志布志町



第1図 柳井谷遺跡並に周辺遺跡



第2回 地形図並に調査トレンチ配置図

遺跡名	内容の概要	発表年月日	主体者並に発表文献	担当者(敬称略)
山之上	石坂、塞之神式土器	昭和39年8月	志布志町教育委員会	河口貞徳外
小瀬	指宿、市来、草野式外	♦ 39年	同上	諏訪昭千代外
片野制穴	轟、西平式、骨角器外	♦ 39年8月	同上	河口貞徳外
橋之口	入来式	♦ 47年8月	鹿児島考古第6号	瀬戸口望
夏井ヶ浜	大石式、石斧、石錐外	♦ 48年5月	鹿児島考古第7号	瀬戸口望
宮前	岩崎式、住居跡外	♦ 48年8月	志布志町教育委員会	酒匂義明
倉野	押型文土器	♦ 48年12月	鹿児島考古第8号	瀬戸口望
白木八重	押型文土器	♦ 48年12月	同上	同上
板山	押型文土器	♦ 48年12月	同上	同上
出水	押型文土器	♦ 48年12月	同上	同上
志布志町の撲文遺跡の分布立地、その他	分布、立地、標高外	♦ 49年5月	鹿児島考古第9号	同上
倉園	指宿、岩崎式外	♦ 49年9月	同上	同上
野久尾	轟、首烟式外	♦ 53年8月	志布志町教育委員会	酒匂義明
別府	撚糸文、塞之神式外	♦ 54年3月	同上	県文化課
柳	弥生式、住居跡外	♦ 55年8月	同上	同上
蓑輪	弥生式外	♦ 55年8月	同上	同上
東黒土田	平持、塞之神式、轟式外	♦ 55年6月	鹿児島考古第14号	瀬戸口望
東黒土田	隆脊文土器、炭化物	♦ 55年12月	同上 第15号	同上
鎌石橋	隆脊文土器、細石刃外	♦ 56年2月	同上 第16号	河口貞徳外
上出水	石坂式、住居跡	♦ 56年2月	同上 第16号	瀬戸口望
小牧一号古墳	前方後円状、土師器外	♦ 57年10月	鹿児島県考古学会研究発表	瀬戸口望

第2表 発掘調査報告並に内容が発表されている遺跡

### 第3章 トレンチの設定、層位

#### 第1節 トレンチの設定

トレンチの設定は、第1章第8節発掘調査の経過(日誌抄)に若干述べた様に、工事計画で消失が確定的な部分の全面発掘と、合せて残存部分の包蔵状況と範囲を把握し、記録保存すると共に、遺跡の保護対策を目的に設定しなければならない。以下設定の規模と経緯を述べることにしたいが、一部、基準杭に関連した若干の手落が判明、複雑な拡張部分の設定が、いびつな形状をまねき、以後の整理作業や、記述に際して、明確を欠く結果をまねいてしまった。御了承をいたまわりたい。なお、これについては、第3図に図示した。



第8図 主トレンチの配置図

## 1. A 地点

この区域は、以前可なり表面散布が多く、遺跡の中心の一部と予測していたが、工事によつて一部破損はこうむっていたものの、幸い、残存していた。従つて、消失が決定している 3 号道路に主トレンチを設定し、周辺に間隔をおいた確認トレンチを配置設定することにした。

A-1 トレンチ 旧農道が通っていた（1号道路となる）部分が若干破壊されていたので、末端部分を約 8m 残し、8号道路に重行する長軸（西一東方向）で、4m-10m の設定を行つた。第 8 層上部に至り、西端寄りの出土が多く認められたので、残していた旧農道方向へ 2m の拡張を行つた。従つて、長軸は 12m となる。

A-2 トレンチ 工事用の基準杭の設置があったので、これを避けるために、A-1 トレンチ東端より 2m の間隔をおき、同じ長軸で、4m-6m とした。ところが 8 層上部に至り、A-1 東寄り、A-2 西寄りの遺物の出上がりが多いため、工事関係者に基準杭の移転を要請し（この時点で、2 本ある杭のうち、片方にあら基準を中心と間違えた結果、50cm のズレが判明した）、この部分の拡張を行い、A-2 拡張区とした。

A-3 トレンチ ここにも基準杭の設置があったので、これを避けるために、A-2 トレンチ東端より 2m の間隔をおき、包藏を確認する目的で、2m-5m の設定を行つた。ところが、第 3 層に至り、直立して出土した市来式土器をはじめ、可なりまとまった遺物の出土が認められたので、南、北側へ共に、1.5m の拡張を行つた。従つて、このトレンチは、5m-5m となった。なお、基準杭の移転があったので、残していた部分を、A-3 拡張区とした。

北拡張トレンチ 接続した A-1、A-2 トレンチ北側に、巾 3m の拡張を行つた。これは 50cm のずれもあるものの、遺物の出土状況も判断したうえでのことであつた。しかし、限られた日数と人員では不安で、一応の目安がついてから設定したのである。西端の部分を 2m 残し若干いびつになつたが、この部分は工事で壊乱を受けていたためである。全長は 18m である。

A-4 トレンチ 主トレンチの南 25m 地点に、東西の長軸で、1m-5m を設定した。

A-5 トレンチ 主トレンチの北 25m 地点に、東西の長軸で、1m-5m を設定した。

A-6 トレンチ A-5 トレンチの東 50m 地点に、東西の長軸で、1m-5m を設定した。

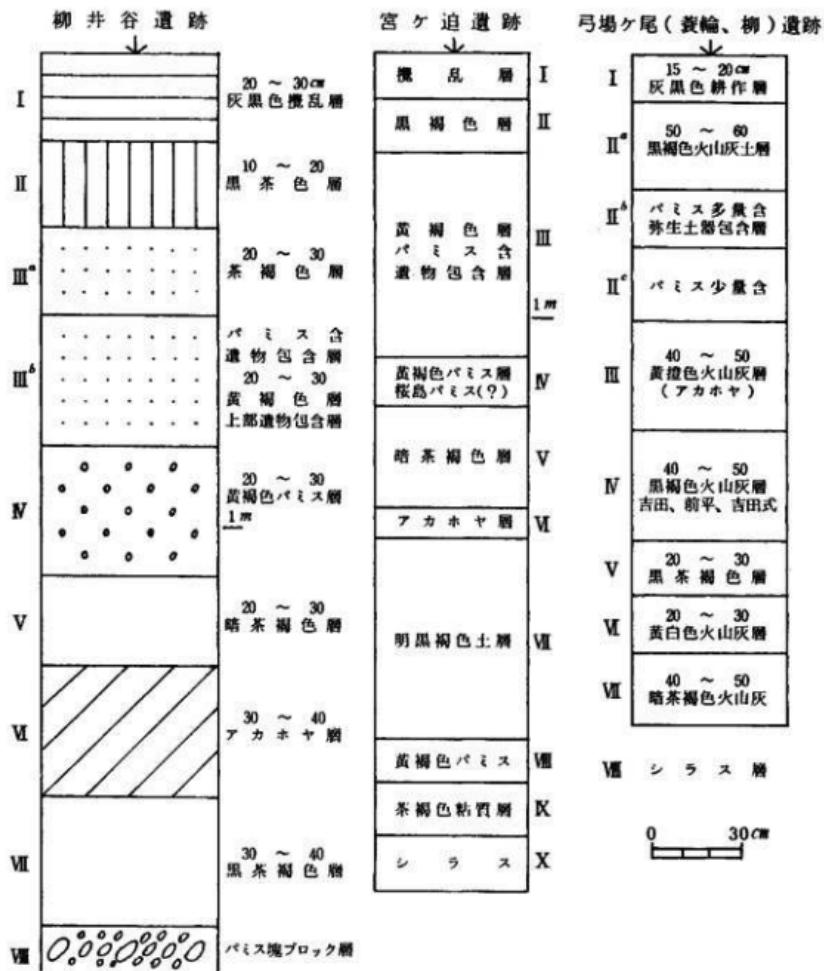
A-7 トレンチ A-6 トレンチの北 50m 地点に、東西の長軸で、1m-5m を設定した。

## 2. B 地点

この辺りの工事は、すでに 90% の進行がみられ、道路部分だけを残すのみであった。従つて、盛り土用として残されていた急傾斜面にトレンチ設定し、残存の状況を確認するだけにした。

B-1 トレンチ 4 号道路にそった急傾斜面に、南北の長軸で、2m-8m とした。

B-2 トレンチ 2 号道路にそった最高部分に、東西の長軸で、2m-5m とした。

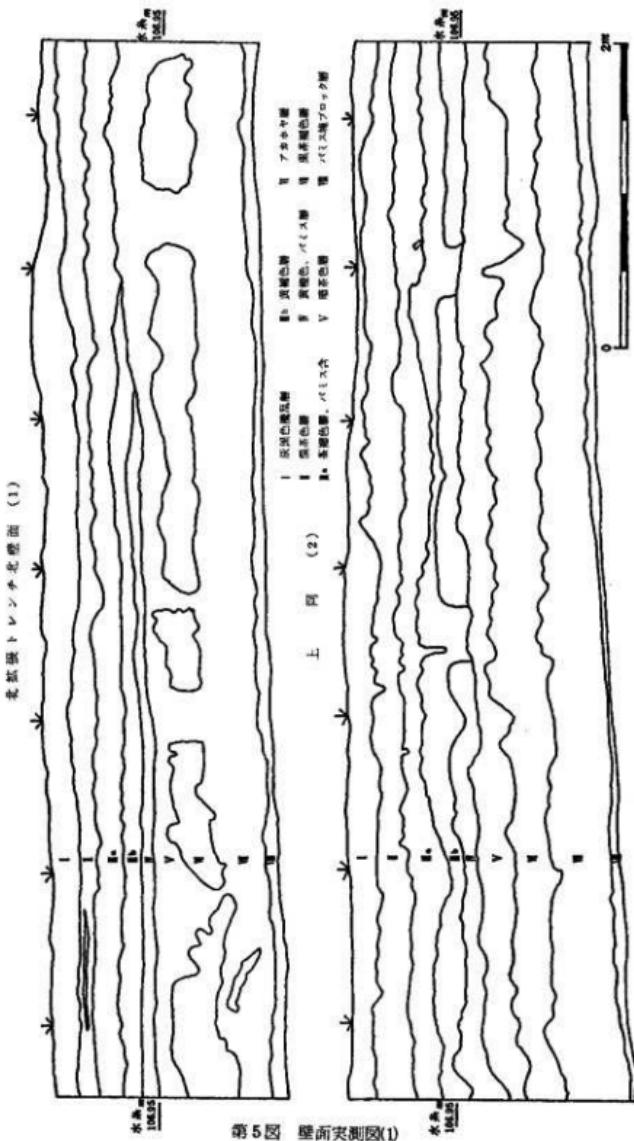


#### 第4図 基本順序

## 第2節 層位

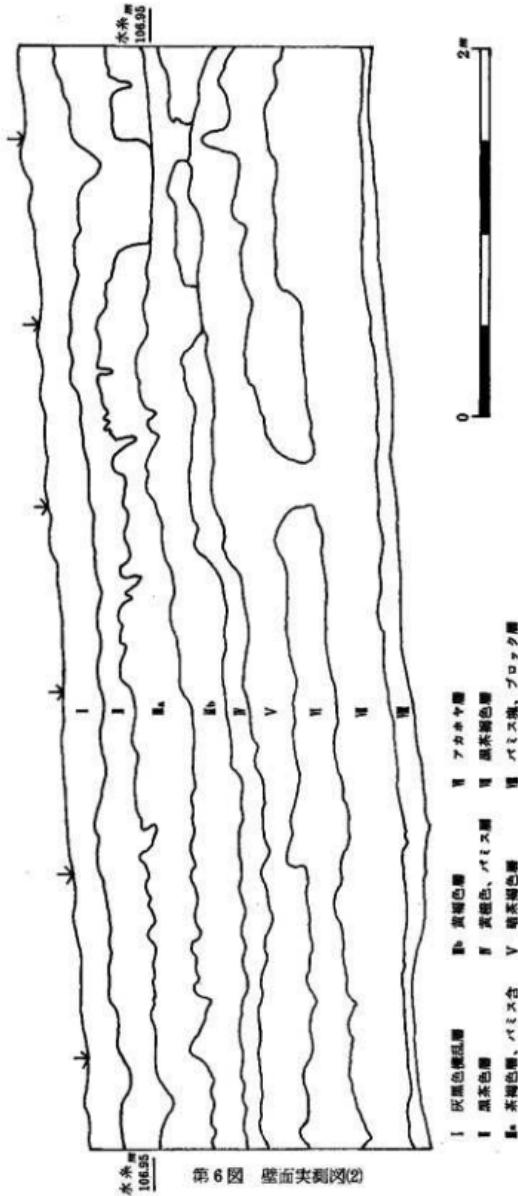
遺跡が広範囲にまたがり、更には、台地の原形が工事によって大きく変っていたので、層位は不規則且不明瞭であった。特に、主トレンチ設定以外の区域では、上層部の削取や攪乱がめだって甚だしい。以下、おおまかな層位について述べたいが、第4図は、志布志町弓場ヶ尾地区（養輪、櫻遺跡）<sup>(註6)</sup> 末吉町宮之迫遺跡<sup>(註7)</sup> を参考に、柱状図で比較したものである。参考されたい。

- I層 従来からの耕作面である。主トレンチは若干残存していたが、すでに削取されたり大きく攪乱した部分も多かった。灰黒褐色層で、桜島の大正噴火の白色砂粒を含みところによつては5cm前後の堆積を見るところもあった。20cm～80cmで、草木根も残り、遺物の混入が多く認められた。
- II層 やや黒味の強い茶褐色で、粒子が細かく硬い土質である。主トレンチでは遺物の混入が認められたが、A-4, A-5, A-6等はすでに削取されていた。表層との線引きは困難であったが、下部は平均的に平坦で、10cm～20cmであった。
- III層 この層が本遺跡の包含層であった。上層の浅い堆積のトレンチ（A-8トレンチなど）では、耕運機或はスキと考えられる縞状の爪痕が上面にとどいていた。なお、主トレンチでは、長方形状の芋つば跡が多く見られ、攪乱がこの層まで及んでいることが判明した。約10cm程で遺物の出土がめだった。上部は茶褐色で硬い土質であるが、下方に従い黄褐色となり、バミスを含みやや粗めとなる。20cm～80cmである。なお、下層との線引きは困難であったが、バミスの質等によって区分した。
- III<sup>b</sup>層 バミスの含有から区分したもので、上層より粘質は無い。黄褐色から下方に従い茶褐色となる。完形土器や直立て出土した市来式土器もこの層に底部をおいていた。この辺りでは、一般的に、縄文後期の包含層がこの層位までにしばられている。
- IV層 黄褐色をなしたバミス層である。噴出源を桜島などに比定されている火山灰で、約30cm前後の層をなし、下層との境いはやや平坦である。これまでの資料等によれば3520±100年、3620±140年などの年代測定もあるようである。
- V層 粒子が細かく下方に従い粘質が強い。下層部は赤味をおびている。20cm～80cmである。
- VI層 通称アカホヤと呼ばれる火山灰で、鬼界カルデラを噴出源に求め、これまでの資料等では、6000～6500年とする説もある。
- VII層 茶色から黒褐色となり、下方に従い粒子も細かく硬度を増す。この辺りでは、一般的に、縄文早～前期の吉田、前平、塞之神式土器などを出土する層である。30cm～40cmである。
- VIII層 今回の発掘は、この層の上部、あるいは確認のために約10cm程掘り下げた地点で終了した。いわゆる桜島バミスと呼ばれる火山噴出物で、黄味のある茶色の塊が、ブロック状に堆積している。これまでの資料では、約10,000年の測定が示され、隆起文土器、細石器等は、この層より下層に出土するのが一般的である。



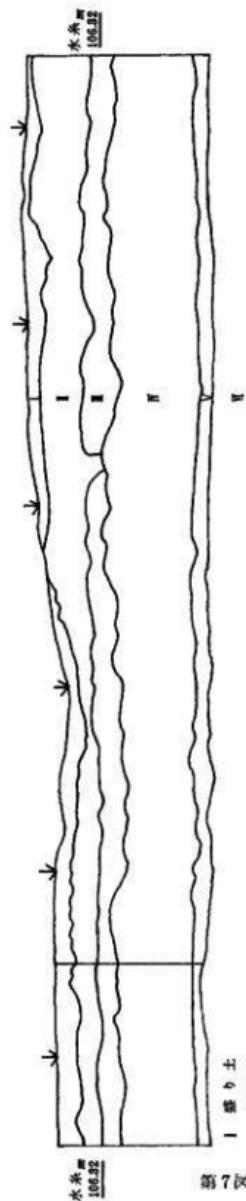
第5図 壁面実測図(1)

北芸強トレンチ北壁図 (3)

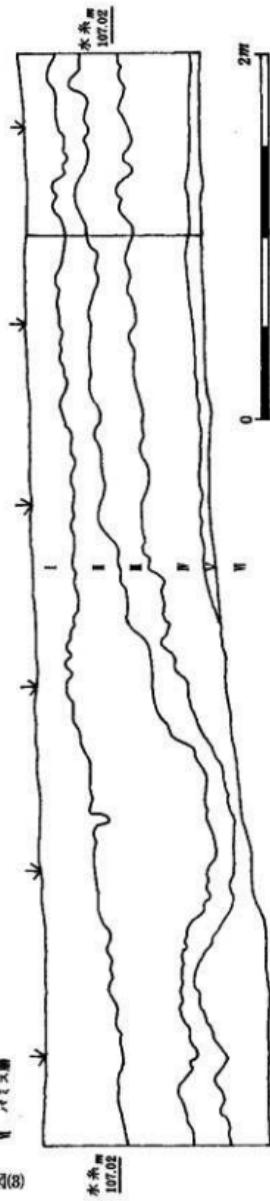


第6図 壁面実測図(2)

A-4 トレンチ北壁図



A-5 トレンチ北壁図



第7図 壁面実測図(8)

## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 遺構

主トレンチ(A-1~A-8並に北拡張区)には、かなり石片や礫等の検出がめだったが、遺構と考えられるものは、石組遺構が2ヶ所で、他のものは全て人為的ではなく、むしろ散乱の状態であった。なお、B-1トレンチに1基の石組遺構があり、合せて、3ヶ所である。

ピットについては、出土遺物の多いことも考え合せ、注意深い掘り下げ作業を行ったが、擾乱や耕作が遺物包含層をかすめている関係上、層位や土質にみだれが生じ、なかなか困難であった。唯、終了間際に1ヶ所認められたので、以下にこれらの内容を述べてみたい。

#### 1. 石組1(第8図の1)

A-1トレンチ3層に検出された、3個共に石皿の欠損品である。最も大きいものを中心に、略小字状の配石である。中心の石は花崗岩で、縱割れになり、割れ面を上向にしてあった。割れ面の風化が激しく、ほろぼろ剥げ落ち、丸味の形に変化していた。右側の石も花崗岩である。複数以上に割れたもののうち、約8分の1程度と推定できる。稜線の丸味が良く、入念な仕上り状況が見られる。左側の石も同じ花崗岩である。他に比べるとやや薄手のものであるが、石皿としての仕上りは良好で、他の二石同様、深いくぼみ部をもっており、長期の使用をうかがい知ることができる。

#### 石組2(第8図の2)

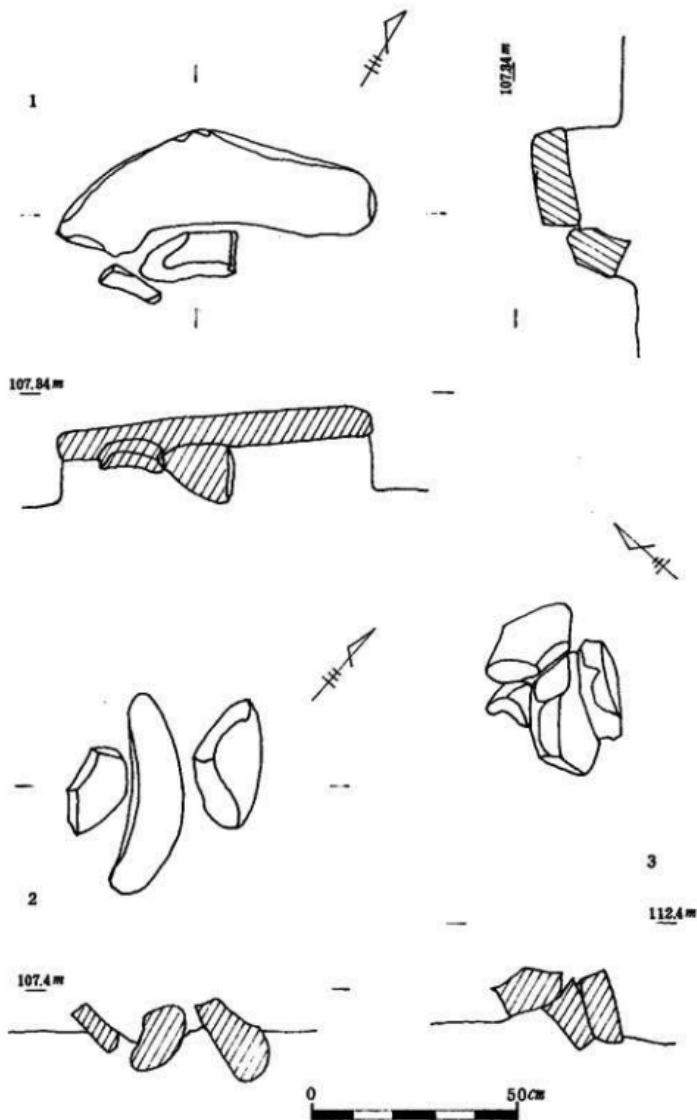
B-1トレンチ3層に検出された。共に砂岩の角礫である。最も大きい石を中心にして、それに寄りそう形で、左右1個づつ立て、一石を中心と左側の石に掛けた状態に配石されている。

#### 石組3(第8図の3)

A-1北拡張区に検出された。平面く字状の最も大きい石は、上面下面共に扁平で良く整い、長軸78cm、最大巾24cm、厚さ10cm、重さ25kgと大型で重量感がある。やや東西の方向(台地の傾斜面と同方向)に軸を延し、石の斜きは地層傾斜と同一で、左右の斜きも無く、ほぼ水平に配置されていた。南脇に小角礫2個があったが、いずれも打面を有していた。大石の上面には、わずかな敲打痕を認めることが出来るところから、あるいは、蔽台(台石)として使用した可能性を多分にひめている。

#### 2. ピット

A-1北拡張区の4層上面に至って確認したものである。これは、壁面の実測用として、北壁面にそい巾1mの溝掘り作業中、判明したのである。この時点では、一応、発掘調査の日定も近づいたので、無遺物層と想定し、若干荒掘りを行っていた。8層下部から4層上部に至り、黒川式土器の検出があり、土器群の西脇に認められ、径20cm、深さ87cmであったが、深さについては、16cm程掘り下げた時であったので、もっと深かったとも想像できる。内部は、パミスを含むやわらかい土壤が認められた。柱穴の可能性が強かった。



第8図 石組造構実測図

## 第2節 遺物

### 1. 土器

#### 第1類

口縁部に指頭による太形凹線文を施した土器である。量的には多く認められないが、第9図の1が最も端的な資料である。復元口径22cmを測り、器高は30~35cmであろう。器形は、頸部がわずかにしまり、直行状に立ち上る平縁で、頸部のふくらみはさほどない。口唇に平坦部を有し、中央に浅めの細い沈線がある。口縁を回っている太形の凹線文は、口唇より垂直状に施されて、ゆがみや間隔に乱れがない。反さ4cm、巾1.0~1.2cmを測る長梢円形で、人さし指大と合致している。この押し引き圧痕は、5cm下方の頸部から徐々に押し引きをはじめ、中央部で最も強く、口唇に至る辺りで指先の力をねいでいる。従って、下辺と上辺は浅く、中央部分では約0.8cm程の深めの圧痕となっている。胴部には、器面調整を行った後、先端の細い棒状施文具で、押し点からはじめる浅めの沈線3本を、横位に平行して画いている。沈線の横行はやや蛇行状で粗雑な押し引きである。頸部の器面調整は、ハケ状によって入急な仕上りが見られるが、胴部より下方は、貝殻腹縫による横位、底部からは斜位の調整が行われてはいるものの、一般的に雑である。内面もほぼ同様の調整痕である。焼成は良好とはいえない。内外面共に暗茶色で、外面胴部部分と口唇外縁の一部に黒ずんだスヌ状の付着と、内面底部部分に焦げつきが認められる。この外にも小片数点が表層や2、3層の擾乱層にあった。

#### 第2類

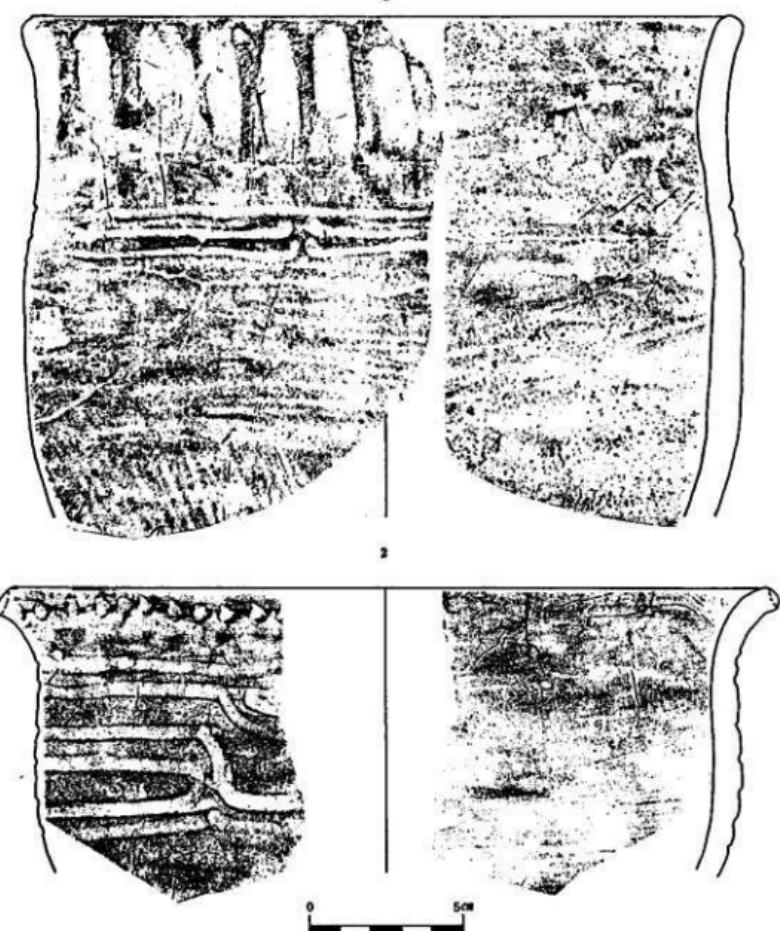
口唇部の外縁に指頭状の圧痕を連続して回らし、器面も同様の施文具で太形凹線を描いた土器群である。器形については、すべてのものがまとまりに欠けた出土で判然としないが、第9図の2にわずかな口縁部の外反がみられるのみで、他は外開きや内湾のない直口状に立ち上る平縁である。なお、第10図の1、10等に若干の胴部のふくらみが見られるが、胴張りとしてはわずかなものであろう。口縁部に施された指頭状の圧痕は、第9図の2、第10図の2、3、18、14等のように、口唇の外縁にやや弱めに連続して施したものや、第10図の1、5等の様に、口唇の直下に一定の間隔を保ち強く深く押圧を加えたもの等があるものの、基本的には口縁部に集中して行われている。胴部部分の文様は、指頭あるいは先端丸味をもつ棒状施文具で、横行する平行直線、あるいは曲線や斜行線の組合せ等を描いており、一般的に単純で変化が少い。この類に共通する一つとして、器身が調い焼成が良く、器面の調整が良いことがあげられる。一部半坦状を呈する口唇もあるが、おおかたのものが丸味をもち良く調い、口縁部、頸部、胴部と器身も一定し、厚薄の差がほとんど無い。器内外面の調整もまた入急な仕上り状況である。粘土も精選され砂粒も少く、整形後の調整痕はハケ状によって消され、すべすべする程度の仕上りである。この他にも、擾乱層出土土器として取り上げた第11図の8、第12図の1、3、5、9等がある。うち、第11図の6、第12図の3は、第10図の5と同一個体の破片とも考えられるが接合しない。第11図の9は、口縁部から直下に二条の浅い沈線と長梢円形状の押圧痕が認められ、器質、焼成などから、第1類に類するものであろう。

### 第8類

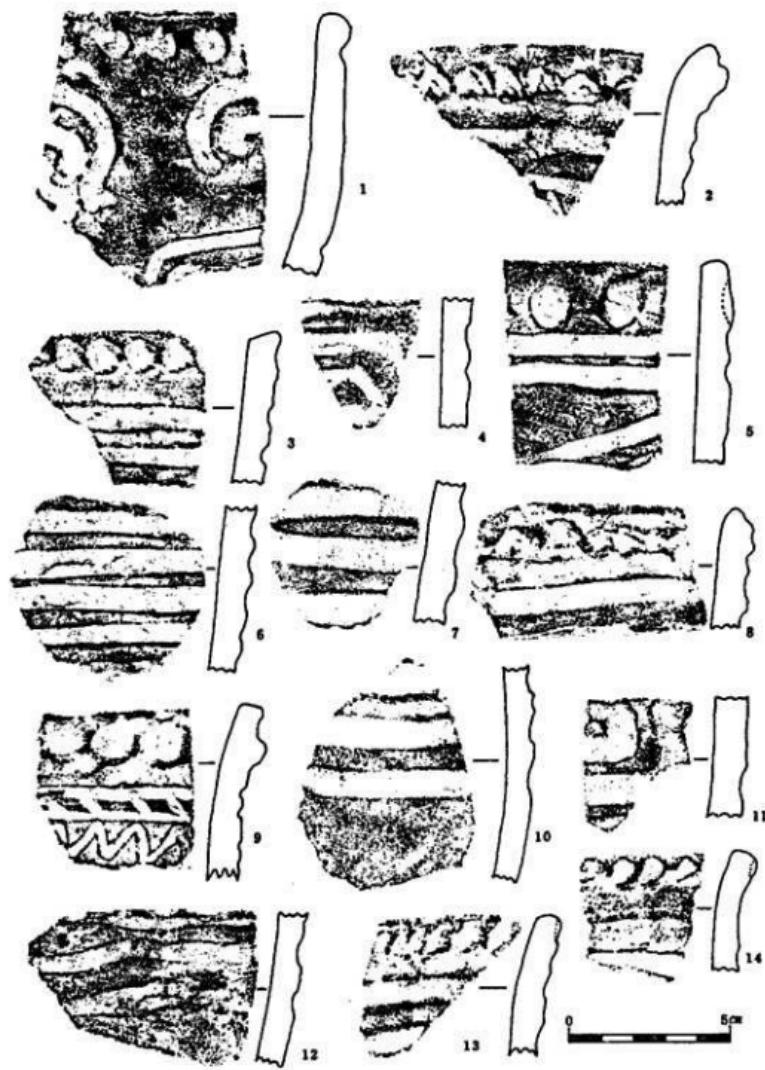
この類は、器面に細線による直線文や曲線文を描き、あるいは刻目や連点を併用する文様構成の土器群である。破片ばかりで器形を明確に示すものは無いが、胴部がやや張った深鉢形が主体と推定できる。口縁部の形状は、平坦なものや波状、あるいは、山形状の隆起をもつもの等が見られる。口縁部平縁のものとしては、口唇部先端に貝殻腹縁による刻目を施したもののが4点、無いものが9点である。ゆるやかな波状をもつ口縁は4点、山形状に大きく突起するものが1点である。

平縁で口唇部に刻目を有する土器では、第18図の1が代表される。これは、口縁部がやや外反し、頸部のしまりはあまりない深鉢形である。刻みはやや粗雑で、横走する深めの並行沈線と斜行する平行線が連結している。この外にも、第14図の8でも見られるように、唯且に頸部に横行並行線を基本に、頭部の文様構成もごく単純に描かれる傾向にある。刻みを有しない平縁では、第18図の7や第14図の2が示すように、口唇部の形状に若干の差違はあるものの、器形や文様構成の点では類似している。わずかに波状をなす口縁では、第14図の1や第15図の1が適切な資料である。前者はやや外反する口縁で、後者はつつ立ち状のものであるが、口唇部直下から頸部に至る辺りに並行沈線を施し、やや下った胴部部分に至って組合せ文様帯となる。なお、第16図の4のように、波状する隆起部の先端部に太めの押圧を施すものもあり、この場合、頸部がやや張り口縁部が大きく外反するもので、器形はやや大形となる。山形状の突起部を有する1点は第16図の2である。この土器は、他のものに比べ器巾が特に厚く、可なり大形と考えられる。器形は口縁部が外反し頸部が張るもので、文様構成も複雑化している。突起部先端の直下に、径1.5cmの穿孔をうがち（上部を一部破損している）、直線、曲線の組み合せ文様を施しているが、この文様帶は、可なり頸部以下の辺りまで延長しているようである。

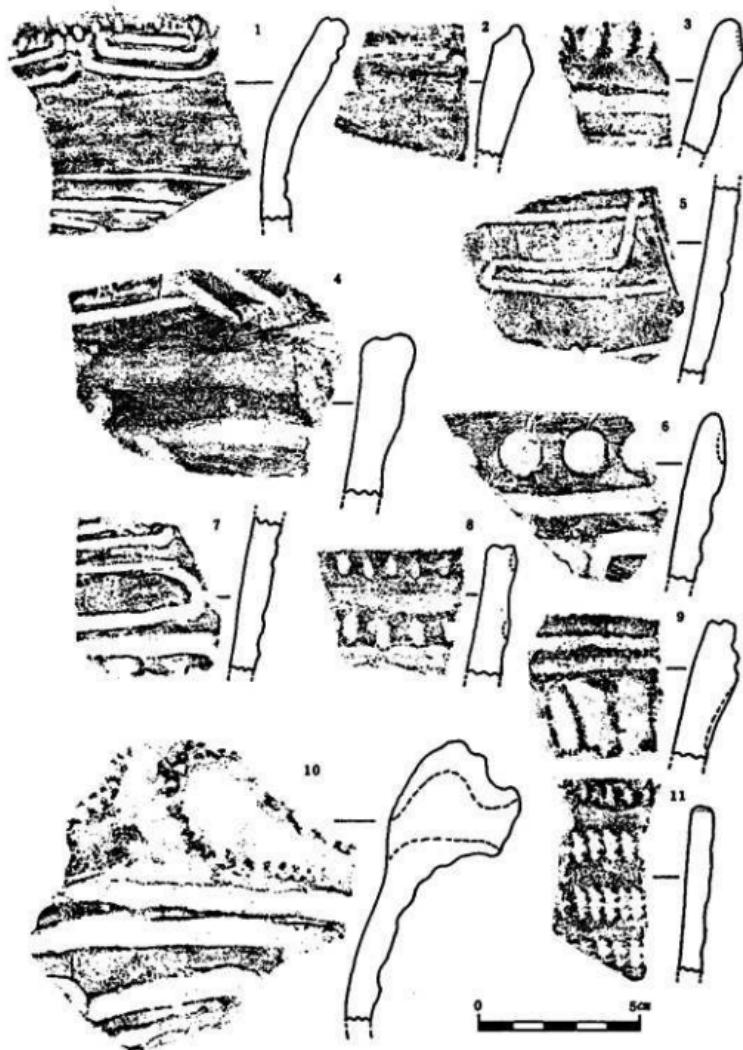
この外に、文様で特に目につくものとしては、第15図の9、11をあげることができる。この2点は、器巾の点などあるいは同一器体のものと推定できるが、他のものと比べ特に尚手で、施文構成も特異である。長方形を更に一回り大きくなした長方形で囲む文様帶で、沈線も細く、極小の線は1.5mmを測る。これは施文具を別にしたものではなく、押し引きの強弱によって生じた造形であろう。第14図の9のように、雲状の文様を配したものもある。上方より徐々に器巾を増した頸部から底部に移行する辺りの破片である。器巾から推定して可なり大形のものであろう。横行線1条を配し、その下方に、押し点からはじまり押し点で終る雲状施文を、不規則に配置したもので、施文工具はやや太めの棒状先端である。沈線と連点を併用したものとしては、第14図の11、第15図の8がある。前者はやや外反する器形で、口唇部とやや下った器巾を増した突起部にある。口唇部の連点は上縁と外面に相互状の配置状況がみられ、下方の連点も不規則で調っていない。後者は可なり厚味を有する内湾状の口縁部破片である。口唇部に平坦面があり、一条の深めの沈線を施し、沈線より外方部の口唇に細かな連点を施し、頸部は4条沈線の、最下段面に不規則な連点を配している。これより下方は、方形状に描かれた文様帶と考えられる。



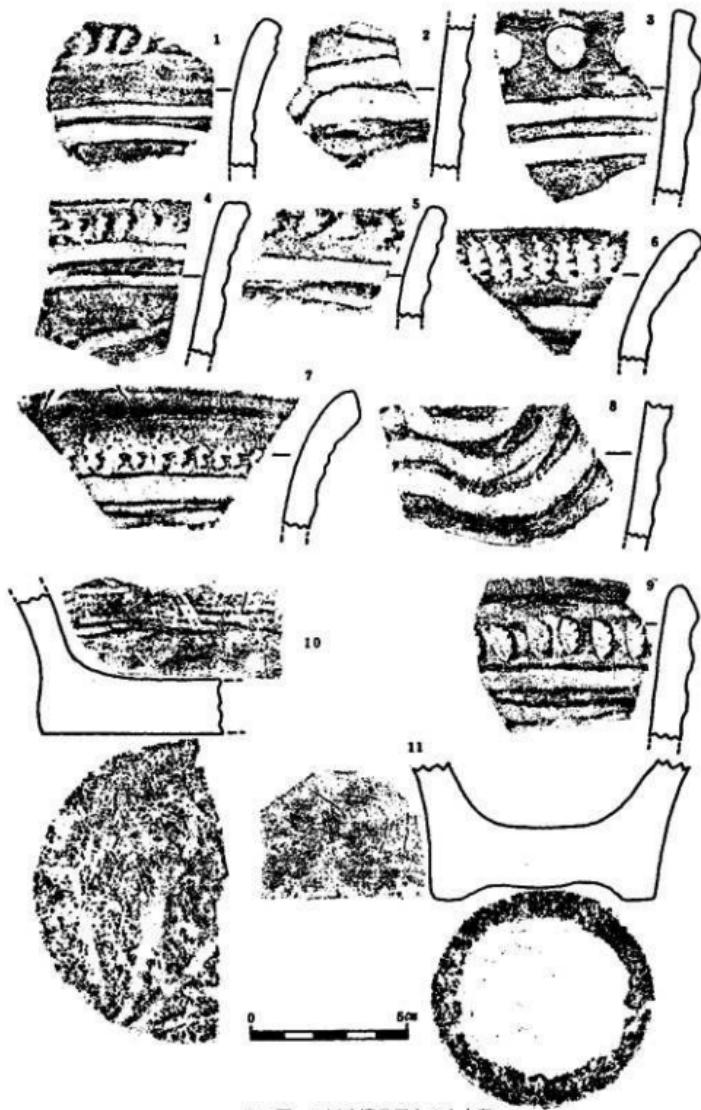
第9図 第1類土器



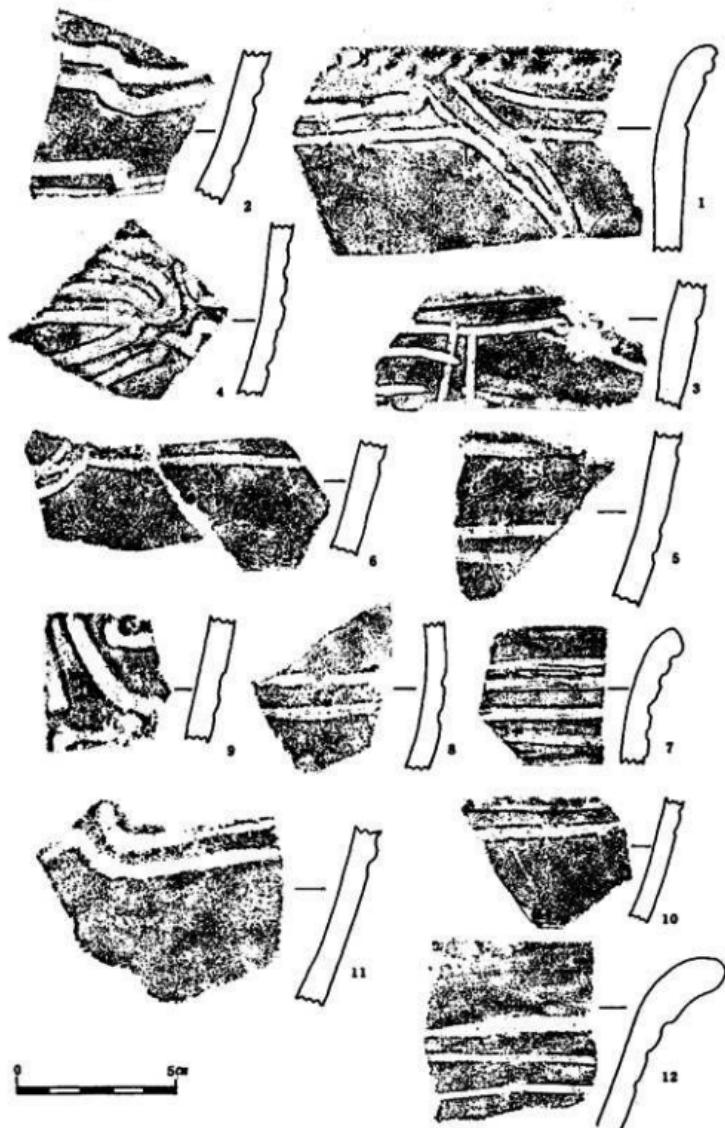
第10図 第2類土器



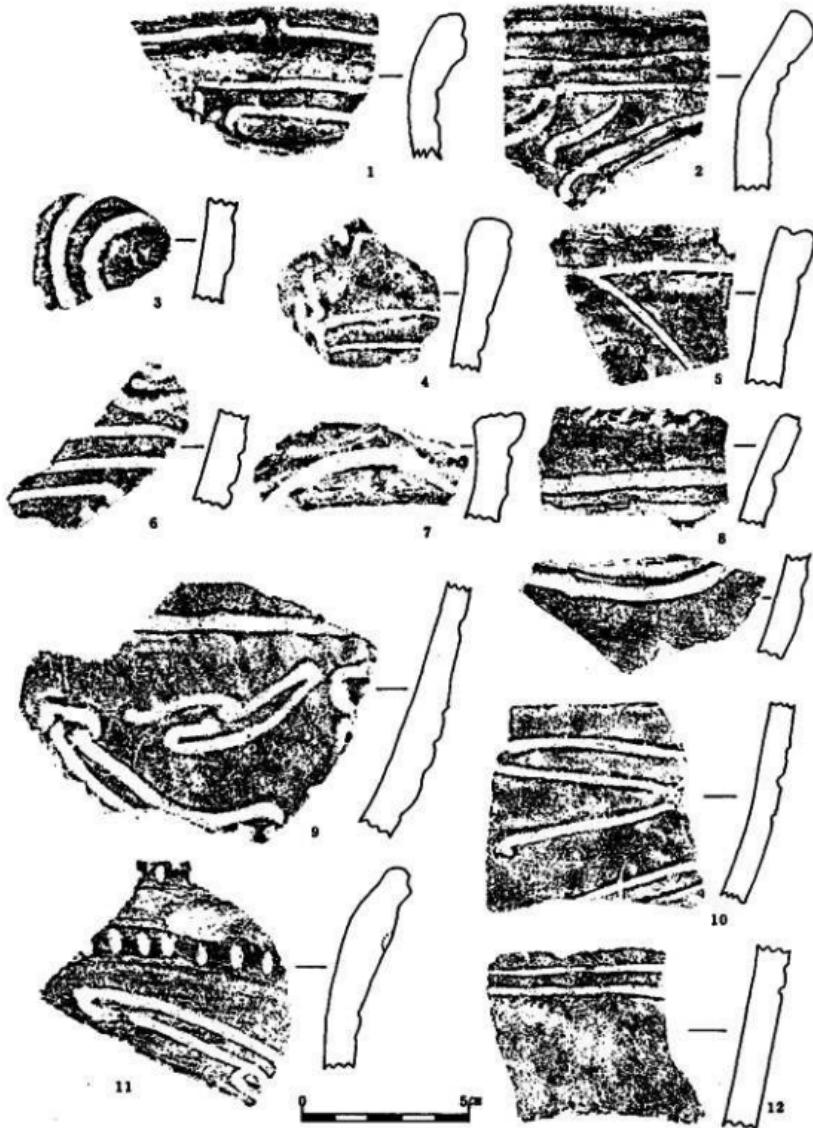
第11図 2層(擾乱層)出土土器



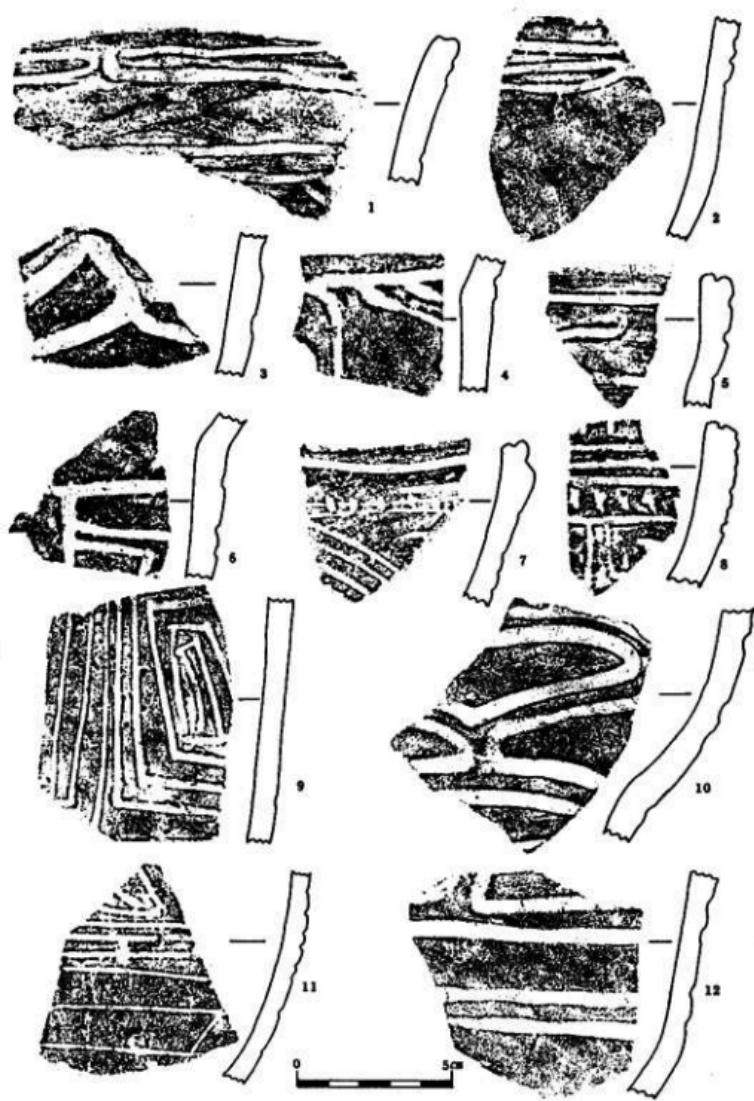
第12圖 2層(擾亂層)出土土器



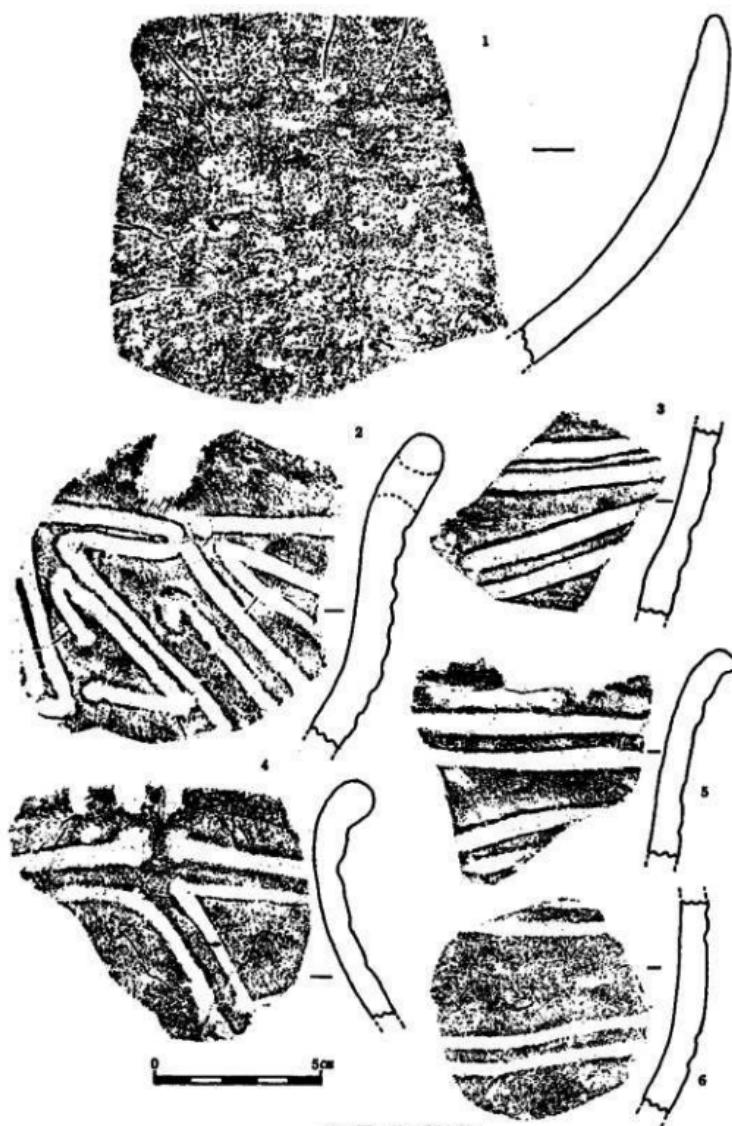
第18図 第3類土器



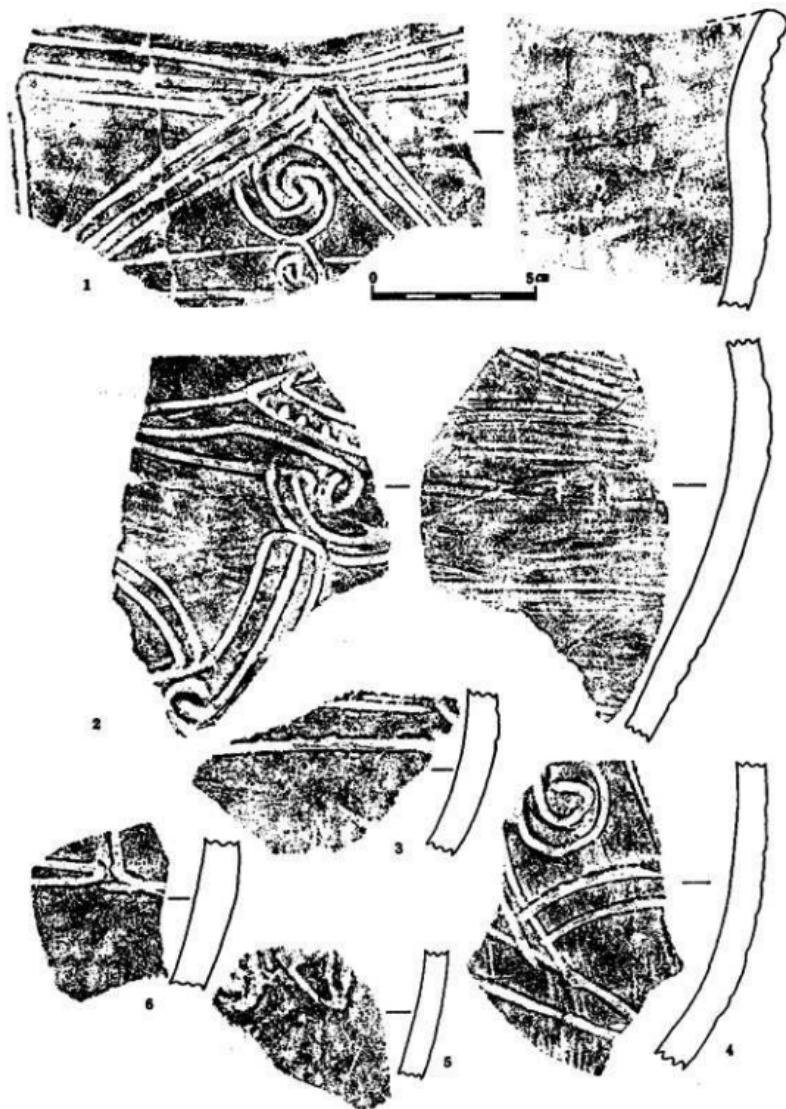
第14図 第3類土器



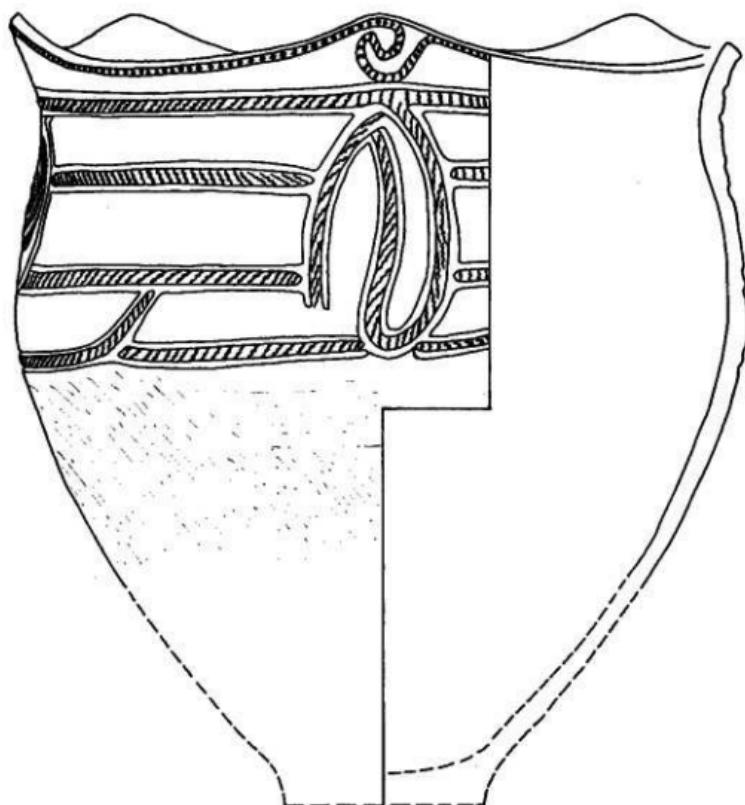
第154图 第3類土器



第16図 第3類土器



第17図 第3類土器



第18図 第4類土器

この類では精製と粗製の区別をはっきり認めることができる。概して、器巾もあり沈線が太いものは、砂粒などの混入が多く、粗めの器面調整痕をそのまま残し、焼成も良好とはいえない。一方、薄手で細かい沈線を施す土器群は、器面調整も良くととのい焼成も硬い。特に肩部より上部部分は、貝殻腹縁による調整痕をナテ状による二次的作業で全て消し、研磨にかかる表面仕上げを行っている。良好なものとしては、第15図の7、9（同一器体と考えられる）、第17図の1～14（同一器体）がその一例で、特に後者の場合、内面の上部部分まで入念な再調整を観察することができる。

#### 第4類

第17図に図示した完形土器である。5ヶ所の山形突起をもつ深鉢形で、口径89cm、復元器高44cmを測る。肩部わずかに張り頸部のしまりは少く、外反する口縁の角度や、底部に延びる線は共になだらかなカーブをえがいており、外見的に佳麗な感じの器形である。なお、器巾についても、頸部に極くわずかな厚みを有する程度で、他の部分は總て厚薄の起伏もない。

口唇部に施文された貝殻腹縁による刺突文は、平坦を有する外面突部に施したもので、沈線を伴ずやや強めに刺突を行ったために鋸歯状を呈している。この鋸歯状も山形突起部分に至って下方に向い巻き返し状のアクセント文様に変化をつけている。鋸歯状部分ではっきり認められない貝殻腹縁も、この突起部分辺り（器面部に移行する）から、アナグラ貝属特有の腹縁文様（凸凹）を二～三ヶ所認めることができる。以下、やや太めの平行する二条沈線を施し、沈線間に貝殻腹縁による擬似繩文を埋めた四条を横走させ、上位の文様帶は、突起部直下部分でやや長めの逆の字状の変化文様となし、二、三条は並行して接続し、最下段の文様帶は中間附近で上向きに上位文様帶に接続している。

口縁部から肩部までの器面調整は、貝殻腹縁によって調整したあと、細かなハケ状による再調整を行い、一部頸部にかすかな粗痕を残すものの、全体的に良好な調整状況がうかがえられる。肩部以下の面では、一部上部に横行する貝殻腹縁による調整痕があるものの、全般的に割行を主体にした調整で、良く整っている。内面は横行を主体にした調整痕で、口縁部の部分は器面同様良好である。

#### 第5類

第19図は磨消繩文や擬似繩文を有する土器片である。うち、1のみがおおよその器形を推察できるが、他は總て小片であるので概略を知ることができない。

1は比較的精製された黒色の研磨土器である。く字状に屈折する口縁部のほか、肩部において更に大きな屈折部のある浅鉢形で、復元口径は86cmであろう。頸部から肩部一帯にやや厚味をもつが、屈折部より底部に移行する辺りから徐々に器巾が薄手になる。肩部に浅めの沈線三条を施し、沈線間に空間二条を繩文で埋め、他面は良く研磨されている。2は、三角状突起の上面、3、4、5、7、9は磨消繩文が器面部分にあり、うち、9の場合施文区域の広いことがわかる。6、10は、擬似繩文と考えられ、8は、黒色研磨土器で、頸部の沈線間に繩文を見ることができる。

第20図の1は、口縁部に磨消繩文を有する研磨土器で、復元器高81cm、口径22.6cmを測る。部分的に接合したので胴部以下の器形ははっきりしない。頭部は球状に張り頸部のくびれは無く、直口する平縁である。口縁部に肥厚部をもうけ、口唇部は蒲鉾状の丸味で調っている。文様帶は肥厚部だけに限られている。頸部に一条の細沈線を回らし、一条は口唇に並行し、複数以上と推定できる山形突起状の立ち上りを描き(2ヶ所は確認されている)、突起部直下に2ヶ所の押し点(径0.5cm程で深い)を配している。沈線間に隙間なく施された繩文は、細目で整いがあり左下り斜位に施されている。器面の研磨状況は、総ての調整痕を消し入念な研磨をくり返したため手ざわりは滑らかで、特に良好な仕上がりがみられる。器底は下方に從い餘々に厚さを増しているものと考えられる。色調は、外面暗茶色で胴部部分にはヌスの付着と考えられる黒ずんだ部分が回っている。内面はやや外面に比べると粗で黒褐色である。

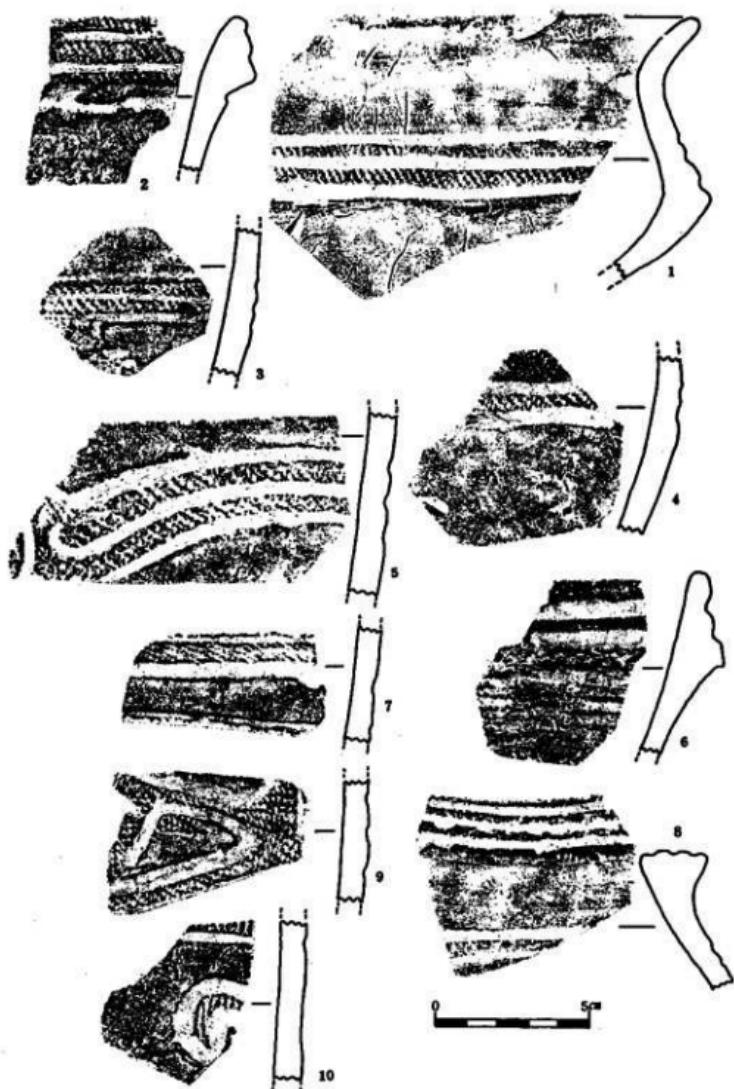
#### 第6類

この類の特徴は、口唇部を文様帶にしたもので、第21図～第23図がそれである。出土遺物がいずれも小破片であるため、形態の全容を知ることはできないが、口縁部だけを見るかぎり、平縁が多く、波状を呈するものが若干あるようである。文様帶をなす口唇の形状は、直口状、わずかに外反するもの、やや広めで外傾するもの、三角突起状に文様帶を広くしたもの等多様である。口唇下方の器面には施文は無く、唯單に、横位を主体にしえ一部斜位の貝殻腹縁による調整を行ったのみで、概して、粗である。

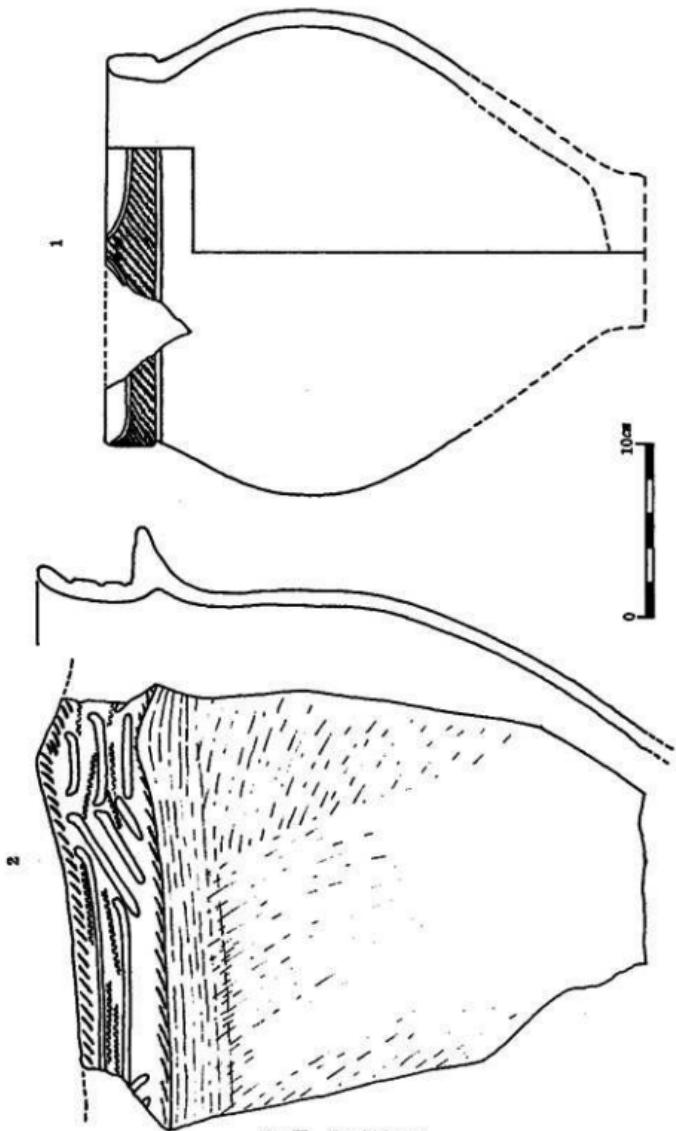
第21図の1は直口状で口唇部は外傾し、棒状先端によって浅い沈線を施したもので、器面は外面は良く内面は貝殻腹縁による調整痕を深めに残している。2は、口唇部にわずかな肥厚帯をつくり、棒状先端によって部分的な施文を行っている。器面は両面共に粗雑な調整痕を残す。3は、口縁部やや外反し、口唇上面に浅い一条の沈線を施したもので、4は、やや口唇上面部を広めにし、連続する貝殻腹縁による刻みを施している。

第22図は、文様帶の口唇部をやや広めにしたもので、断面三角状を呈するため、施文区域が広がり、それなりに複雑な文様構成を示すものである。1は、やや深めの広い二条沈線を施し中央の沈線間に貝殻腹縁による調った押圧痕を連続に、両外側帶は刺突点で飾り、2は、同心円状の沈線や深く太めの押点を中心配し、両外側面帯に傾きの大きい貝殻刺突を行っている。3は、特に文様帶区域が広いため、文様もそれなりに太めである。4は、沈線、押し点、連点、貝殻刺突文等の組合せ文様で、5は、深めの沈線一条の両外側帶を貝殻刺突で飾り、6は、沈線二条を配し、中央帶を連点、両外側帶を貝殻腹縁刺突、7は、単純に中央部のみに半月状刺突痕を施したものである。8は、外傾する平坦面が広く貝殻刺突が主体で不規則な施文が見られる。9は、文様帶の区域が狭く単純に貝殻刺突を一条で飾る。10は、やや太めの沈線一条と、貝殻刺突、半月状連点などの組合せ。11は、沈線刺突痕共にみだれがみられるものである。

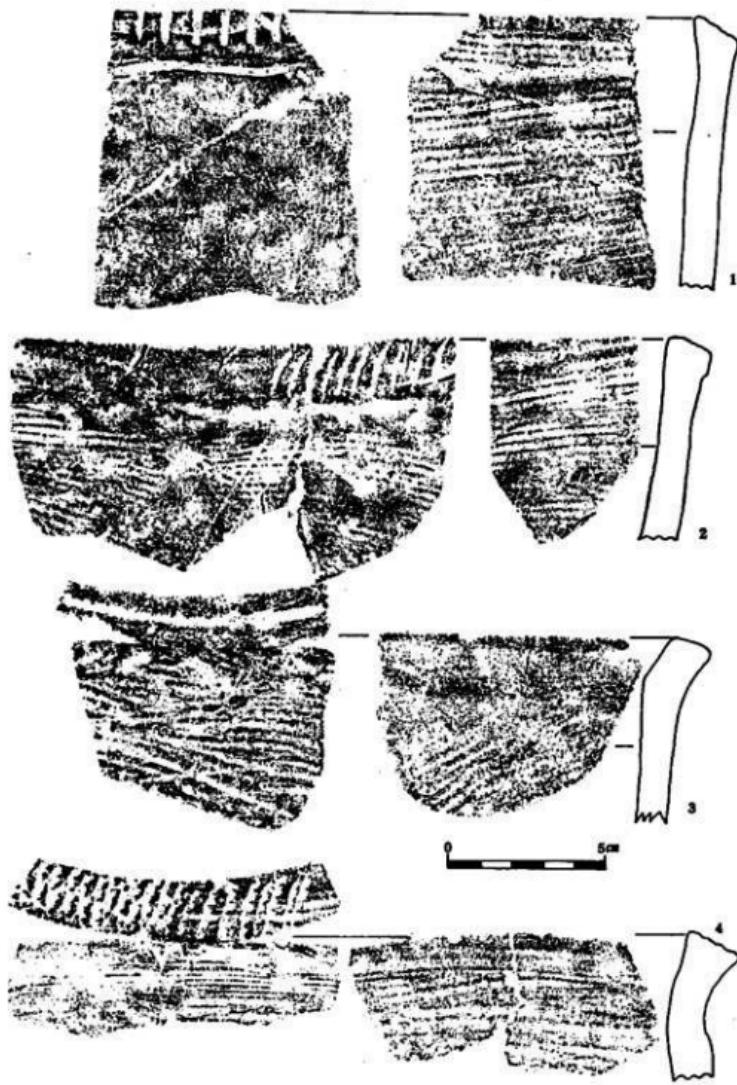
第23図も前図と大差のないものである。1は、やや深めの刺突点を連続して中央部に配している。2、3、4、5、6は同一器体である。7、8は、沈線一条に連点を主体にしたもので



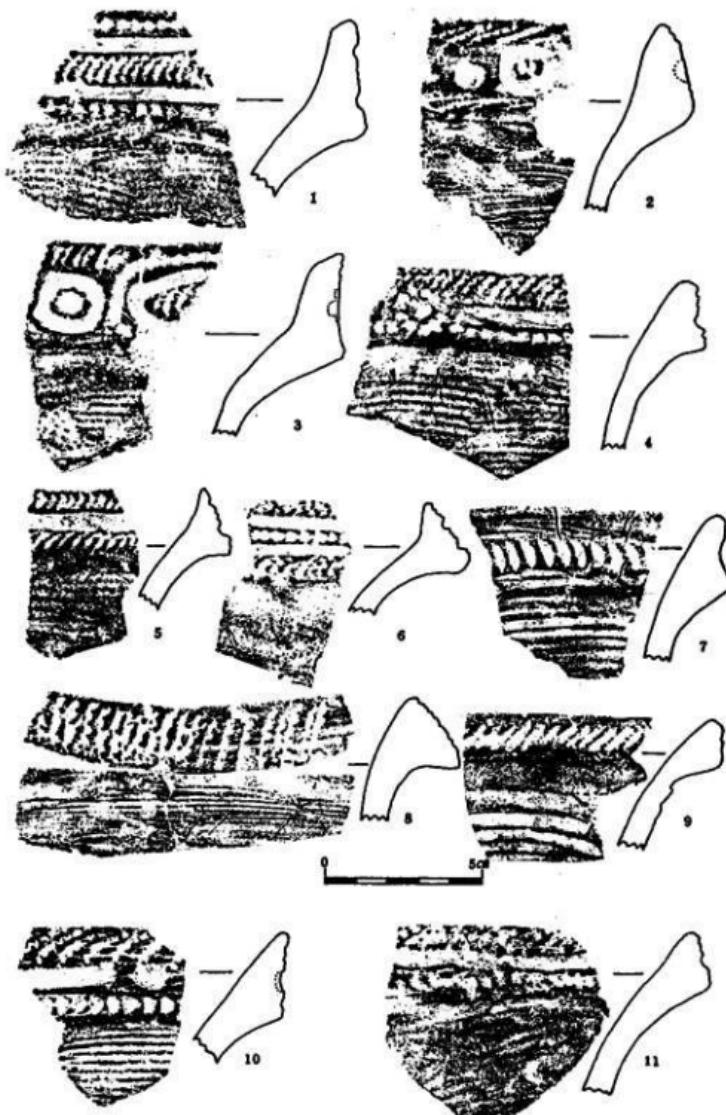
第19図 第5類土器



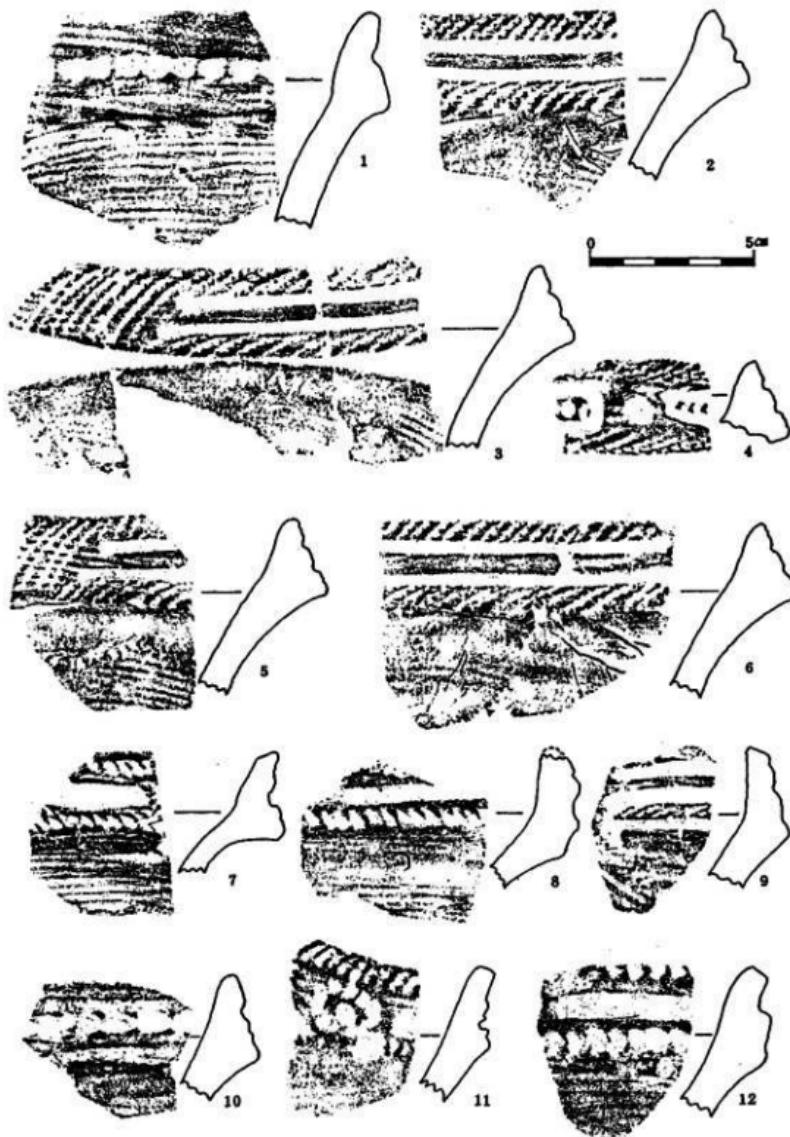
第20図 第5類土器外



第21圖 第6類土器



第22図 第6類土器



第28図 第6類土器

9は、三条の沈線をもつものであり、この類では唯一であった。10は、中央部に連続する深めの押点を配し、11は、波状口縁をなすものである。12は、特に広い沈線（指頭状）を中心的に配し、連点を回らしている。

#### 第7類

この類は、一般的に市来式と総称される土器群で、本遺跡の出土品に最も多く見る形式である。遺跡発見以来遺物が数多く採集されているが、土器の場合、他の形式の占る割合よりも、この類の量がはるかに多い。従って、調査以前から予測していた出土状況である。この類を端的に示すものとしては、第20図の2、第24図の1、第26図等で、以下口縁部のわりと調べた破片を集めたものが第26図から第31図までである。この他にも口縁部の破片や頭部部分などが多く見られたが、特徴をもたないものや小片であるので、これらについては省略することにした。

第20図の2は、同一器体と考えられる小破片が可なりあり、一応接合を試みたが復元できなかった。しかし、器形を知る好資料の一つである。波状隆起4ヶ所をもつものと考えられ、口径30~35cm、器高50cm前後の大型土器であろう。口縁部の形状はこの形式特有の代表的形態が見られ、特記するとすれば、外方に突出する屈折部の形が可なり大きく、良く整っていることである。文様は、口縁部だけに太めで深い沈線と貝殻刺突文の組合せで、屈折部より以下の器面は上位が横行、頭部より下方は斜位の貝殻腹縁による刺痕が見られる。概して焼成其の他等は良好である。色調は、暗茶色で頭部にススの付着が見られる。

第24図の1は、A-8トレンチの3層下部に底部を置き、直立の形で出土したものである。一部不足した部分もあったが、復元できた唯一の市来式土器である。4ヶ所の山形隆起部（波状にちかい）をもち、正方形の口縁である。口径24cm、器高36cmを測り、屈折部の突起は割りと小さく、口縁部の立ち上りは直口状で、4ヶ所の隆起部先端だけがやや外開きになっている。文様は、隆起部直下に6条の短縦列沈線を基準に、平行沈線、貝殻腹縁による刺突文の組み合せ構成である。屈折部直下の頭部にも刺突を一条回している。器面の調整は、屈折部より刺突連続文までの頭部を横位に、以下斜位で行っている。内面は、隆起部下方に、外面同様の短沈線の縦列を施し、他を斜位で調整している。焼成はもろく、復元作業が手間どり一部不足したのもこのころさきに一因があった。

第25図も適切な資料である。出土状況は図版でも示したように、器面を上方に向かう単独で出土したため、接合するものは他に無かった。復元口径28.5cmを測る。く字状屈折も大きく口唇も外方に開き、4ヶ所の隆起は波状でゆるやかである。文様は、隆起部直下にやや太めの押し点からはじまり押し点で終る二条を基準に、同じ作法の斜位の平行と並行を描き、上下に刺突連続文を配している。刺突の間隔は広めで整っていない。頭部に施した刺突連続文は、屈折部の下縁にある。器面の調整は斜位を相互に施している。内面も同様で共にやや深めである。焼成は、やや良好でかたい、黒褐色である。

第26図に示したものは、この類の口縁部破片である。いずれも口縁部を文様帶に、平行沈線貝殻腹縁による刺突連続文を施していることに変りはない。うち、特に述べるとすれば、4.

6のようすに、指頭状の太形沈線を配する極めて大形と考えられるものや、7のようすに、沈線を複雑に描いたものが含まれている。なお、屈折部下方の頸部部分に、刺突連續文の有るものと、無いものがある。焼成は、1、2、6等が良好である。

第27図も口縁部破片である。うち、1、3、5、6等は可なり大形のもので、總て山形隆起を有し、文様構成も太めに施されている。器形が大形化しているので、焼成の点では良好で、特に、1などは黒味を全く見ない茶色で、胎質も硬い。2、4の屈折は退化したものである。

第28図も口縁部破片である。うち、6、7が大きな屈折部を有する大形のものと考えられ、他は屈折の退化したものである。特に、1、8等は可なり大形と考えられるが、突出は無いに等しい。それに、文様構成に沈線を伴わず、貝殻腹縁による刺突文のみで器面を飾っている。焼成は、1、8を除き他は良好である。

第29図も口縁部破片である。いずれも山形隆起部を有するもので、うち、1、2、4は、その形状から可なり大形と考えられる。特に、4の場合、突起部の立ち上りが他に比べて鋭く、器巾も厚い。文様についても同様のことが推察できる。1は、施文は無く調整痕をそのまま残す隆起部である。8の屈折部は舌状に大きく突出するもので、頸部の内湾も大きい。9は、長椭円状の刺突を連続して回らしている。

第30図も口縁部破片である。4、7、8を除き、他は總て屈折部の消失したものである。1は、山形隆起部であるが、やや文様構成に違差があり、別に類するものかもしれない。2は、極く小形のもので、口径10cm程と推定できる。なお、8、10なども器巾の点で、同類かもしれない。7は、やや大形で、8の屈折も外方に大きく突出する舌部を作り出している。

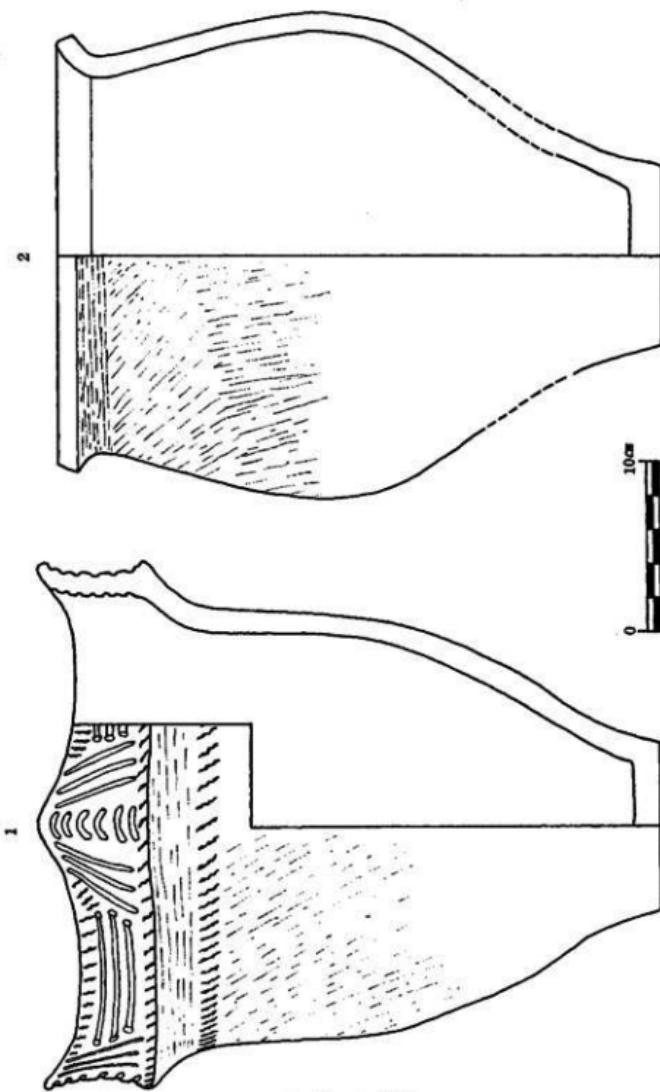
第31図も口縁部破片である。1、2は、あるいはこの類から除外すべきかもしれない。4、5は、指頭状平行沈線を施し連点、刺突文を配しているが、良く調っている。6は、屈折部の上縁と下縁に貝殻腹縁の刺突だけ行い沈線は無い。7は、隆起部に移行する部分のもので、器巾の点から可なり大形のものであろう。

#### 第8類

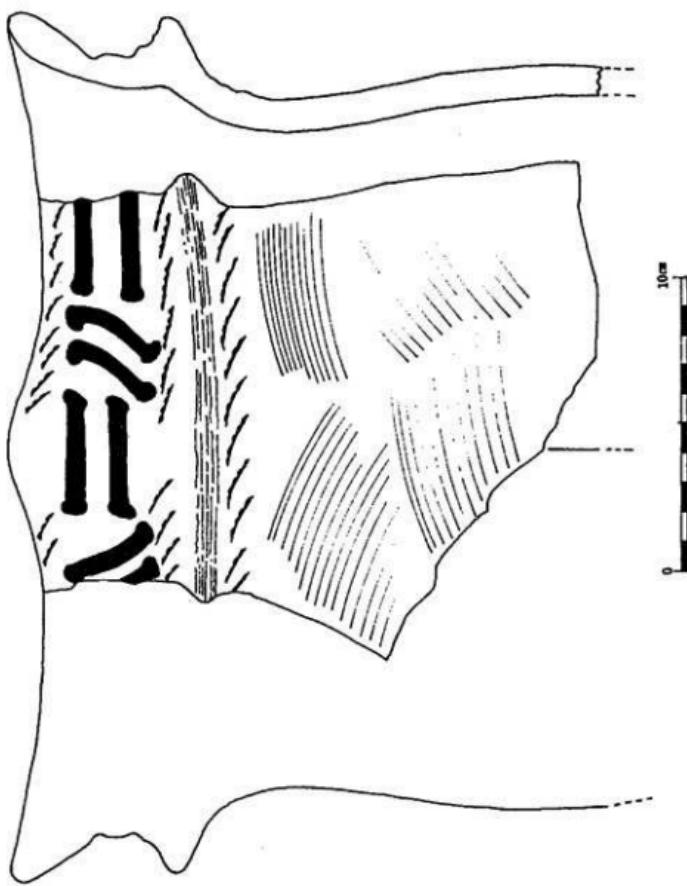
第32図並に第38図に示したものである。この類は、一般的に草野式と総称され、頸部だけに貝殻腹縁による刺突を回らす土器群である。

第32図は可なり器形を推定できる資料である。1の口径は15cm、2は約22cm前後の小形のものである。器形は共に頸部ややしまり、口縁部が大きく外反し、口唇は調った丸味を有する。文様は、頸部のくびれ部分に、1は右下り斜位、2は逆に左下り斜位の貝殻腹縁による刺突文一條を回らしている。器面は同様施文具による深めの調整痕があり、焼成は良好である。

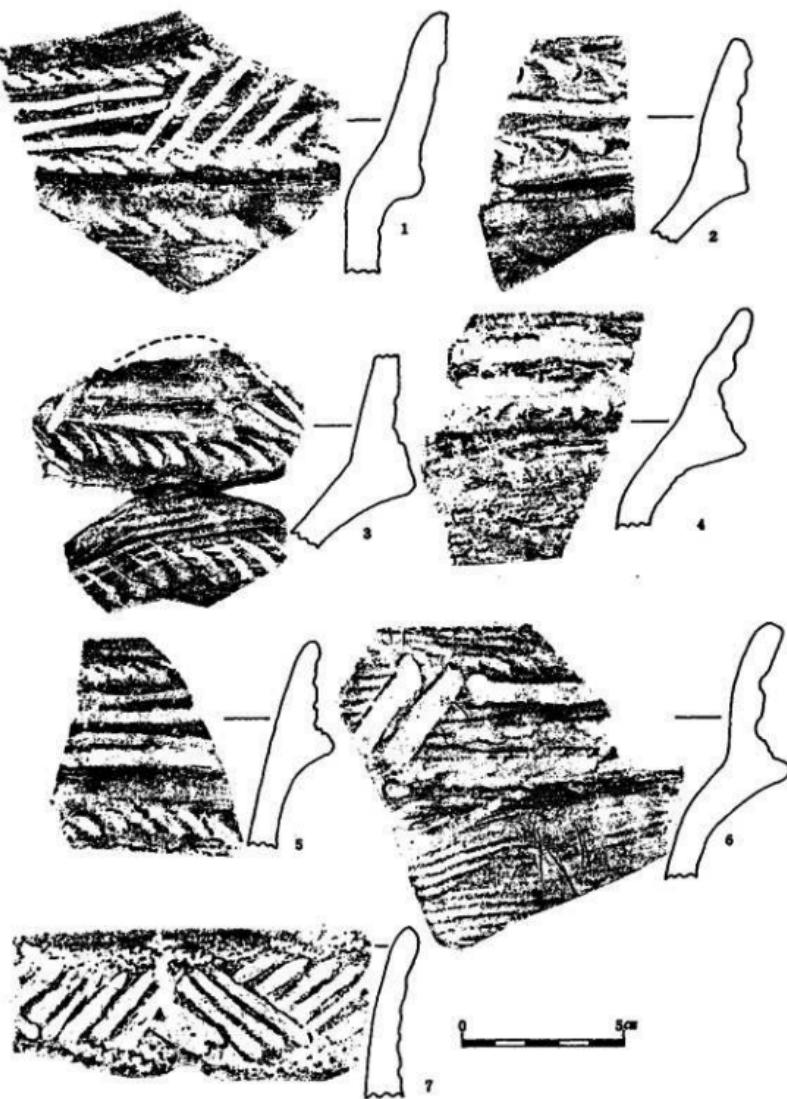
第33図は口縁部破片である。4を除き、頸部のしまりは細部の外反などは類似している。施文も頸部に限られ、器面に貝殻腹縁の調整痕をそのまま残す点でも同様である。1は、器巾の点で大形であろう。2、3は、やや小形で刺突痕がこまめに施され、4の立ち上りは直口状にちかい。貝殻刺突がこまめに間隔をもたず施されたものとしては、5、7、8などで、やや強めに深く刺突したものは、4、6などであろう。



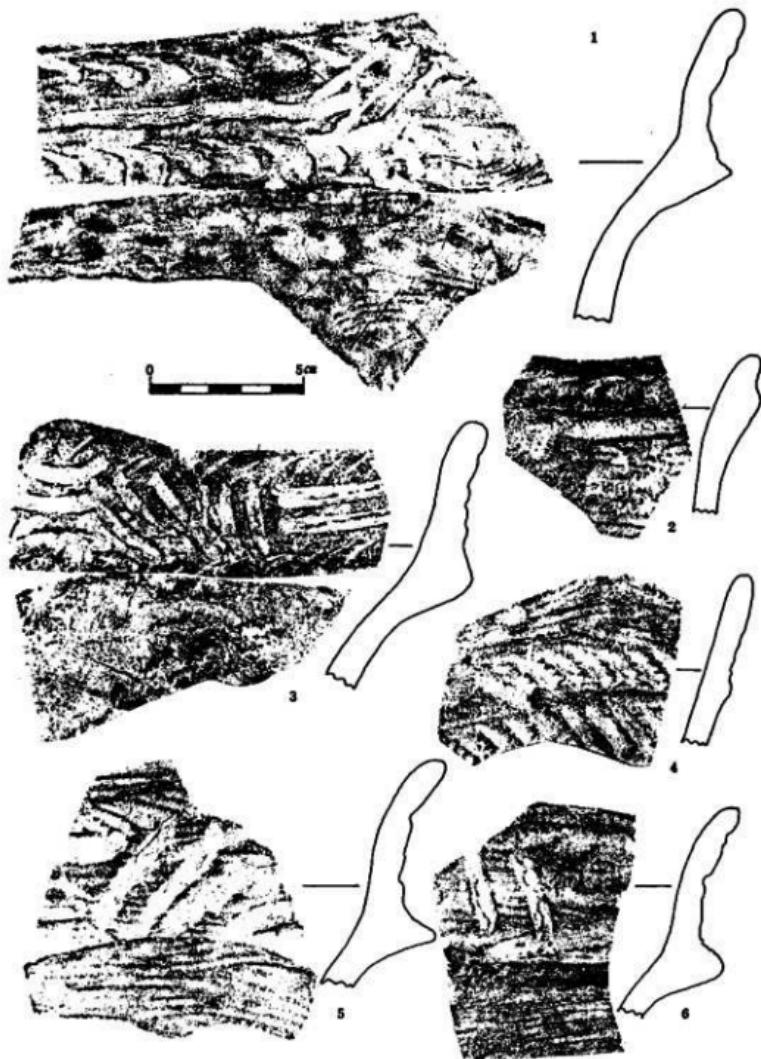
第24図 第7類土器



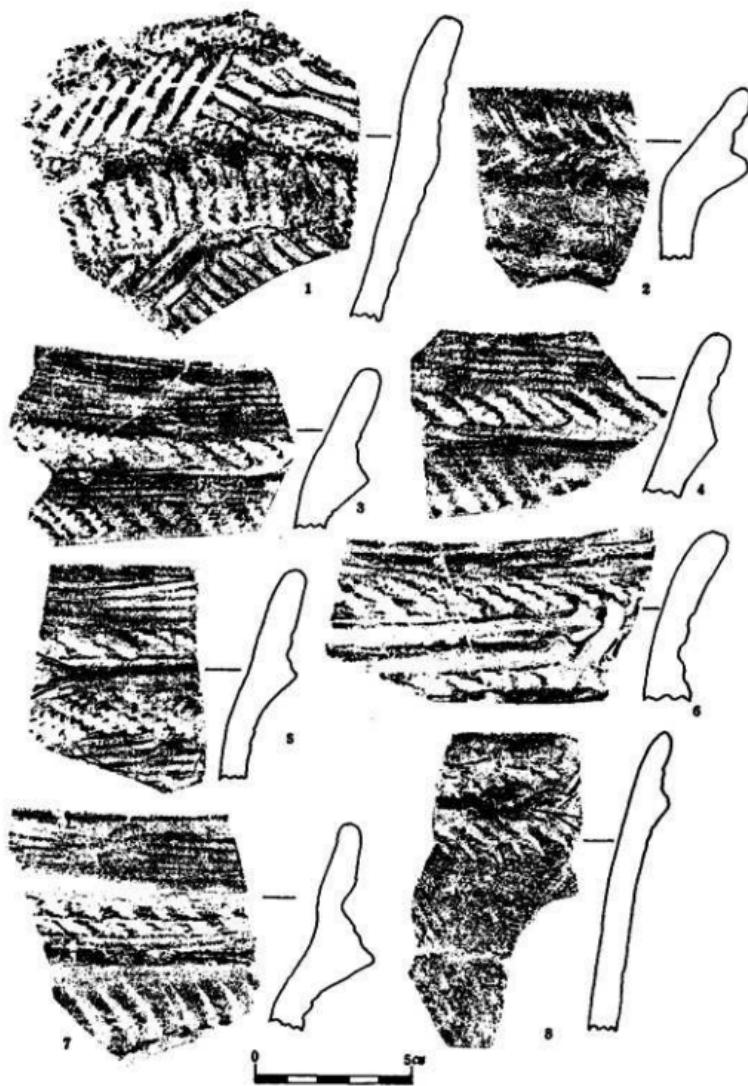
第25図 第7類土器



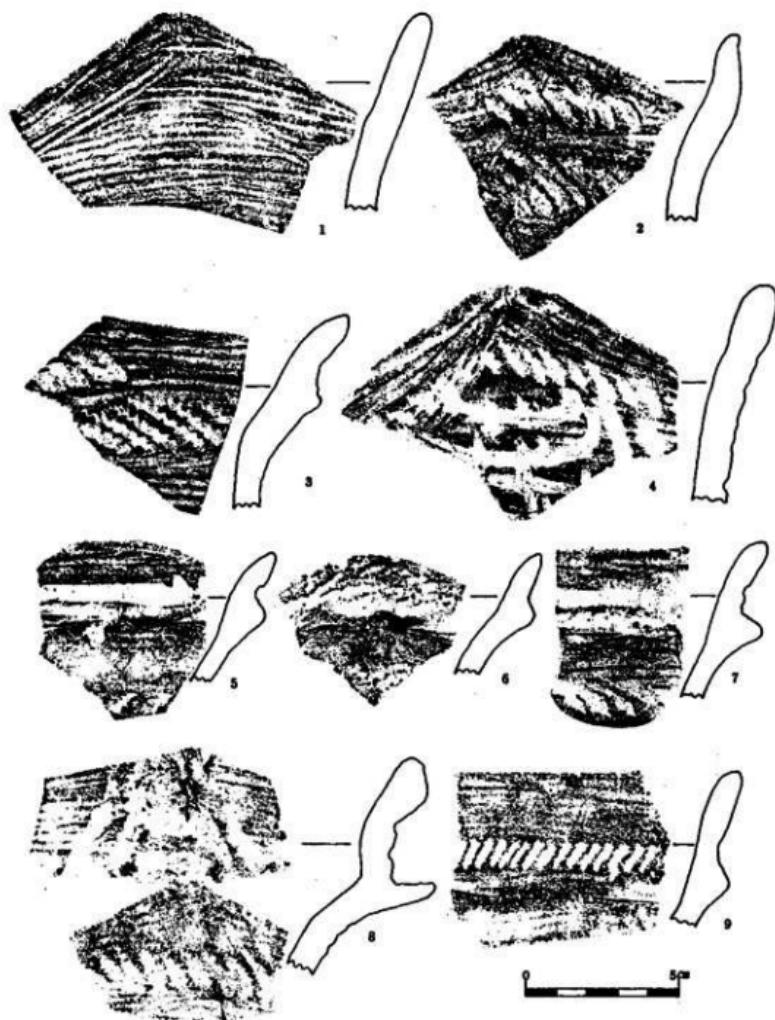
第26図 第7類土器



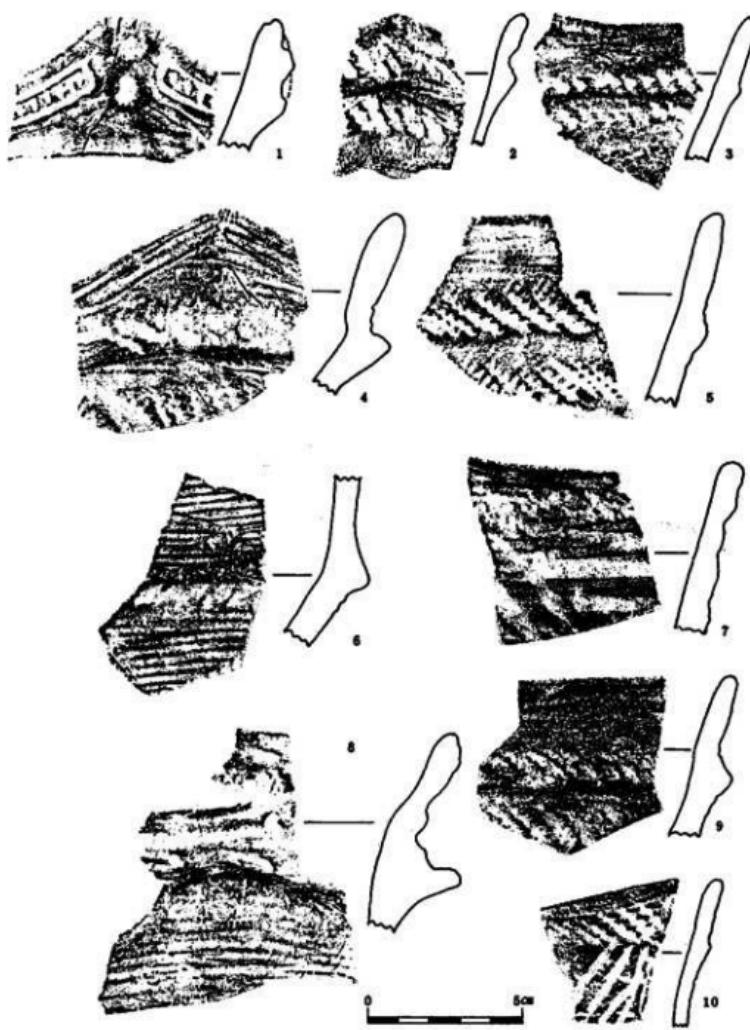
第27図 第7類土器



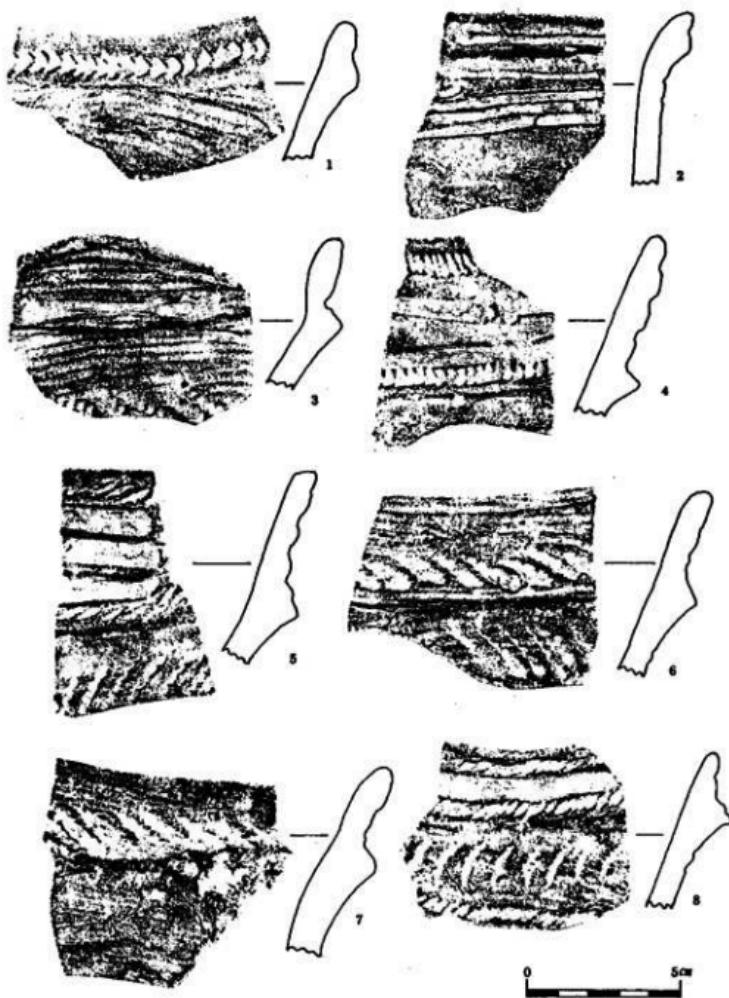
第28図 第7類土器



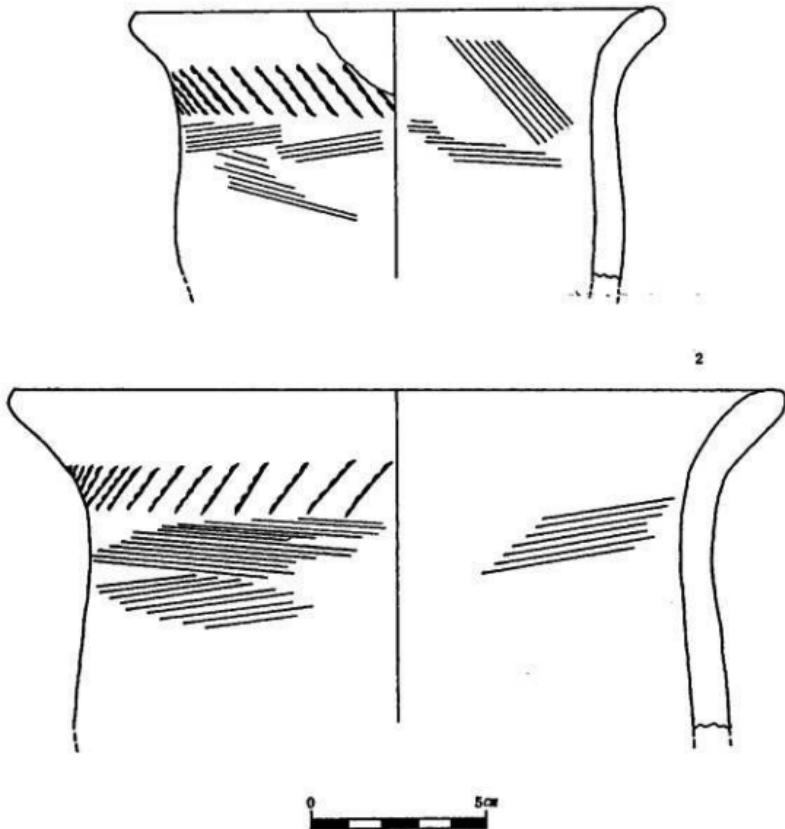
第29図 第7類土器



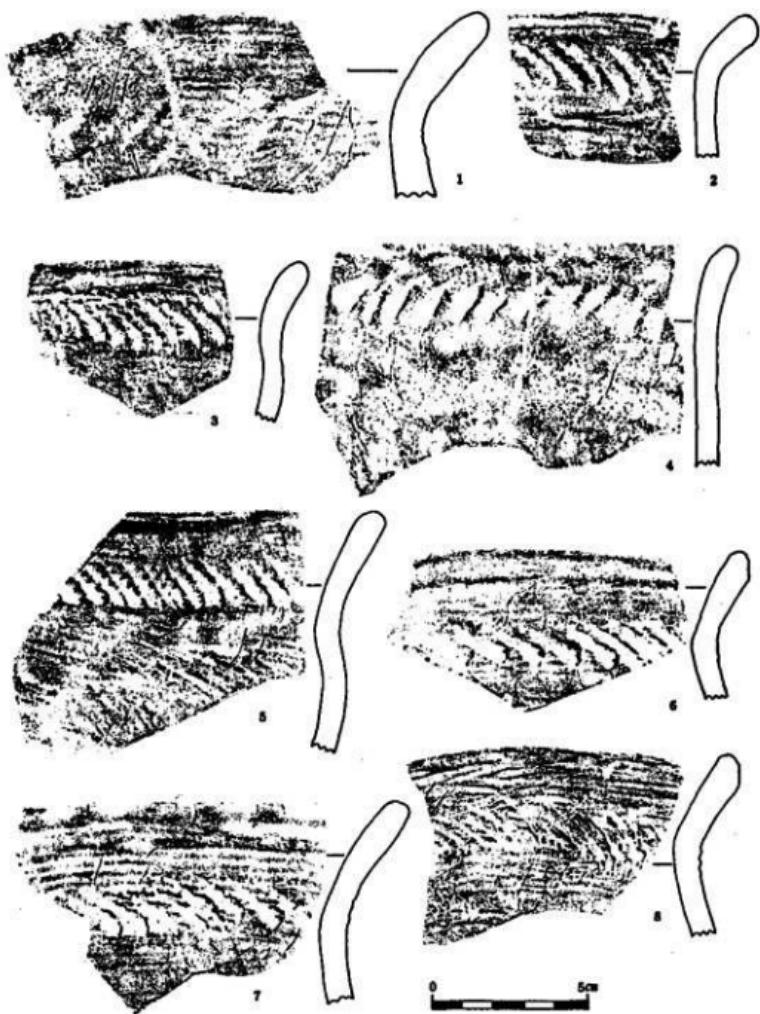
第30図 第7類土器



第81圖 第7類土器



第82図 第8類土器



第38図 第8類土層

### 第9類

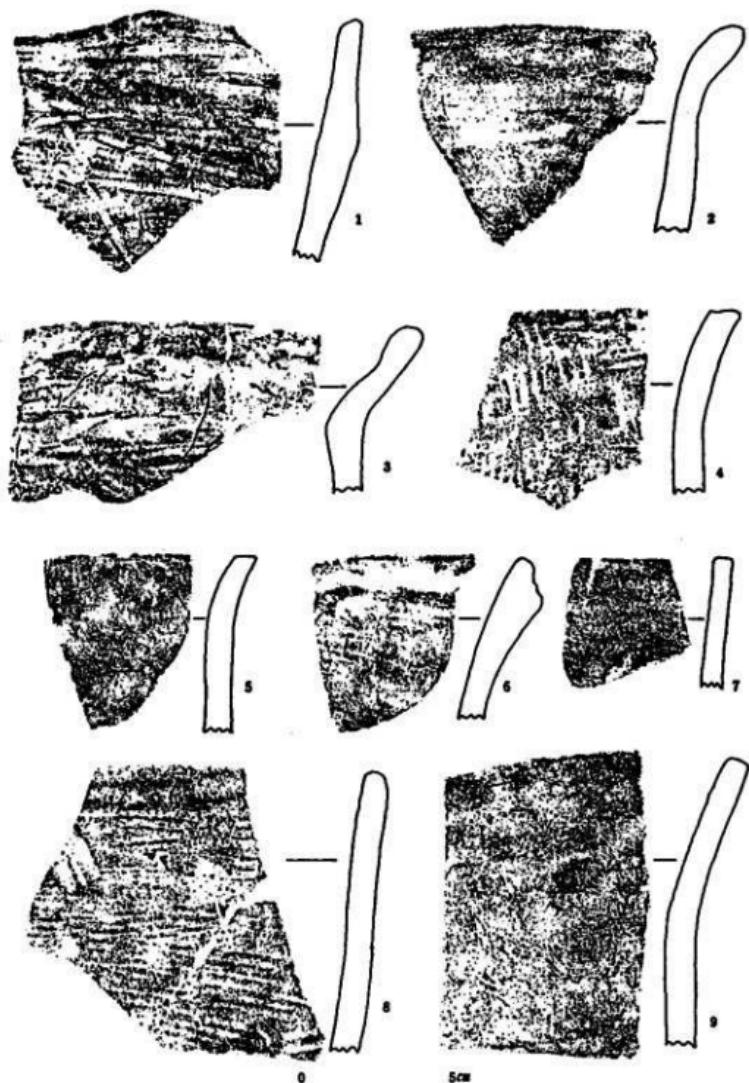
この類は、器面に調整痕のみを残し文様を有しない所謂無文土器である。第24図の2が復元できた適切な資料である。約8分の1程度で復元を試みたので、若干無理が生じたきらいがある。復元口径25cm、器高35.2cmである。器形は、頸部しまり。口縁部が外方に大きく開く平縁で口唇は平坦面を有し外傾している。胴部はわずかに球状に立ち、底部の径は約10cmの平底である。貝殻痕による調整痕は、頸部より上方が横位、以下は斜位である。内面もほぼ同様の調整痕が見られる。唯口唇部だけはハケ状によって調整痕を全て消している。焼成は、雲母を特に多く含み、やや良好である。色調は、内外面共に黒褐色で、胴部にやや黒ずんだ部分が見られる。

第16図の1も無文土器の口縁部破片である。やや器巾が厚く、ゆるやかな円錐を延しているので、あるいは、皿状に立ち広口の浅鉢形と考えられる。内外面共に貝殻痕による調整痕は見られないと、良好な調いとはいえない。焼成は可なりで黒褐色を呈している。

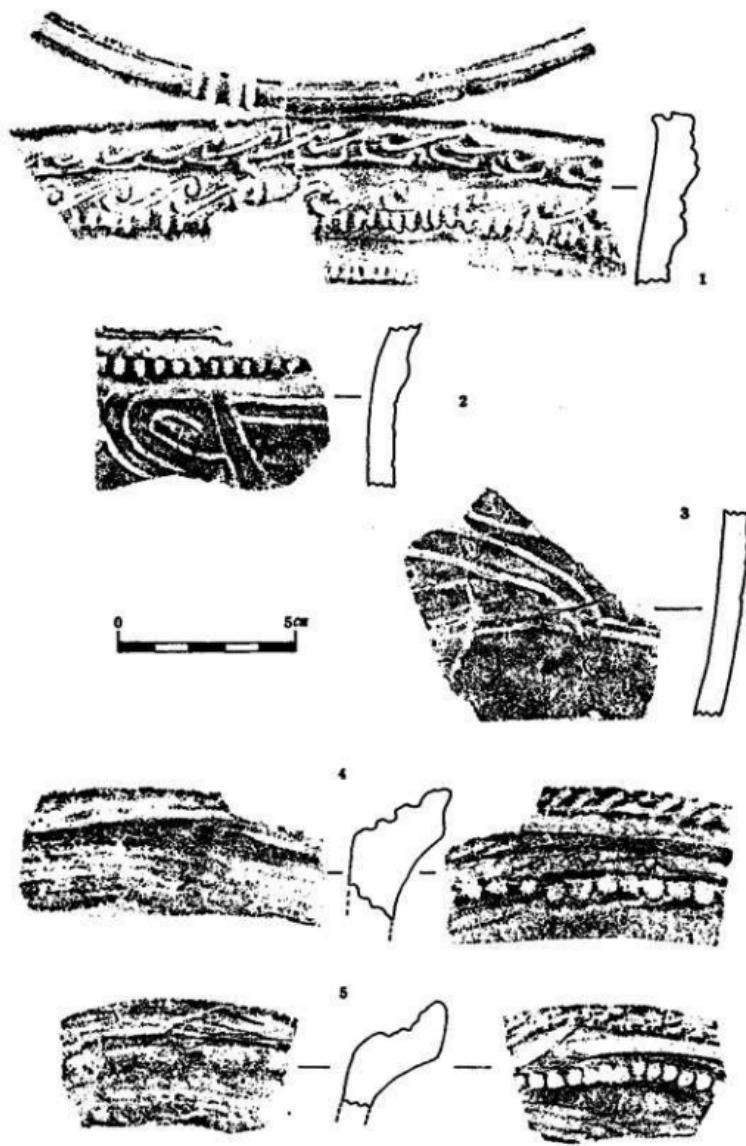
第34図は、いずれも無文土器の口縁部破片である。1は、波状口縁の隆起部分であるが、形状から推察して市来式に類するものかもしれない。2は、口縁大きく外反するもので平縁であろう。3は外反は特に大きく、器面の調いは粗雑である。4は、ゆるやかな外傾を有する口縁で、口唇の上面は平坦をなし、器面の調整は縦位で粗々しい。5も同様な形状であるが器面は良い。6はあるいは第6類に該当するかもしれない。7は、小片ではあるが良い調いが見られ、小形の直口形と考えられる。器面は可なり良好である。8も直口状の立ち上りをもつ平縁であろう。横位の調整痕が見られ、良く調い焼成も可なり良く、黒褐色である。9は、頸部から外傾する立ち上り口縁で、わずかに波状を有するものであろう。器面、器巾共に良く、焼成も特に良好である。

### 第10類

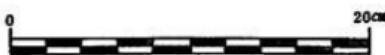
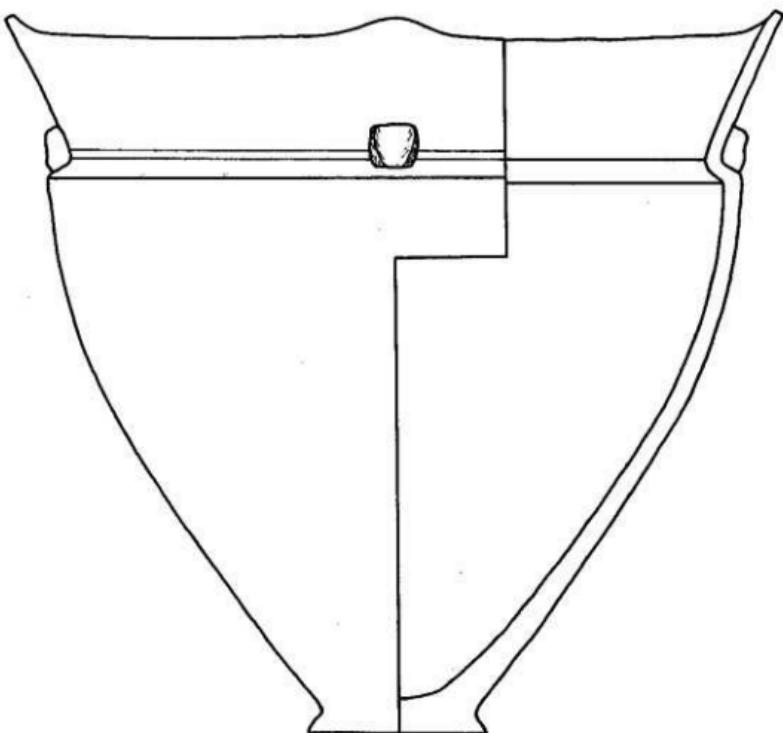
第35図の1、2、8は同一器体のもので、接合までには至らなかったが、特殊な文様帶を有する唯一の資料である。器形は、1の形状で見られるように、直口状に立ち上る平縁で、頸部は2のようにわずかにしまり、8のように胴部がやや丸味をもつものと推定できる。平坦面をもつ口唇のやや内側寄りに沈線一条が回り、途中4ヶの横状押圧痕がある。この沈線を押し引きした際に、口唇内端が内側にわずかに突起している。口縁部の文様は、8段に区分されている。最上段部はやや肥厚帯をつくり、長めのS字状を鎖状に連結し、その下位を、C字状をねかせた形で結んでいる。この沈線は、押し点からはじまり押し点で終る細線である。二段目は、長めのS字状を斜位に組み合せ、下段との区切りは不規則な連点を施している。三段目は別に施文せず、2で見られるように、細かな突起を回らし、その上に連点を施し、頸部との区切りとしている。胴部以下の文様は、細線による並行、斜行、あるいは巻き返し状の曲線を描いている。底部に立ち辺りには文様は無いものと考えられる。粘土は良く精選され大粒の混入は無く、焼成は良好で硬い。色調は、口縁部より胴部のあたりは黒褐色を呈しているが、下部に從い茶褐色となる。



第34図 第9類土器



第85図 第10類土器並に第11類土器



第96図 第12類土器

### 第11類

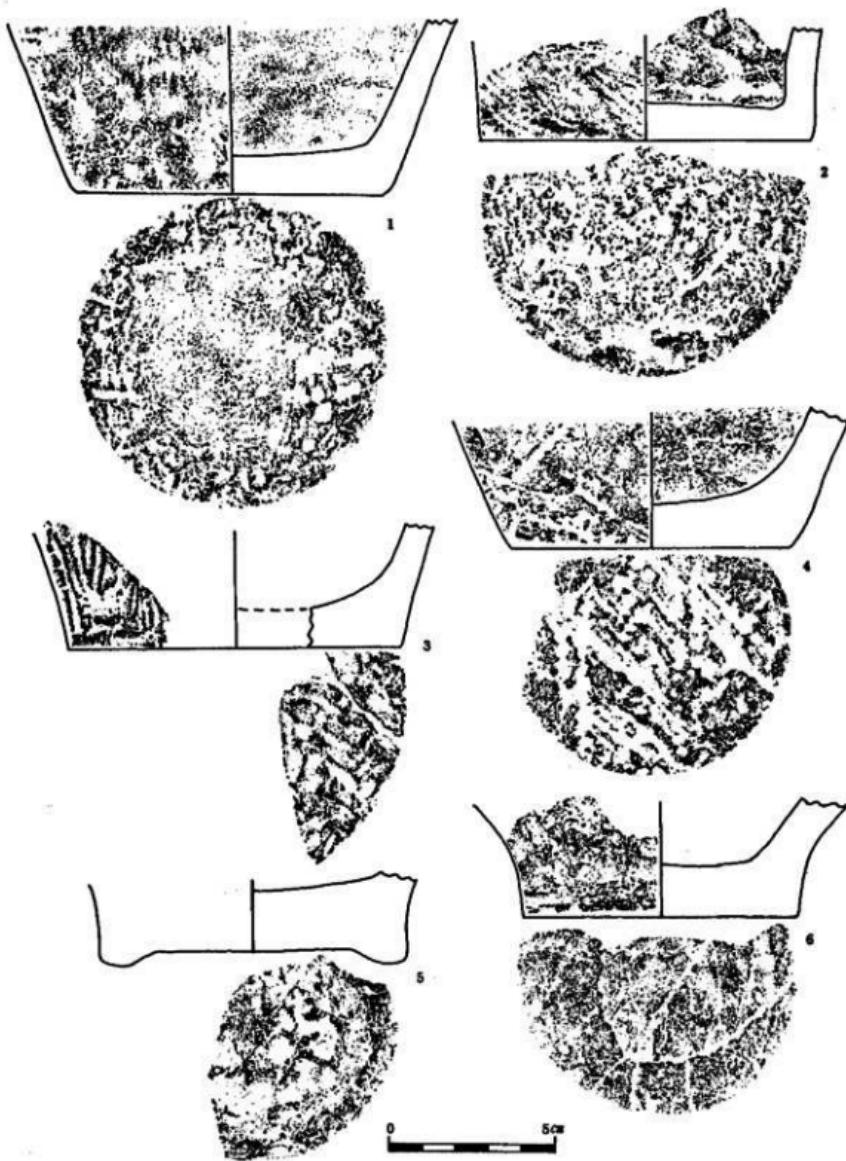
この類にあげたものは、第85図の4、5で見られるように、文様を内面に飾った特殊なものである。このような土器の出土例は、断片的で量的にあまり多いとはいえない。本遺跡の場合でも多量の出土土器の中でも、この2点だけ認めるだけであった。共に口縁部や外方に開く直口状の深鉢形と考えられ、口唇は外反から直立に立ち上っている。口唇の内面部に大きく内傾する平坦面をつくり、4は、太めの並行沈線二条を中央に施し、上側帯（口唇内端部）を貝殻腹縁刺突を連続して回らし（斜位）、下側帯は、棒状先端による刺突連点を施している。5は、沈線一条に同様の側帶部施文をなしている。外面部は、貝殻腹縁による横位の調整痕が見られる。器巾や文様を有する平坦面の広さ、後のカーブなどから、4は可なり大形と考えられ、5は、ややそれよりも小形であろう。焼成はやや良好で、黒褐色を呈する。

### 第12類

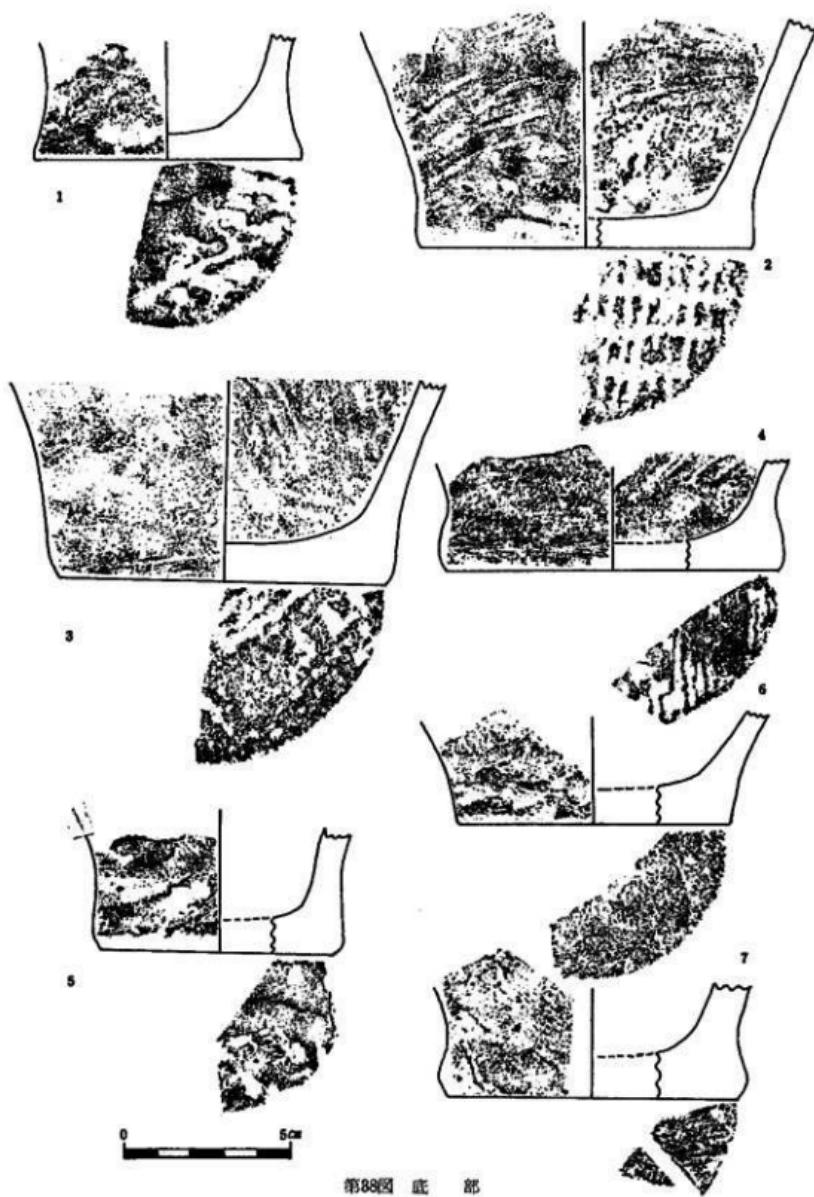
第86図に示した完形土器は、A北塙張区の4層上部に出土したもので、口径48cm、器高40cmを測る。型形は、4ヶ所の降起をもつ広口で、頸部しまり、く字状に屈折した肩部には、4個のリボン（正方形の中央部を指頭によって縱方向に押圧し断面四凹）を付している。なお、頸部に極く浅い沈線を施しているが、これは肩部整形のために上方から押し引きした指頭痕である。肩部から脛部、さらにはそれより下方に延びる縫縫はゆるやかに整い、徐々に器巾を増して底部に至る。底部は所謂円盤状貼り付け底部である。径10cmを測る。若干網代状を推定できる凸凹を見るが、外円側部分を残し、中央面は薄く消している。口唇から肩部の辺りまでは整形時の調整痕を絶て消した良好な仕上りである。ハケ状による横位の調整痕が薄く残り、ザラザラした感じは無い。肩部以下底部に至る器面は、貝殻腹縁によって正面右側方向にわずかに下り気味をもつ横位で調整され、概して良好な仕上り状況とはいえない。器面にススの付着は無く、唯かすかではあるが、朱と思われる赤茶けた部分がある。内面の調整は、ほぼ外面同様である。焼成はやや良好である。色調は、全体的に淡茶色にやや赤味を含む、器面に二ヶ所程黒ずんだ部分（手のひら大）があるが、これは内藏時の土質に関係するものであろう。

### 底部（第37図～第40図）

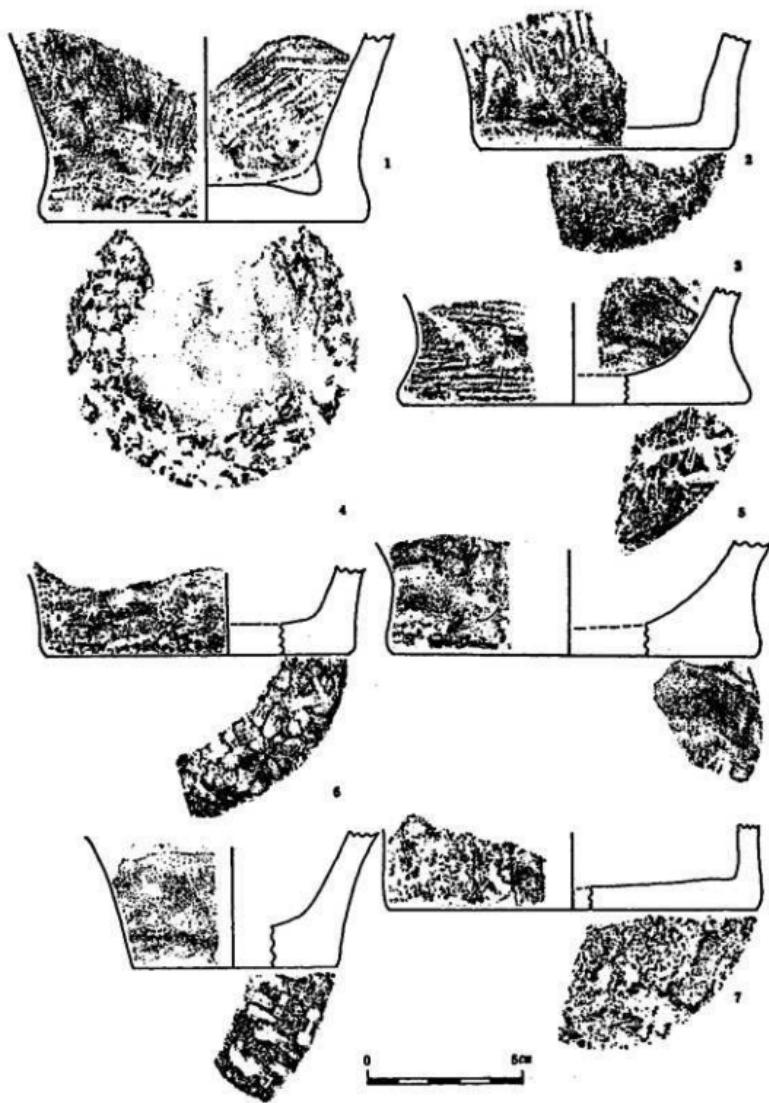
本遺跡の出土土器は、量的には相当量にのぼったが、一般的にまとまりに欠けた出土状況で、おおかたは破損し、特に細片が多かった。底部もこれに比例するように、完全に形状を知り得るものは限られ、ここに図示した以外は小片であった。しかし、これ以外に、特殊な飾り付けを施した器台付き装飾底部が若干出土したので、これについては別項で述べることにした。ここに示したものはやまとまったもので、先づ目につくことは、上げ底が無くて縁てが平底であることである。それに、網代底が大半を占め、木の葉の圧痕を認めるものが1点（第87図の6）あった。網代の形状は全体的に粗雑なほうで、うち、第40図の5だけが、良く整った相互編みが認められる。この外に、第87図の1、第89図の1のように、整形後、底面中央部を薄くけずり取り、すえ付けの安定を計ったものもある。第40図の1もそうした目的でや底面を中空にしている。なお、第12類の完形土器も底面をやや削り取っている。



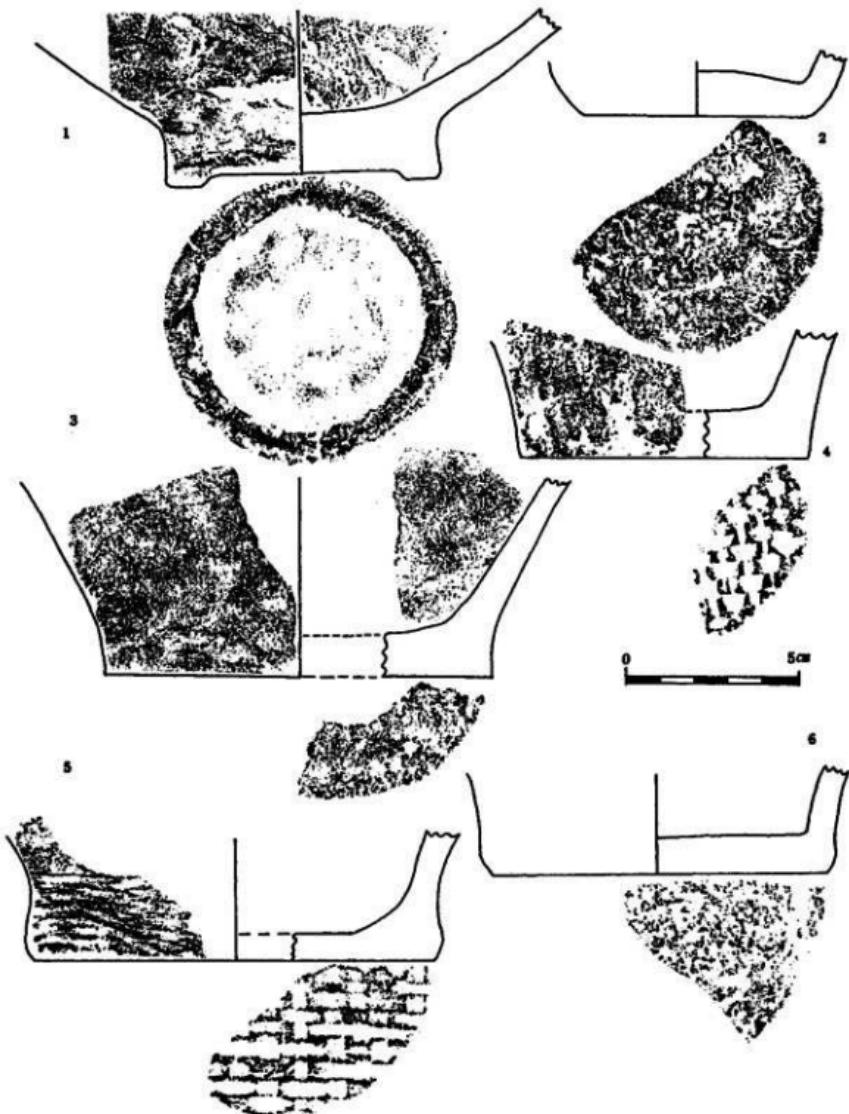
第37図 底 部



第88図 底 部



第39図 底 部



第40図 次 部

## 2. 特殊な装飾土器

土器の口縁部分に粘土塊を貼り付けて特異な形状や文様を施したもの、底部に特殊な作り出しを行ったものが出土した。以下これらについて具体的に述べることにしたい。

第41図の1…A—北拡張区に出土した口縁部破片である。器形は、口縁部く字状に大きく外反し、頸部がしまり、胸部に張りのある深鉢形と考えられる。外開きした口縁部先端に、両面を扁平にし中央部に穿孔を施した円盤の一端を貼り付け、一方部の端を、頸部からやや下った肩部から、逆V字状の円柱でささえている。円盤はやや指円を呈し、長巾5cm、短巾4.5cm、厚さ1.0cmを測り、中央部の穿孔はやや指円で、径1.2cmある。穿孔には同心円状に浅く細い沈線が2条ある。径2cmのささえ円柱2本は、共に外面部に8条の縱沈線を画き、内方部は無文のままにしてある。円柱の土台部の作りは、両台共に粗雑で整っていない。延長部には浅めの沈線2条があり、中に細かな連点を施している。器面には、直細線が不規則に施してあるが、基本的施文とは考えられない。焼成は、全体的に黄茶色であり、円柱部分から円盤貼り付け部、更には、口縁部先端、口唇部などの上部部分は、赤味がかった茶色に変色しており、あるいは、彩色されていた可能性が強い。いずれにしても、形態的、創造的見地からすると、モチーフに富んだ特異な装飾土器といえる。

第41図の2…A—北拡張区に出土した口縁部破片である。側面並に断面図だけで示したが、これを上面から見ると、角部がわずかに突き出し気味ではあるが、直角状が認められるので、市来式土器特有の口縁正方形のものであろう。突起部中央の上部から突き刺した孔は、下方に通りぬけ、中央からややすが生じている。刺突具は先端不規則な方形状のもので、径は約4cm程度であろう。文様は、刺突、押し引き、長三角状から半月形状の連点をこまめに施したもので、デザイン的にまとまった文様といえる。焼成は良好である。

第41図の3…A—北拡張区に出土した口縁部破片である。口縁の突起部と考えられる。粘土塊を貼り付け、外面部には整った乳頭状を作り、もり上った先端部(乳くび部分)に浅い刺突を加え、細いひっかき状沈線を不規則に施している。内面は、指頭によって両側面と中央部、上面の四ヶ所の凹部を作り、細かな沈線が、側面は縦位、中央と上面は横位に画している。なお、三方向からのつまみで生じた両側先端部に、細かな刺突痕がある。焼成はやや良好で、茶褐色をなし、両面共に(朱)が施され、特に内面中央の凹部は鮮明に残っている。

第41図の4…A—2トレンチに出土したものである。口縁部の突起部分と考えられる。粘土塊を貼り付け、つまみによって、外方に上下二個の突起部を作り、上面を指頭押圧による半月状の平坦部を形成し、突起の先端、角部、内面部等に浅いひっかき状の細線を施している。焼成は良好で、内面やや黒味のある茶色、外面茶黄色で、半月状の上部平坦面やひっかき細線の中に(朱)が認められ、前記三個と共に彩色土器であった可能性が強い。

第42図の1…A—2トレンチ出土である。一見、(雁首)を連想できる口縁部破片である。立ち上りの稜線は良く整い、粘土塊を貼り付けて大きく内溝する突部を作り出し、先端は二又に分れ、上端に平坦面がある。それに、別の粘土帶を両方の稜線にそわせて貼り付けて、背部

でまとめ、それを突部背面から一部空間をもたせて、（おんぶ）の形で、突部上縁まで延し丸めている。それぞれの貼り付け部分は、指頭によって良く押圧を施し整いを保っている。焼成は良好で、厚みもあり、可なり大形のものであろう。突部を退き茶黄色を呈しているが、白色の残存も認められ、特に、はけ状調整痕や凹部などに多く見られる。あるいは、白色の彩色土器ということも推定できる。

第42図の2…A-2トレンチ出土である。山形突起の貼り付けである。粘土塊を貼り付け、指頭によって外方に粗々しい人頭状突部を作り、穿孔を施している。片方から0.8mm程度の刺し具を通して、手元で回転を行い入口を太め、突き通った時点では、片方入口をやや太める工作をしている。孔の大きさは異差が生じている。焼成は特に良好で、黒色をなし、きわめて薄手のものである。

第42図の3…A-1トレンチ出土である。直口口縁で、口唇部に平坦面を有し、刺突を施している。口唇外面に縮鉗状2縦列の突起部を作り、片方のみに方形状刺突具による迷点を縦列に施し、頸部に一条の沈線と、それにそろように貝殻腹縁による浅い刺突痕がある。焼成は可なりで茶黄色を呈している。

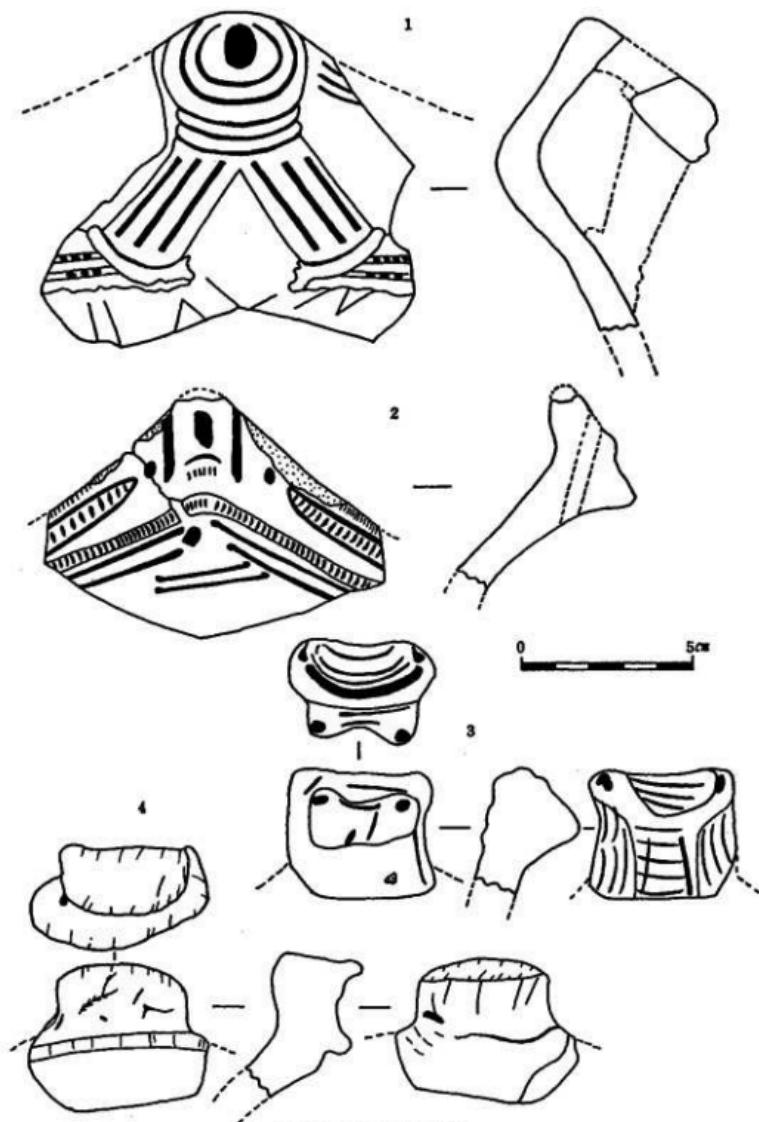
第42図の4…A-3トレンチ出土である。わずかに外開きする口縁の上端に、口唇から上方と、外方につまみによる貼り付け突起を作り、両方共に貝殻腹縁による刺突と、口唇からやや下った頸部に深めの沈線、沈線にそって貝殻腹縁の刺突を施している。焼成はきほど良くない。内面黒色、外面茶黄色である。

第43図の1…A-1北拡張トレンチに出土した特殊な器台付き底部である。平面体菱形で、上二段を作り、上段がわずかに反り気味で、下段（最底部）は、角方向に大きく上反りとなり、一見、スマートで佳麗な感がする。空間部分には内方に向って穿孔を施し、突部先端にはすべて浅めの鉢齒、上段の平坦面は沈線でうめている。稀に見る特殊な器形を有し、器面のあちこちに白色の塗料を残し、特に鉢齒の凹部などに多く認めることができる。彩色の可能性が強い。

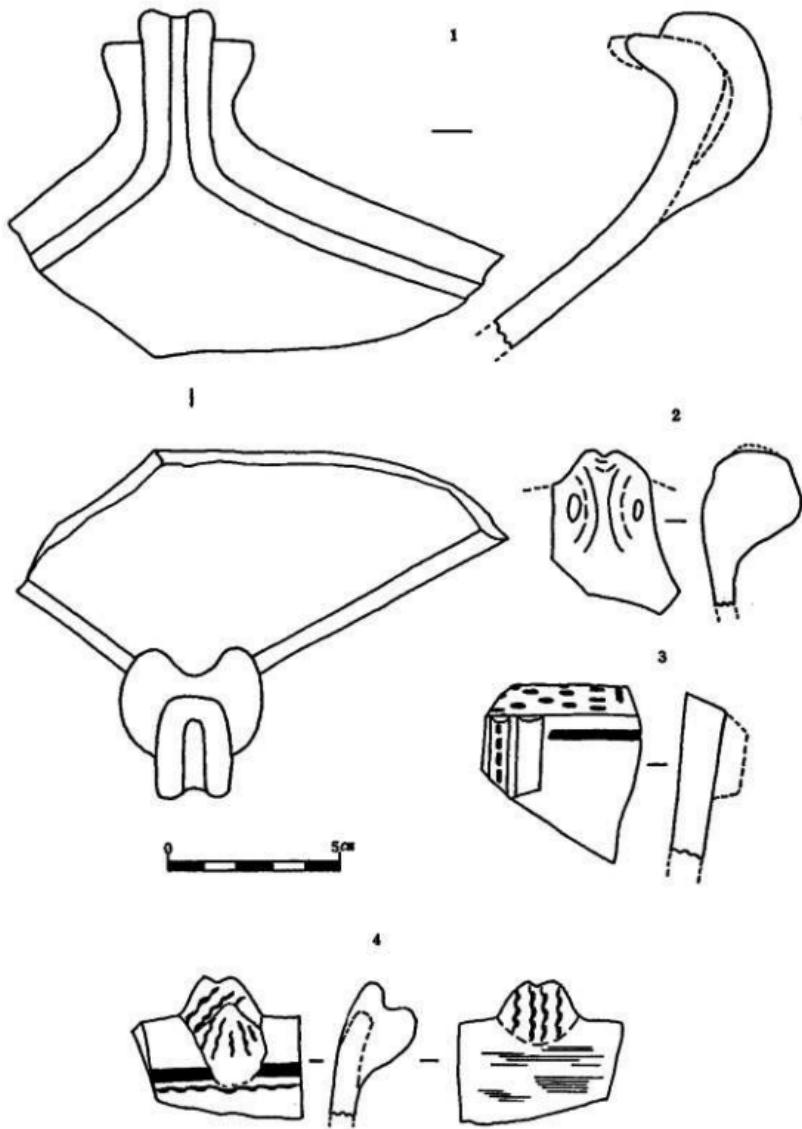
第43図の2…A-2西拡張トレンチに出土した器台付き底部である。整った上げ底になり、底部に向って、はかま状の広がりをもたせ、6条の突起部を付着させ、うち、4ヶの突起先端をやや上向きに反りを加えている。焼成は良好で、内面黒褐色であるが、外面は赤味の強い茶色で、朱の着色と、その上塗りと推定できる白色塗料の付着がいたるところに見られる。

第40図の3…A-1北拡張トレンチに出土した器台付き底部である。器形はわりと小形のものであろう。破損度が大きいので多くを判別できないが、こぶ状の突部が2ヶ所判明し、他に8ヶ所の推定ができる。その他に2ヶ所、計7ヶ所を有するものであろう。突起部の先端に刺突を行った所もあり、両側に細かな連刺突痕がある。器内外には貝殻腹縁による深めの調整がある。焼成は良好で、内面黒褐色、外面は茶色である。

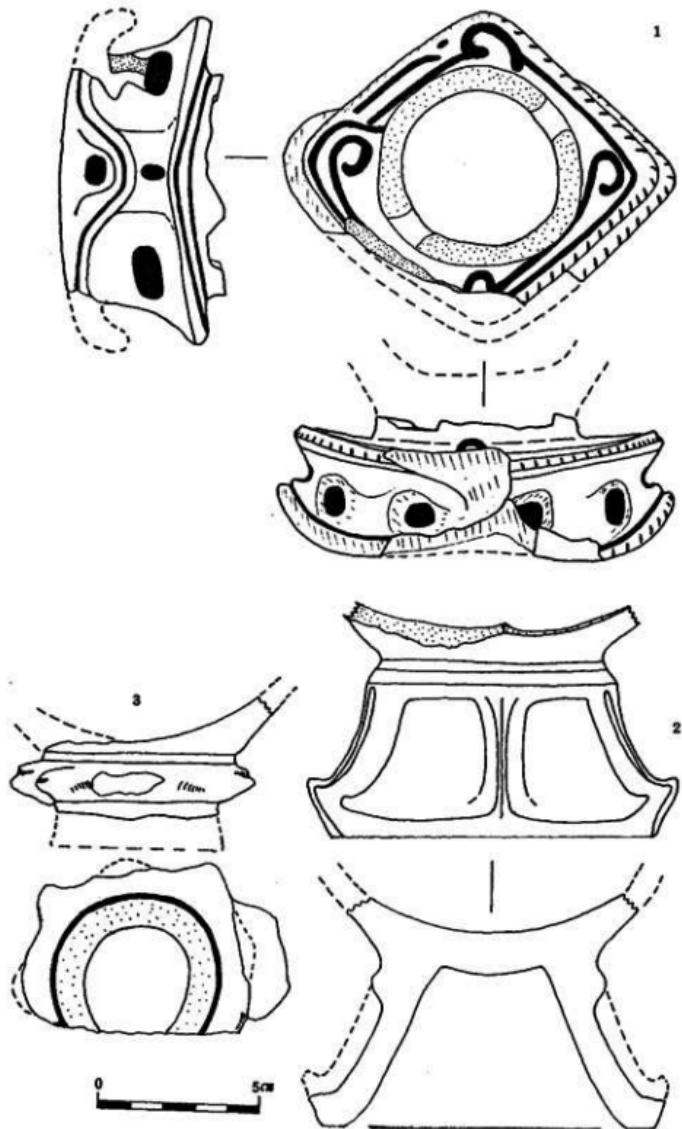
この他にも、破損度が強く実測で図示できない数点が認められたが、適正を欠くおそれが生ずるので省略することとした。



第41図 特殊な装飾土器



第42図 特殊な装飾土器



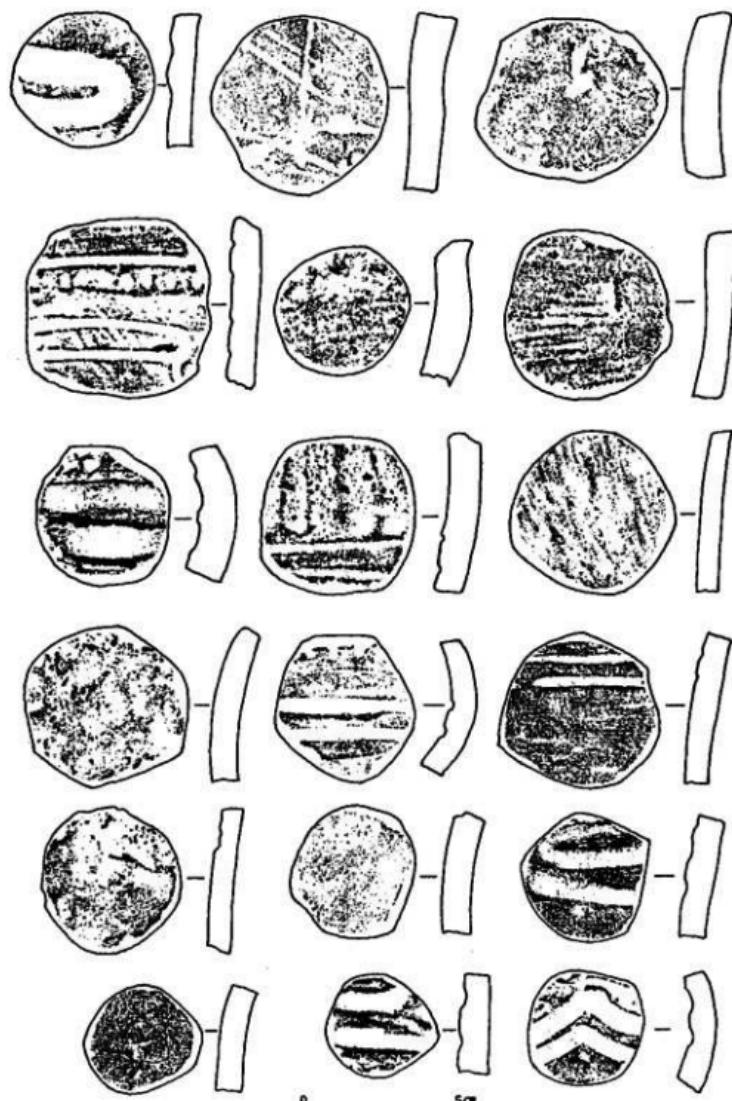
第43図 特殊な装飾土器

### 3. 土器破片の加工品(第44図・第45図)

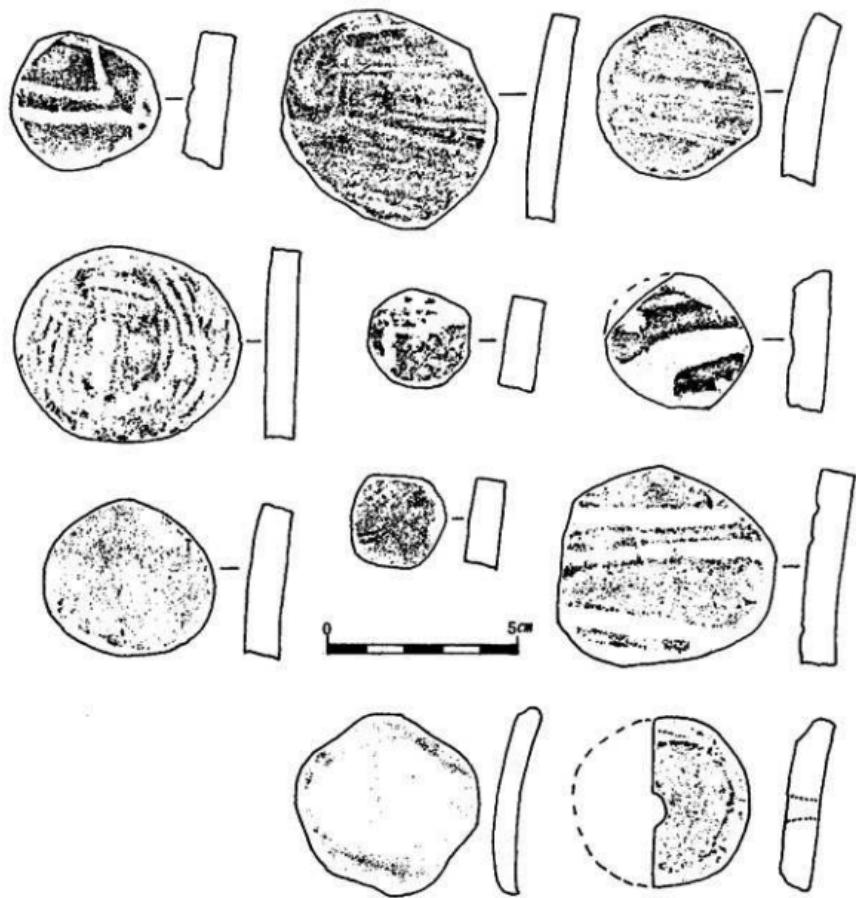
土器の破片に若干加工をくわえ、正円形、あるいはそれに近い形状にしたもので、通称、メンコと言われている。本遺跡では、各トレンチに出土したが、北拡張区の18点が最も多く、層位別では、3層上部に集中し、北拡張区は下層に多く出土した。これを表にまとめてみると次のようである。なお、石製が1個含まれている。

第3表 土器破片の加工品(メンコ)

出土区	層位	遺物番号	長径cm	短径cm	厚さcm	重さg	特徴
A-1	3 <sup>a</sup> 層	113	5.5	5.0	0.9	82	両面共に貝殻腹縁による条痕
A-3	タ	25	5.0	5.0	0.7	20	タ
A-1	タ	26	4.8	4.0	0.8	18	はけ状による調整痕
A-1	タ	14	4.9	4.5	0.9	22	指頭状の太めの沈線
A-2	タ	83	5.5	5.0	1.2	41	無文
A-2	タ	58	5.5	5.0	0.9	41	両表共に貝殻腹縁による条痕
A-1	タ	68	5.8	5.5	0.9	50	浅い細めの沈線、口縁部
A-2	タ	91	5.7	5.6	0.9	44	浅い押し引き沈線
A-1	タ	66	5.6	5.1	0.8	31	タ
A-1	タ	58	4.1	4.0	0.7	25	連点、細沈線、口縁部
A-2	タ	80	3.5	3.4	1.0	20	浅い細めの沈線
A-2	タ	66	3.7	3.8	0.9	20	指頭状太めの沈線
A-1	タ	116	4.0	4.0	0.9	30	タ
北拡張区	タ	72	5.5	5.0	0.6	30	無文
タ	タ	69	4.6	4.5	0.7	48	指頭状の圧痕
タ	タ	70	4.9	4.9	0.7	31	浅い細めの沈線
タ	タ	106	5.8	5.6	0.5	30	両面共に貝殻条痕
タ	3 <sup>b</sup> 層	53	4.6	4.4	0.8	29	無文
タ	タ	24	8.9	3.9	0.6	20	タ
タ	タ	39	4.2	4.2	0.8	28	両面共に貝殻条痕
タ	タ	69	4.4	3.7	0.9	28	無文
タ	タ	22	4.2	4.0	1.0	21	指頭状太めの沈線
タ	タ	1	3.8	3.1	0.8	18	無文
タ	タ	4	3.2	3.0	0.9	12	指頭状太めの沈線
タ	タ	18	2.5	2.5	0.8	10	無文
タ	タ	48	4.5	2.2	0.8	11	半欠品、中央に穿孔を有する
A-1	3 <sup>a</sup> 層	104	4.8	4.5	0.6	29	石製、5枚はなびら状
平均			4.06	4.24	0.81	26.4	



第44図 土器破片の加工品



第45図 土器破片の加工品

#### 4. 石器

今回の調査で出土した石器類は、数のうえでは決して多いとは言えないが、類別に分類すると極めて多彩で、特徴的な組成内容を示している。以下種類別に記述したい。

##### 石皿

第46図で示した9点である。いずれも複数以上に破れた欠損品で、石紐遺構に3石を使用したものもあったが、他は単独で出土した。石材は花崗岩が主体をなし、5、7が砂岩である。6の花崗岩が最も岩質がしっかりしていたので、他のものはもろい。特に、石紐遺構の中心に配石されていた9などは、破れ面がはっきり判別できない程ぼろぼろの状態である。使用痕は、2、6、9等の凹部が深く、長期使用の痕跡を認められるが、全般的に浅く、4、5、7等のように、わずかな使用痕のあるものもある。この外にも、改善工事によって表面に出土したものや、壁面に露呈していたもの、以前の調査で表面採集した完形品など、十点程あるが、これらについては省略した。

##### 磨石

第47図に示した4点は欠損品で、第55図の1は完形品である。石質はいずれも砂岩である。平面形は円形あるいは梢円形をなし、断面は安定したレンズ状で、扁平の両面は共に反期使用の消耗痕を平均して残し、すべすべして元来の自然面は全く見られない。鞍線上の全面(側縁)には無数の敲打痕を残し、磨石としての機能に加え、敲きの作業に同時に使用したものと考えられる。敲打痕から更に推察を深めるならば、欠損品の4点は敲打によって生ずるつぶれ状態が可なり荒々しく太めであることから、唯且に、手先だけのこづき様の作業ではなく、むしろ、やや強敵を必要とする作業に使用したものではないかと考えられる。なお、一般的な敲石より可なり太めで重量感があることもあげられる。第54図の3は、攪乱層出土のものである。

##### 石斧

第48図並に第49図の2、3、第50図の1、2である。第48図の1、2、3は重量感のある堅石斧である。すべて刃部や柄部の一部を破損している。石質は玄武岩と推定できる。全面に入念な研磨を行い、平面部側面部の区別がはっきり判別できる程良い形状を作り出している。器厚や重積感からといって锐い始刃を有するものと推定できる。4は、打製石斧である。両面側面に荒削りの打撃を加え、可なり良好な刃部の作り出しを行っている。石材は粘板岩と推定できる。第49図の2は、小形で薄手の石斧である。刃部のわずかと、柄部の一部を破損しているが、器面部の研磨は特にすぐれ、刃部は片方からだけの研磨で片刃を作り出している。石材は粘板岩であろう。3は、ノミ状の小形石斧である。長さ7cm、最大巾1.0cm、厚さ0.5cm。石材は粘板岩と推定できる。柄部先端に破れ面を残しているが、元來の原形かあるいは使用による破損かはっきりしない。ノミとしての整形、全面に施した研磨は特にすぐれ、すべすべした手ざわりを感じ光沢がある。刃部の作りは片方からの研磨が主体に行われ、鋭利に研ぎ出された片刃は、金属製刃部にちかい。側面にわずかな段を有する(抉り)があるが、これは整形時につけたものか、使用上必要に応じ製作したもの(着柄)か、判断にくるしむ。なお、第49図の

下段の5点は、以前の調査で表面に採集した石斧類のうち小形に類するものであるが、一応、参考のために図示した。いずれも、今回出土の小形石斧に類似している。なかでも、ノミ状石斧については、わずかな長短や厚薄の差はあるものの、その形状、整形などの点ではほぼ同類で、本遺跡の特色の一つといえよう。第50図の1、2は、表層（攪乱層）に出土したもので、典型的な始刃を有し、刃部を欠損している第48図の1、2、4の刃部を想像することができる。また、2も第48図の3に類する打製石斧であるが、その製作過程を知る一つの資料である。

#### 石ヒ

第49図の1である。B地点の攪乱層に出土した唯一のものである。石材はチャートと推定できる。全面黄茶色のつぶや、原面と考えられる粗面があり、必ずしも良質とはいえない。つまみ部は、肉方面よりの打撃によって整形され良く整っているが、全体的に粗雑で、刃部の形状も良好とはいえない。

#### 角状形蔽石

第51図の1、2である。共に角状に整形されており、蔽石のはかに台として使用したものである。石材は共に砂岩で、1は、平面部の中央に敵台にした痕跡と、側面並に角部などにも蔽痕があり、一部破損部分もある。2は、先端部よりはむしろ側面に蔽痕があり、一部平坦面も利用した痕跡を残す。三角状に欠損した部分は、側面利用の敵打によって欠損したものであろう。なお、1の場合、石皿の一部を利用した可能性もある。

#### 棒状櫛石

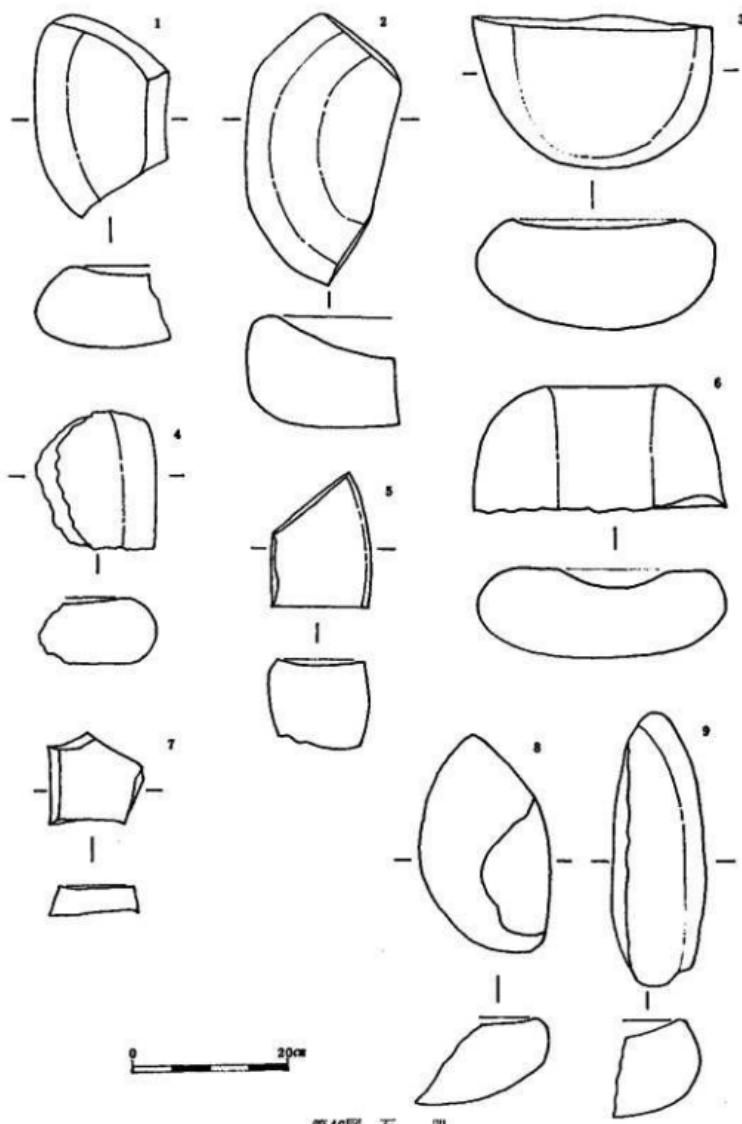
第52図並に第53図の5である。いずれも平面櫛棒状を呈し、鋸部を有する形状である。断面は、正円形にちかいもの、蕭鉢状のもの各2点である。石材は砂岩の自然隕で、最も長径をもつ第52図の5は、縱割れになったものの片方と考えられる。各々の先端部分や側面部、平面部の中央部分に敵打痕もあるものもあり、有効に利用したものであろう。第50図の8は、攪乱層に出土したもので、これは平面部に痕跡を多く残している。

#### 石鍬

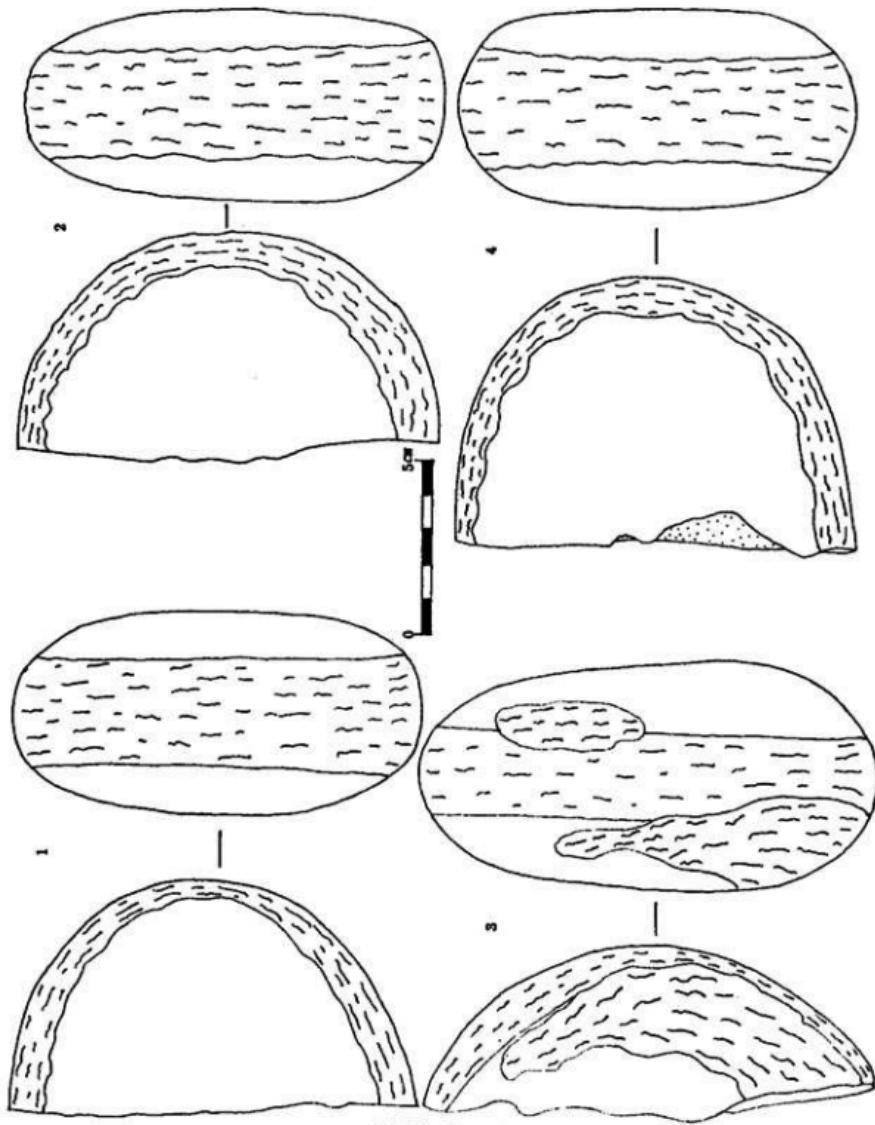
第58図の1、2、3、4の4点と、攪乱層に出土した第54図の1、2である。石材は軟質の砂岩で、扁平な川原凸縫を用い、平面縫は正円形と橢円形である。1は、片面の一部を欠損し最も大形で、長径10cm、4が最も小さく、5cmである。いずれも上端と下端を相互剥離で打ち欠き部を作り出している。この外にも、以前の採集で数点を集めている。

#### 玉石

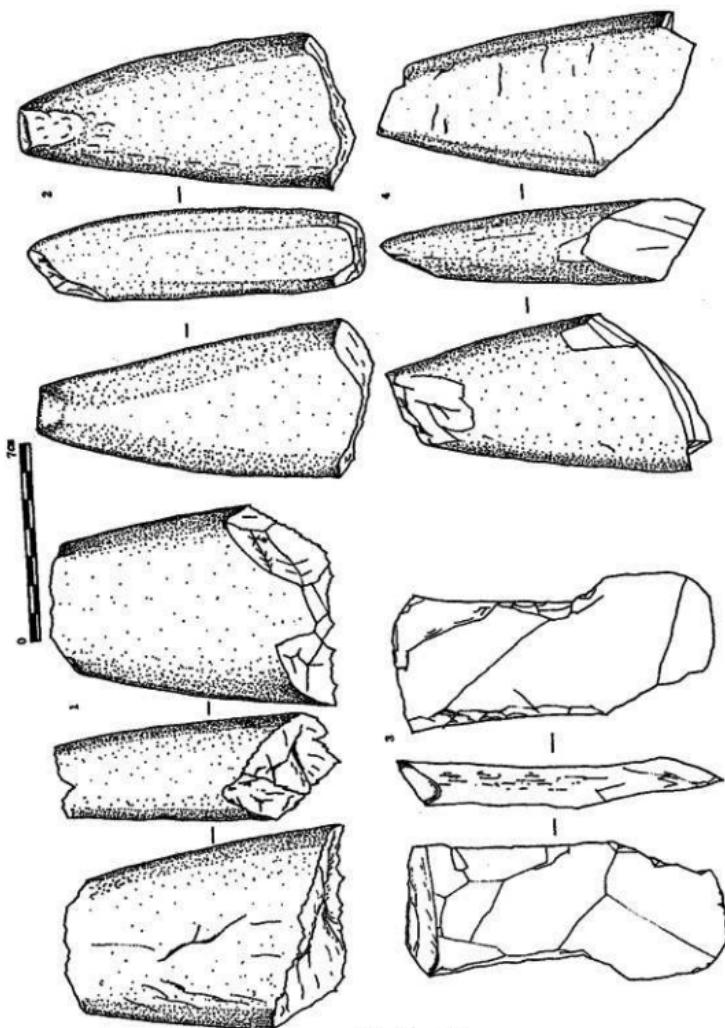
第54図並に第55図の2、3、4、5、第56図の1、2、3等である。形状は正円形、橢円形あるいは球状に類するものである。蔽痕や磨痕をもっているものが大部分で、橢能からいくと円形状蔽石が正当であろう。特に、第54図の4（攪乱層出土）や第55図の2、第56図の2などは、単なる玉石ではなく、磨りと蔽きに併用された痕跡を残し、その他やや乱れた円形をした第55図の3、第56図の1などは、側縫や縫線上に無数の蔽痕を残し、一部剥落が見られる。第55図の4、5などが正当な玉石と考えられる。



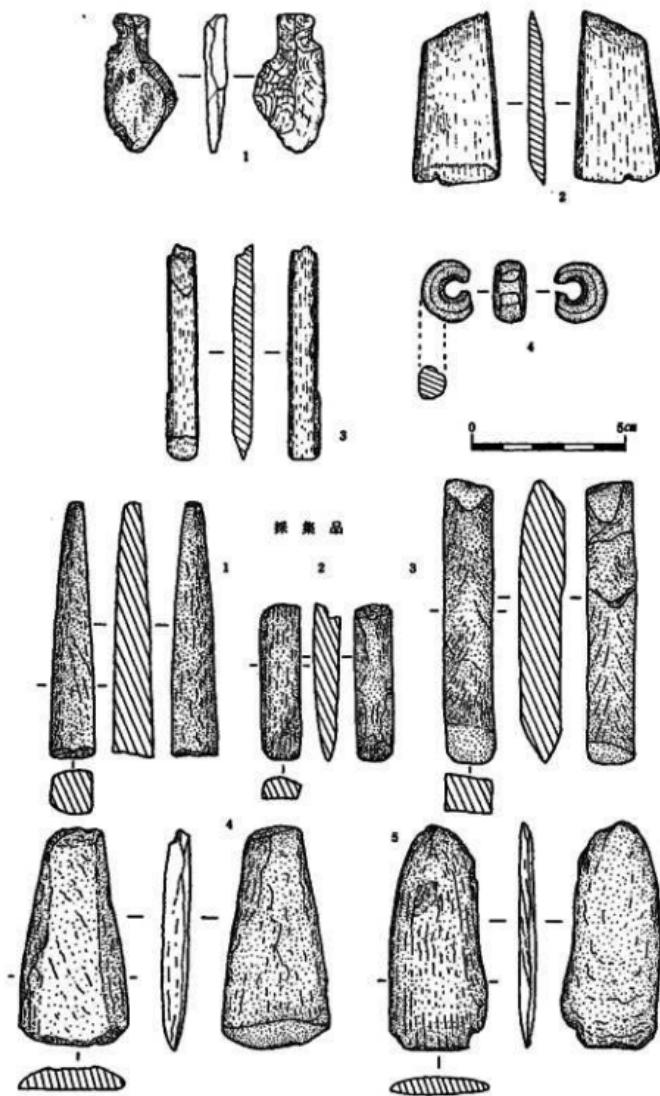
第46図 石  
皿



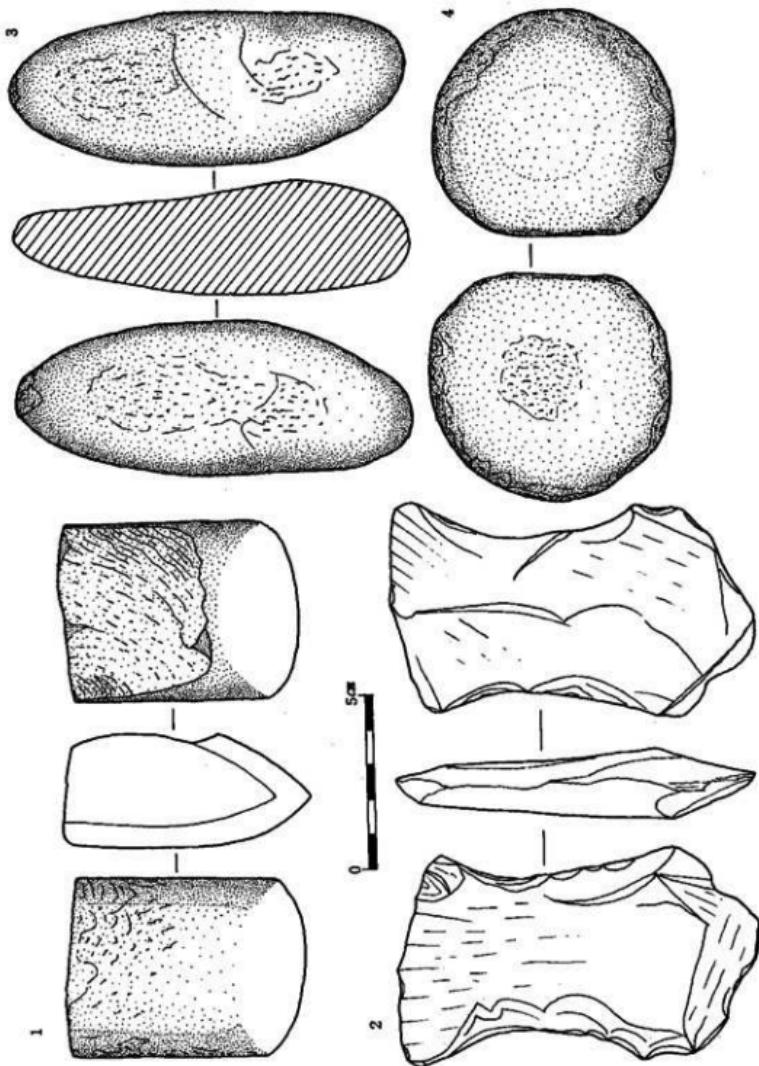
第47図 痘石



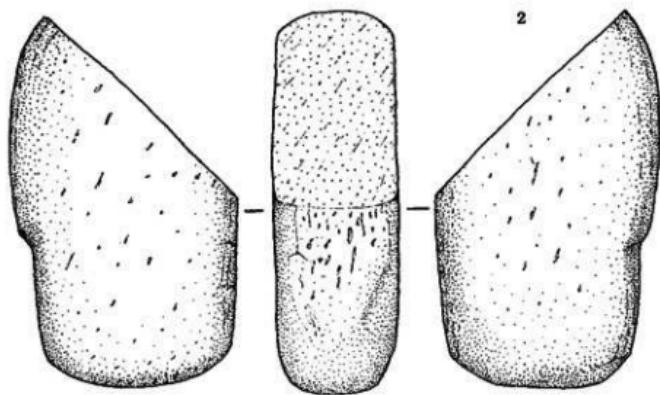
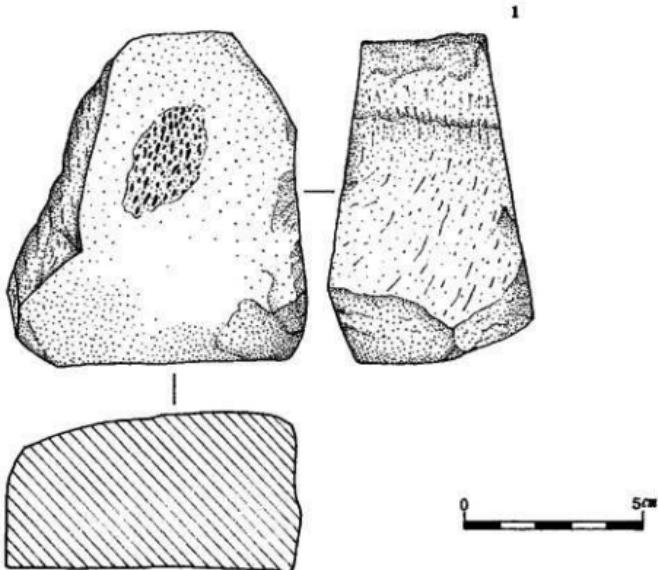
第48圖 石 斧



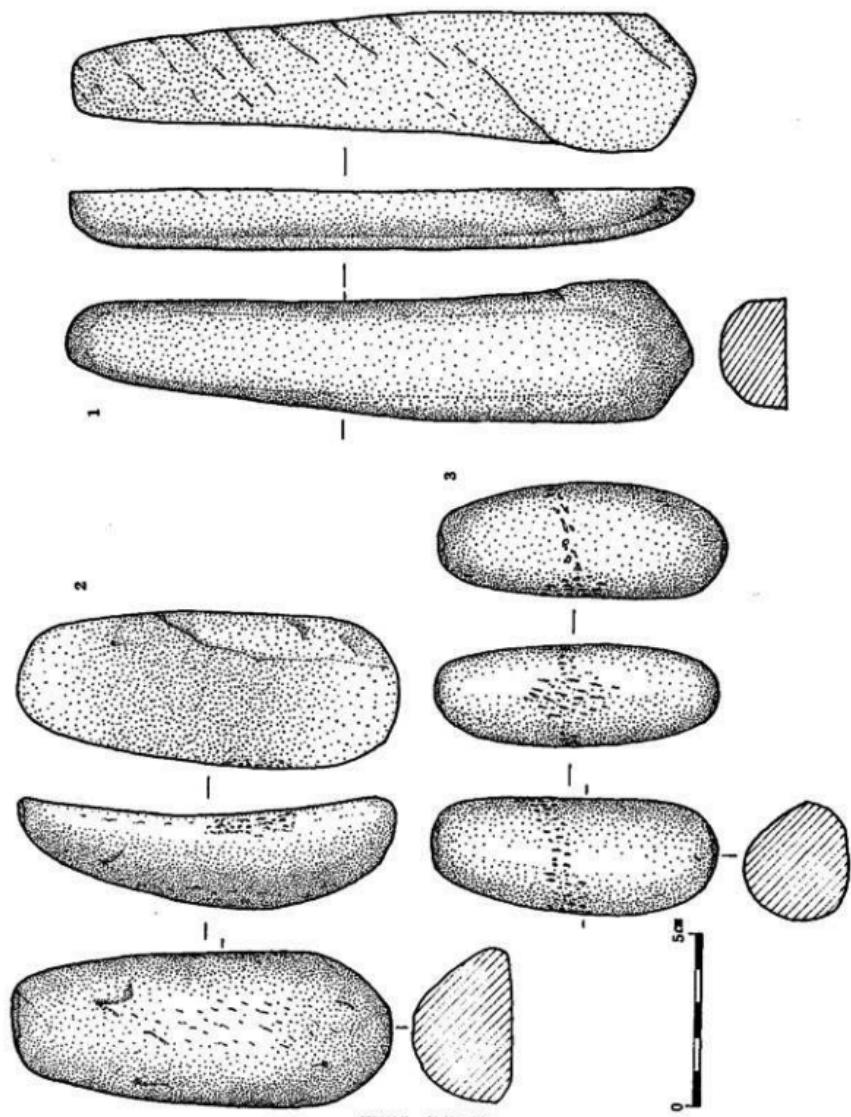
第49圖 石匕，石斧，玦狀耳飾



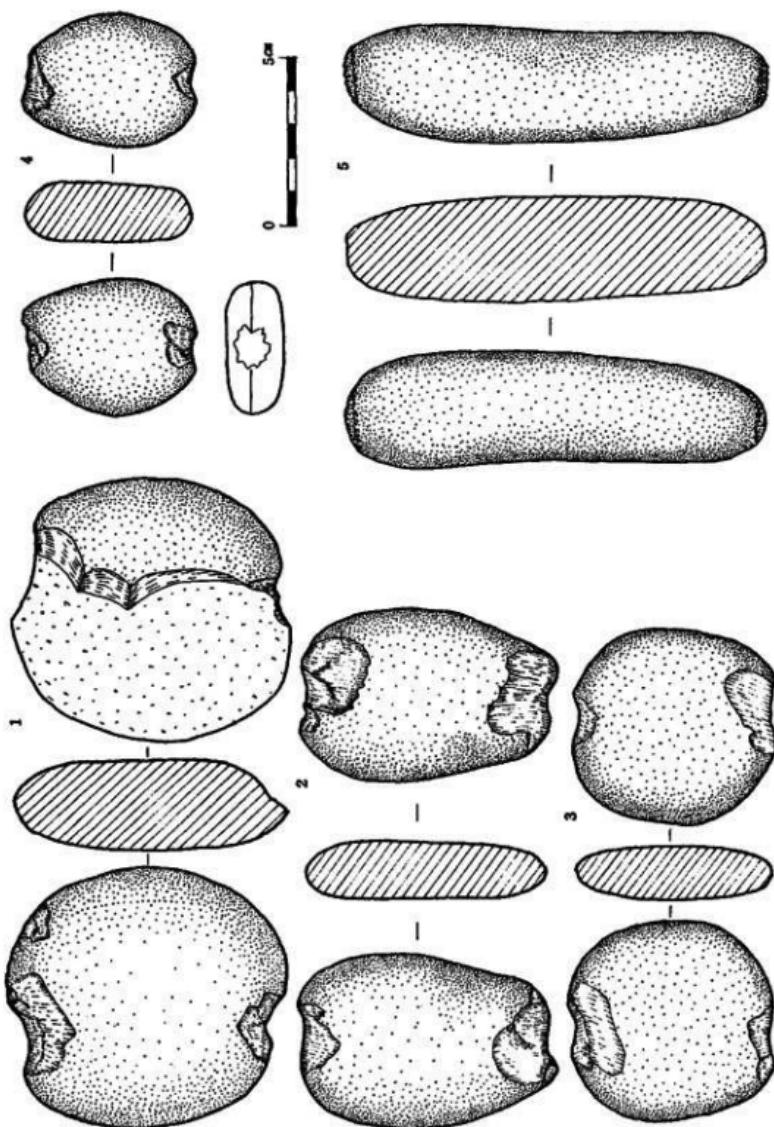
第50图 石斧、棒状燧石、玉石(搅乱层出土)



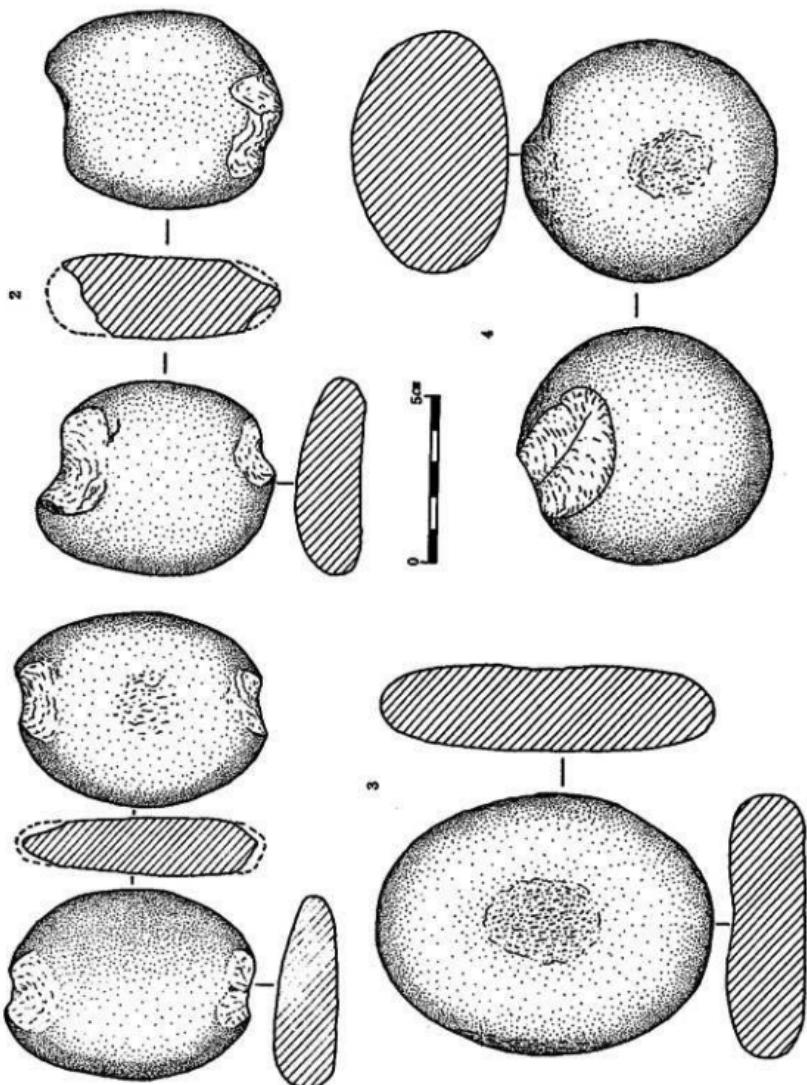
第51図 角形状石



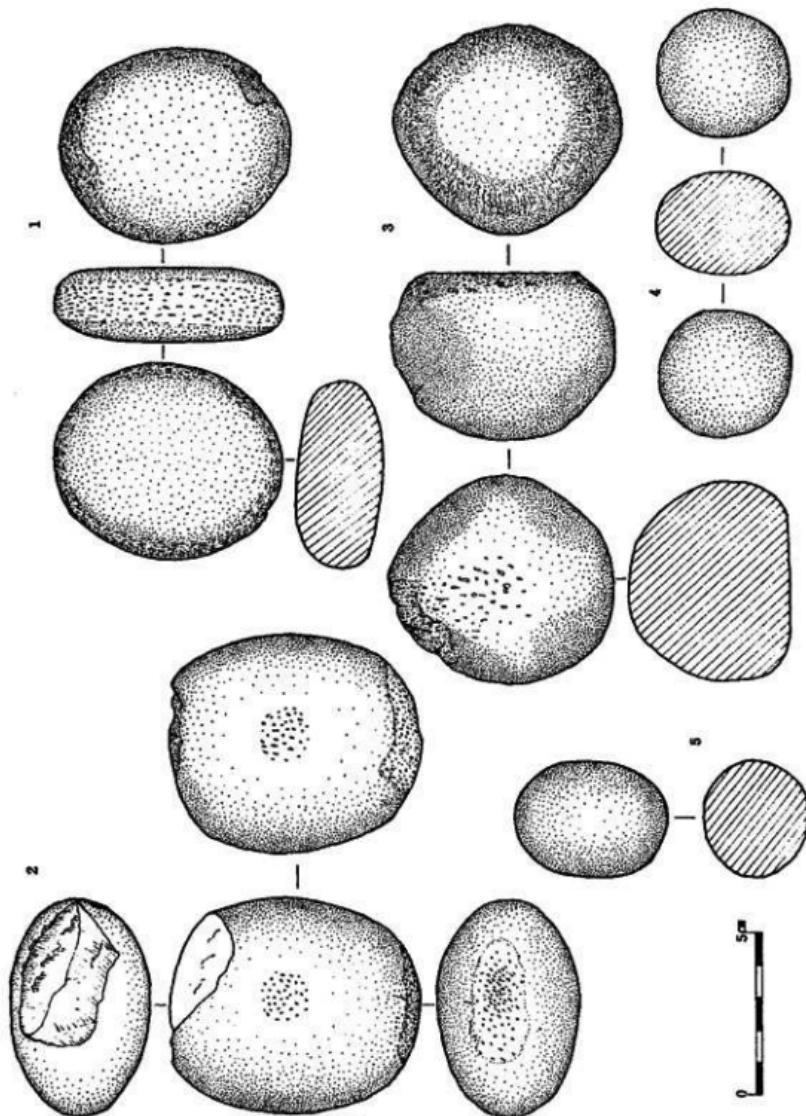
第52图 棒状石器



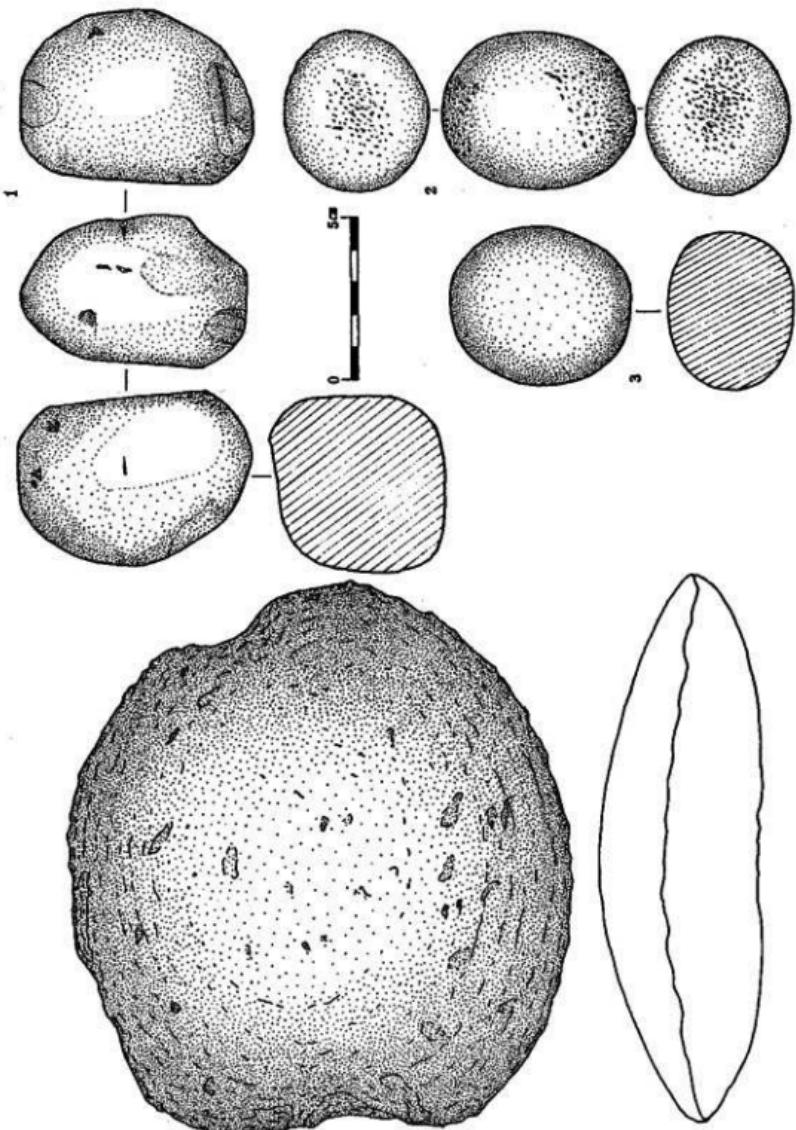
第58圖 石器，棒狀槌石



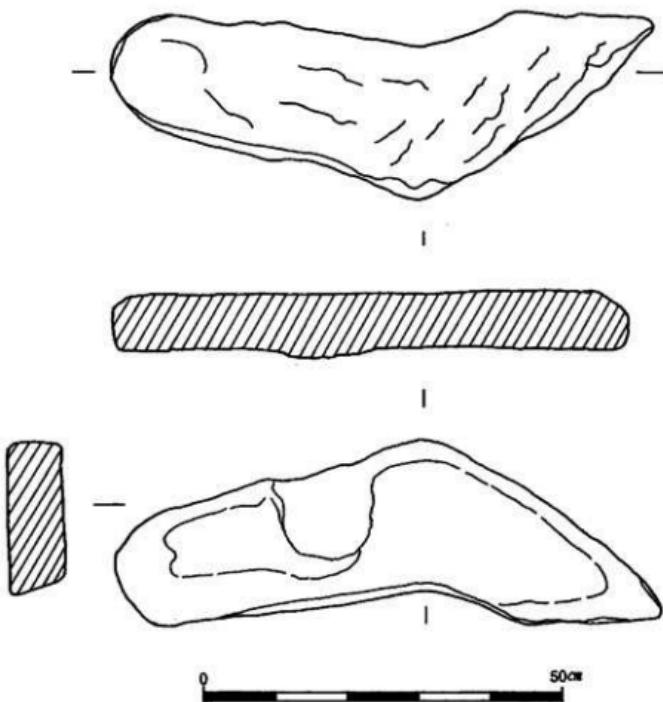
第54図 石錐, 磨石, 玉石(擾乱層出土)



第55圖 玉石、磨石



第56図 玉石、円盤状石器



第57図 台 石

### 台石

第57図である。これについては、すでに石組造構の項で述べたように、平面形く字状をなしておらず、長さ78cm、最大巾24cm、厚さ10cm、重さ80kgの大石である。石材は砂岩の自然石である。配石状況は、ほぼ水平を保って置かれ、周囲に多種の石片の散乱が認められ、黒曜石の細片もかなり出土した。下面（置かれた状態から）に若干凸部があるものの、他は平坦を有し、上面は典型的な平坦面である。しかし、外縁部の周辺を残し中央部分は表面の一皮が剥落しており、かなりの敲打を受けた形跡があることから、台石として利用されていた可能性が強い。

第4表 石器類一覧表

類別	遺物番号	出土区	層位	石材	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
石皿	131	A-北	3 層	花崗岩	30.5	18.0	1.5	5.3	約3/4欠
々	204	A-1	3 々	々	41.5	24.0	1.5	10.5	約1/2欠
々	24	A-北	3 下々	々	22.5	8.5	1.5	12.0	約1/2欠
々	208	A-1	3 々	々	22.0	8.5	1.0	5.9	約8/4欠
々	18	A-北	3 下々	砂岩	21.0	15.5	1.0	5.0	約8/4欠
々	54	A-2	3 々	花崗岩	20.0	4.0	1.5	9.2	約2/8欠
々	11	A-5	3 々	砂岩	18.5	13.0	4.0	2.8	約8/5欠
々	55	A-北	3 々	花崗岩	35.0	20.5	1.5	7.2	約8/4欠
々	205	A-1	3 々	々	44.5	19.5	1.8	7.9	約1/2欠
すり石	13	A-3	3 々	砂岩	11.5			5.7	0.605 約1/2欠
々	127	A-北	3 々	々	11.8			5.4	0.715 約1/2欠
々	34	A-3	3 々	々	18.0			6.8	0.540 約2/8欠
々	5	A-2	3 々	々	11.2			5.6	0.795 約1/8欠
石斧	77	A-北	3 々	々	7.0	6.0	2.8	0.170	
々	48	A-北	3 々	玄武岩?	9.6	6.9	3.7	0.850	
々	33	A-北	3 下々	々々	11.5	5.5	8.1	0.840	
々	47	A-北	3 々	粘板岩	11.4	4.7	1.5	0.120	
々	208	A-1	3 々	玄武岩?	10.5	5.4	2.4	0.240	
々	8	A-北	3 々	々	5.4	2.8	0.5	0.020	小形石器
々	90	A-1	3 々	粘板岩	7.0	1.0	0.5	0.015	ノミ状石器
石匕	表採	B地点	表々	チャート	4.4	2.8	0.6	0.100	
角状形蔽石	47	A-北	3 々	砂岩	6.2	5.7	4.2	0.610	
々	7	A-3	3 々	々	10.5	6.2	3.5	0.830	
台石	18	A-北	3 下々	々	78.0	24.0	10.0	30.000	
棒状槌石	188	A-1	3 々	々	18.0	4.0	1.7	0.185	
々	1	A-2	3 々	々	10.8	4.5	2.8	0.220	
々	84	A-2	3 々	々	8.1	3.8	3.0	0.185	
々	124	A-北	3 々	々	12.4	3.5	3.0	0.220	
石鍬	21	A-北	3 々	々	8.0	7.7	2.7	0.170	
々	58	A-2	3 々	々	7.1	5.1	1.7	0.100	
々	82	A-北	3 々	々	5.7	5.9	1.6	0.080	
々	41	A-3	3 々	々	5.0	4.0	1.7	0.050	
円盤状石器	42	A-北	3 下々	輝灰岩	16.8	15.2	4.9	0.180	
玉石	122	A-1	3 々	砂岩	7.7	6.7	4.8	0.850	
々	3	A-6	3 々	々	6.4	6.4	5.1	0.275	
々	28	A-北	3 下々	々	4.0	3.9	3.1	0.070	
々	248	A-1	3 々	々	4.6	3.5	3.1	0.080	
々	228	A-1	3 々	々	7.2	5.2	4.6	0.265	
々	27	A-2	3 々	々	5.9	4.7	4.4	0.150	
々	60	A-2	3 々	々	5.5	5.8	8.8	0.130	

### 5. 块状耳飾り

第49図の4である。A-1トレンチ東端の8層に出土したもので、遺物番号240、レベル高107.14mである。出土状況は、周囲に土器片、黒曜石片、石片等の散乱があるなか、特別の状態や施設を伴ず、単独で出土した。色調は、淡緑色であるが、全体的に茶色や黒色などの斑（むら）が多く、素材は蛇紋岩と推定できるが、良質とはいえない。長さ1.9cm、厚さ1.1cmあり、中央部に両面から貫通した径0.6cmの穿孔と、0.3cmの抉部を作り出している。抉部の先端部分をわずかに欠損している。全面良好研磨がいきとどき、光沢もあり、つるつるした手触りを感じる。両面共に、円周部が最も厚く、穿孔部に向って段をもった窪み状になし、実測図左の穿孔入口部がかすかに太く、反対面の孔が細くなっている。従って、左面部より最初穿孔作業を行い、貫通した時点での右面の孔を拡張し、形を整えたものと推定できる。

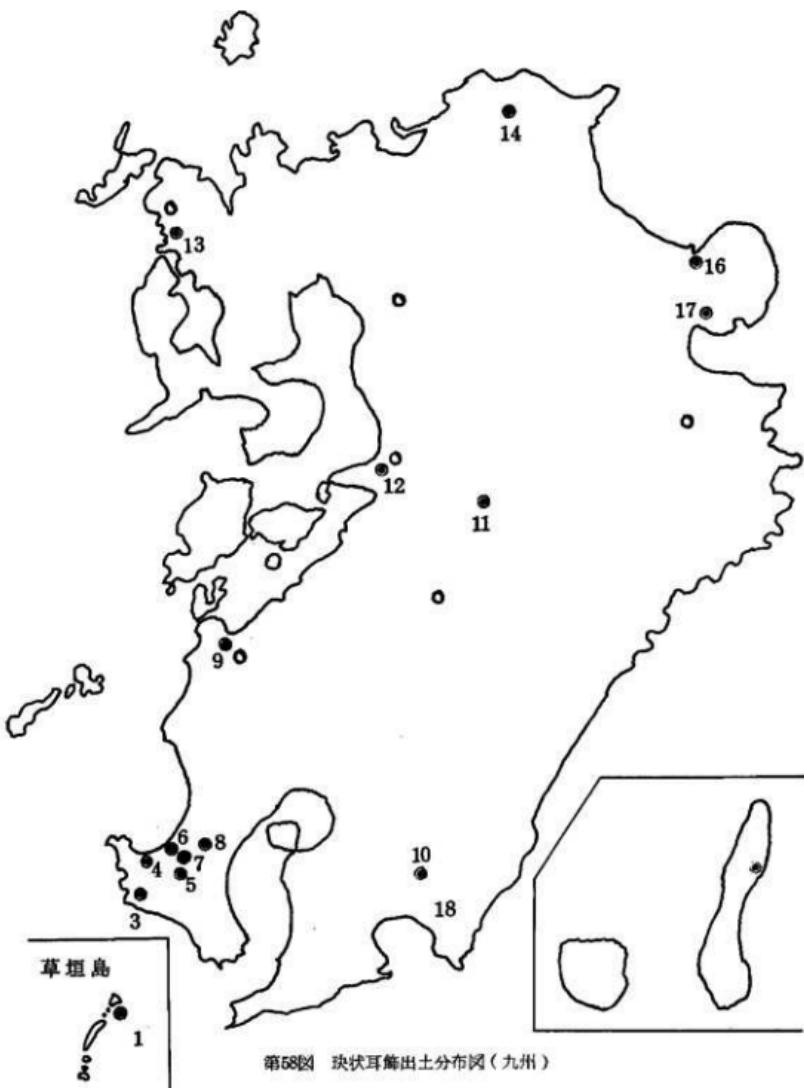
いずれにしても、本遺跡の発掘調査では唯一のものである。以下、参考のため、九州地方の出土例と比較してみたい。

(注8)  
第5表 塊状耳飾一覧表

番号	遺跡名	長さcm	厚さcm	色調	材質	復元	伴出器	備考
1	草ぬ島	6.8	0.72	淡緑色	ヒスイ	柳円状	不明	枕崎市立図書館蔵
2	田ノ船	3.5	0.4	茶褐色	?	柳円状	不明	西之表市立種子島博物館蔵
8	鳥越	3.8	3.85	茶褐色	?	三角形状	不明	坊津町民俗史料館蔵
4	西之瀬	4.8	0.4	青緑色	軟玉	円形状	轟式	鹿児島県立博物館蔵
5	南田代	4.2	0.6	若草色	硬玉	円形状	不明	東和南氏所蔵
6	上焼田	3.8	0.7	乳白色	滑石	円形状	轟式	鹿児島県立博物館蔵
7	阿多比塚	4.7	0.5	灰緑色	蛇紋岩	円形状	轟式	金原町教育委員会蔵
8	今木場	2.2	1.0	濃緑色	硬玉	円形状	金環状	不財 本庄道臣氏所蔵
9	莊貝塚	2.2	0.8	褐色	大理石	円形状	轟式	1978年 出水市教育委員会蔵
10	倉園	4.8	0.6	青緑色	硬玉	円形	不明	前田義氏所蔵
11	松ノ木坂	2.4	1.2	灰緑色	滑石	円形状	指貫状	小畠弘己氏所蔵
12	轟山塚	4.8?	?	乳白色	大理石	円形状	不明	1919年 筑波大学考古学研究所報告第5冊
13	下本山岩陰	6.4	?	?	イタボガキ貝	長方形	不明	1972年 佐世保市教育委員会蔵
14	新延貝塚	4.1	0.75	乳白色	大理石	円形状	船穴式	1980年 稲毛町埋蔵文化財調査会発掘
15	沖ノ島四村 沖ノ島四村 沖ノ島四村	3.2	0.2	?	粘板岩	長方形	不明	1980年 橋田信介宗像沖ノ島上
16	石原貝塚	4.0	0.85	灰白色	石灰岩	柳円状	不明	1979年 大分県教育委員会蔵
17	川源田洞穴	2.7	0.8	淡緑色	硬玉	円形状	不明	別府大学考古学研究所蔵
	?	?	?	白褐色	鹿角製	指貫状	不明	同上
	?	?	?	白褐色	鹿角製	指貫状	不明	同上
18	柳井谷	1.9	1.1	淡緑色	蛇紋岩	円形状	而末式	志布志町教育委員会蔵

番号は第58図に通ずる。

•<sub>15</sub>



第58図 痺状耳飾出土分布図(九州)

## 6. 炭化物

今回の調査では炭化物の出土がめだった。特に多かった区域は、A-1 東寄りから A-2 区に集中して出土した。これは、黒曜石剥片の出土区域と同じ状況であった。一部は出土位置並に層位確認のため、平板、レベル測定を行って取り上げたが、まとまりに欠け、散乱の状態であったので、他は一括して取り上げた。計量の結果、一括したものだけで、100g あった。炭化の状態は良好で、完全なものも認められ、形状は、橢円状が最も多く、正円状のものも含まれ大きさは大小異っている。なかには、外皮をかぶったものも認められる。種類は、一見ドングリ類と考えられるが、専門的見解が必要である。炭化物は年代測定には好資料であるので、後日、種類の鑑定と共にこれについての究明も急ぎたい。

## 7. 黒曜石

主として A-1 トレンチ東寄りから A-2 トレンチに集中していた。石器類(石鏃、石ヒ類)として調べたものは皆無で、總て、剥片、特に爪先の何分の 1 という程の細片が多く、合計數十点が認められた。これも一部平板、レベルによって取り上げ、他のものは一括にした。

## 8. 其の他

以上が今回の調査で出土した遺物の總てである。しかし、この他にも、発掘に取りかかる前に行った表面採集作業や、表層や 2、3 層の擾乱層に出土したものが多數あった。この内、参考になる一部は記載したものの、ほとんどは図示することができなかった。この中で特に目につくものとしては、A-6 区の表層に出土した石鏃 1 点、B 地点に表面採集された石臼の破片、黒曜石(良質)、その他、棒状槌石、敲石、可なり大きい土器破片等である。これら不足の分については、後日、機会を見て可能な限り消化したいと思う。

## 第5章 まとめにかえて

柳井谷遺跡の発掘調査は、学問的充実を目的とした学術調査や、最近さかんに実施されつつある各種農地整備事業に伴う事前調査とは性格が全く異り、工事施工より數十日を経過した時点の緊急発掘だっただけに、結果を多く望むことには無理があった。これは、遺跡地に工事が進展中という報に接し、急発現地調査を行い、大きく変貌した現場の状況を見た時からの実感でもある。また、早速発掘調査が計画されたが、発掘に取りかかるまで数日という短期間では充分の準備体制を整えるまでに至らず、工事施工期間の関係、ひいては、今年度の農作物の作付けなども考慮し、調査期間を短日に絞らざるを得なかった。こうした幾多のハンデー・キャップを負った発掘調査だっただけに、唯且に、期限に迫られての残存遺物の取り出し作業に終始し、層位的な出土状況、土器の編年、あるいは具体的な生活文化の内面等、当面解明を必要とする重要な課題は積み残したままの発掘調査になった。しかし、これまでの採集調査の結果、豊富な内容を包蔵する重要な遺跡、と衆目されていた本遺跡を、消失寸前に捉え、部分的にもせよ、具体的な内容を把握できたことに大きな意義があり、これから学問的解明に役立つものと思われる。

先づ、今後の遺跡保存に深い関係のある残存部分の層位であるが、すでに第3章第2節層位の項で述べたように、各トレンチを含め、表層より第3層上部部分までは消失あるいは擾乱の状態が見られ、正確な層位堆積とは考えられない。主トレンチ(A-1～北拡張区)の場合でも、遺物包含層に、スキ、耕運機、あるいは、ブルドーザーの輪痕と考えられる縦横様が見られ、開墾以来相当長期間にわたり耕作されているため(明治以前と聞く)、多数の芋っぽが掘られる等、層位の擾乱がめぐらしくなった。これは、A-1トレンチ8層下部に集中した鷹文晩期Ⅱ式土器が、1ヶ所にまとめていたにも拘らず、約8分の1の器面が不足し(他面は完全に接合した)、第20図の2で示した約8分の1器面の市来式土器などの出土状況からも考えられる。次に、発掘目的の一つでもある、消失をまぬがれた周辺の状況であるが、以前表面散布の多かったA-4トレンチ一帯では、若干地形が高位にあったものが、主トレンチ面よりもやや下位まで削平され、遺物の出土が皆無という結果からも包蔵の可能性は失なわれている。A-5、A-6トレンチ周辺区域は、現在の地表下40～50cmに遺物の包蔵が認められるので、これ以上の表面削取は遺跡の消失につながるので、工事関係者に若干の盛り土を依頼しておいたが、今後の観察もまた必要であろう。B地点は大半消失し台地末端部に若干残存しているので、これ以上の改良工事は絶対にかえるべきと考えられる。こうした最悪のなか、本遺跡の主体部と考えられていた台地北端の一帯は、幸い、工事除外区域であったため、原形を保っていたが、今後いかなる事態が到来するやもしれない。この部分だけでも完全且つ長期的視野に立った保存対策が必要であろう。

遺物の量は多種且つ多彩な内容であった。しかし、出土状況は一般的にまとまりに欠け、散乱の状態に類するもので、復元や接合できるものは数が限られていた。従って、特徴あるものは小片まで取り上げなければならず、一部は以前の採集調査で集められていたものも参考資料として図示した。

今回の調査で検出された土器類は、各種の器形や文様を有する深鉢型が主体をなし、基本的には12類に分類を試みたが、結果的には多くの問題点や疑問が生じ、必ずしも満足できる内容には至らなかった。これら不思議な点については、今後の課題として、指摘を贈りつつ訂正を行っていただきたい。

第1類並に第2類土器は、共に指頭状の太形文様を有し、器面に貝殻腹縁による調整痕を残す一群であるが、前者の場合、口唇に直交する指頭状押圧痕や器形の点では、田代町岩崎遺跡出土を標識とする岩崎下層式土器に類似するものの、腹部施文は平行する直線に変化しており、若干の差異が認められる。この類の好資料としては、末吉町宮之迫遺跡に多数出土しており、考察のなかに「どのような背景で登場したか定かではないが、中略、並木式一阿高式一南福寺式と変化する西北九州の土器文化の流入、拡大にその脈流を求めるを得ない現況である」と述べられており、後者を含め、後出の指宿式、綾式など南九州を代表する細沈線文土器につながる要素を多分に含む土器であろう。宮之迫遺跡の他に、町内で確認されている遺跡としては、宮前、倉檍、小牧遺跡等があり、この地方への流入や浸透、更には定着をうかがい知ることができる。第3類としたものは、この辺りで最も出土例を多く見る指密式である。南九州一円に広く分布することは言うまでも無いが、町内を見る限りでも数回の発掘例、十指以上の採集による遺跡確認がなされ、この土器文化のこの地方への定着性と拡大を示すものである。今回は一括したが、これを器形や文様等を更に細分類すると、若干の変化や推移がみられ、こまかに時代差なども判明するものと考えられる。第4類とした完形土器は、太形の平行沈線を描き、沈線間にアナダラ類の貝殻腹縁による擬似繩文を施したもので、一般的にこの土器は、東北九州地方の磨消繩文系土器が南九州に土着変形することによって生み出されたとされ、出土例としては、宮崎県綾町尾立遺跡や鹿児島市春日遺跡等が著明である。この土器も、こうした地域的な進展のなかで、土着変形したものであろう。第5類並に第6類土器は、磨消繩文あるいは擬似繩文を有する一群で、この地方に東北九州地方を主流とする小池原式、鐘ヶ崎式系統の技法が流入したことは、地形的な背景によるもので、片野川穴遺跡出土の西半式土器などの素流になったものと考えられる。第7類は、最近河口貞徳氏の提唱されている松山式土器である。若干疑問のあるものも一括して図示した。第7類以下第10類までは、一般的に指宿式土器に後出する市来式、草野式、あるいは、これに共伴する土器群で、うち、市来式土器が量的に最も多く、器面の文様に大きな変化は無いものの、独特の口縁部の形状は多岐にわたり、細かく分類すると数種にのぼるものと考えられる。今回の出土土器のうち、最も異彩をはなつものとしては、第12類とした完形土器であろう。広口で頸部しまり、腹部にく字状の屈折部をもち、四個のリボンを着している。底部はいわゆる円盤貼り付けで、器面に若干の研磨が認められる。この土器は、長崎県津石原遺跡、長崎市深浦遺跡<sup>(註10)</sup>に類似土器の出土があり、昭和27年に発掘調査が行われた黒川洞穴遺跡では、リボン付着の2点を含め多量が出土し、標識名を黒川式土器と名付けられた<sup>(註11)</sup>時期は、繩文晩期初頭とされている。この土器は、包含層の最下部に出土したもので、これまで述べてきた岩崎上下層一指宿式一市来式一草野式土器と続く繩文

中期終末期より後期後半期までの層位より、下位に出土したことになり、大きな疑問が残る。これは、前に述べたように、この土器に関連ある落ち込み、あるいは、住居跡があったにもかかわらず、全く気付かぬまま掘り下げた結果で、擾乱のため地質の識別が困難だったとはいえ、痛恨を後に残した大きな手落ちであった。この土器は、勿論この地方では初めての検出であり、そのもつ意味あいは決して小さいものではない。今後の類例に期待したい。

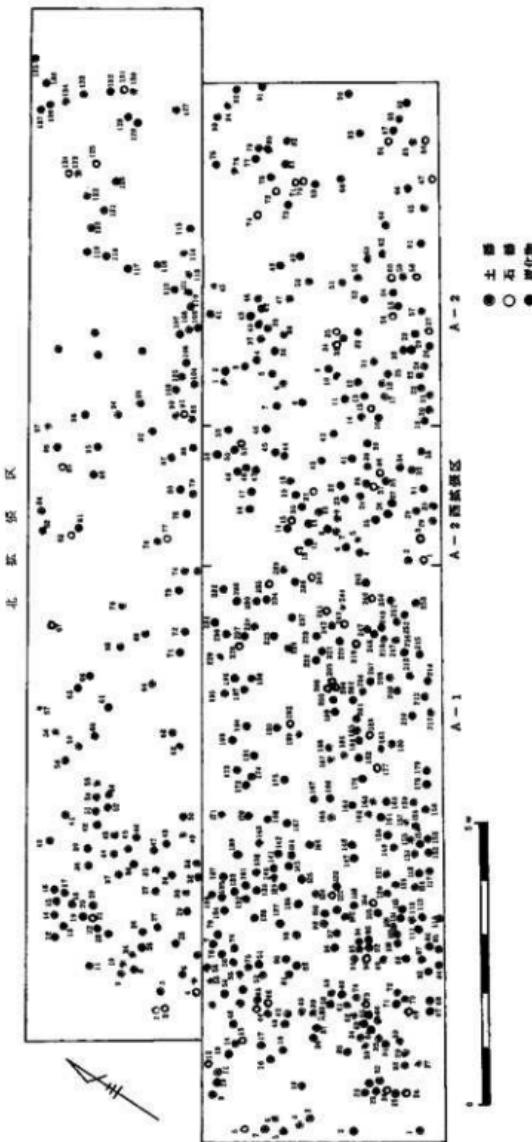
石器類で特異なものとしては、ノミ状石器をあげることができる。今回の調査では一点だけの検出に終ったが、以前の採集でも数点あり、これらがどの形式土器に共伴するかは定かではないが、今回のものはすくなくとも、市来式土器が多量に出土した第3層にあったことだけは確かである。このような小形石斧は、形態から考えて当然細工に必要な工作具であったことはほぼ間違いないものと考えられ、この時期の生活文化的一面をうかがい知る好資料といえよう。

次いで、块状耳飾もまた注目に価する出土品の一つである。九州地方のものをまとめられた上田耕氏によれば「龜文前期後半の轟式期に存在したものと考え、九州以東により古い例が多く見られることから、現段階では九州への伝播は東日本からであろう」<sup>(註12)</sup>と発表され、現在九州で確認されているもの25遺跡、89個、うち、志布志町倉庫に完形1点が採集されている。<sup>(註13)</sup>とある。更に、共伴土器の下限を黒川式土器に求められていることから、当然、本遺跡のものもその範囲内であり、こうした装身具着用（諸説がある）の風習までも、大きな土着文化の流れの中で培まれていたこともまた確かである。

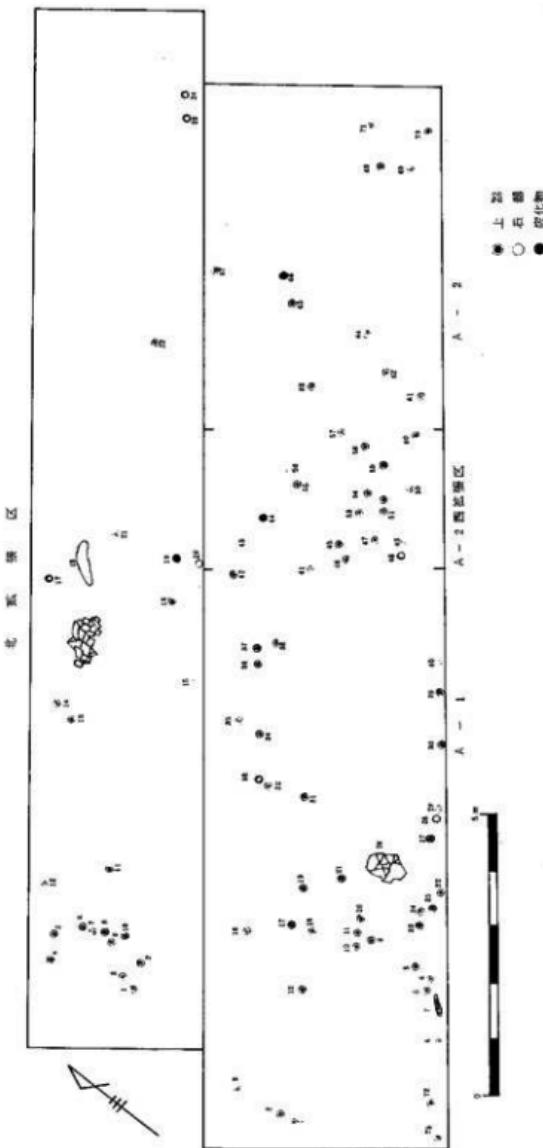
この外に、黒曜石、チャート等の剥片を多く検出したが、勿論この石材は、この地方に原産するものではないので、石皿利用の花崗岩を含め、他の地方からの移入品と考えるべきであろう。

#### 参考文献

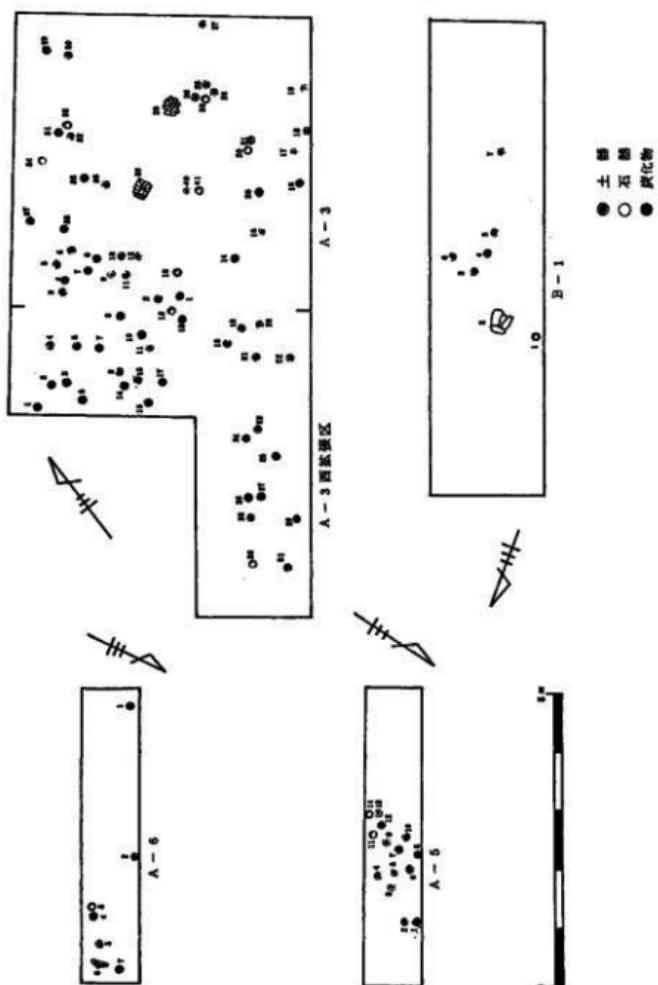
- |                    |              |       |
|--------------------|--------------|-------|
| 1. 志布志町誌上巻         | 志布志町教育委員会    |       |
| 2. 別府（石跡）遺跡        | 志布志町教育委員会    | 文化課   |
| 3. 東黒土田遺跡発掘調査報告    | 鹿児島考古第14号    | 瀬戸口口望 |
| 4. 錐石橋遺跡発掘報告       | 鹿児島考古第16号    | 河口貞徳外 |
| 5. 片野洞穴            | 志布志町教育委員会    | 河口貞徳外 |
| 6. 弓場ヶ尾地区（蓑輪、櫛）    | 志布志町教育委員会    | 文化課   |
| 7. 宮之迫遺跡           | 末吉町教育委員会     | 文化課   |
| 8. 九州における块状耳飾について  | 鹿児島考古第15号    | 上田 耕  |
| 9. 宮之迫遺跡           | 末吉町教育委員会     | 文化課   |
| 10. 考古学講座          | 雄山閣          | 賀川光夫  |
| 11. 黒川洞穴発掘報告       | 鹿児島考古学会紀要第2号 | 河口貞徳  |
| 12. 九州における块状耳飾について | 鹿児島考古第15号    | 上田 耕  |
| 13. 九州における块状耳飾について | 鹿児島考古第15号    | 上田 耕  |



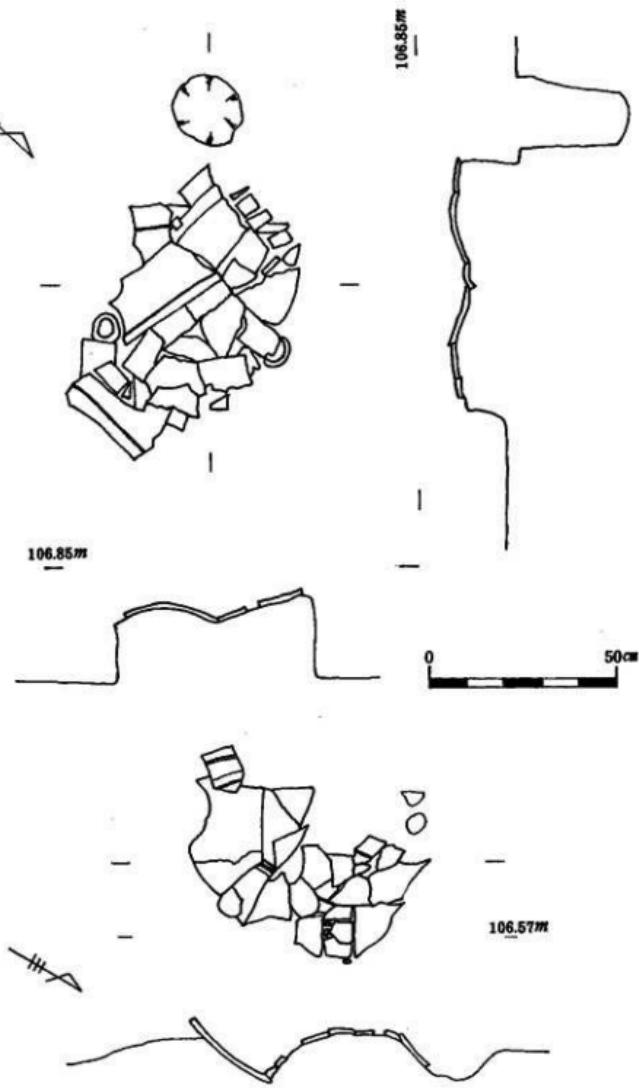
第59図 遺物の出土状況(8層B)



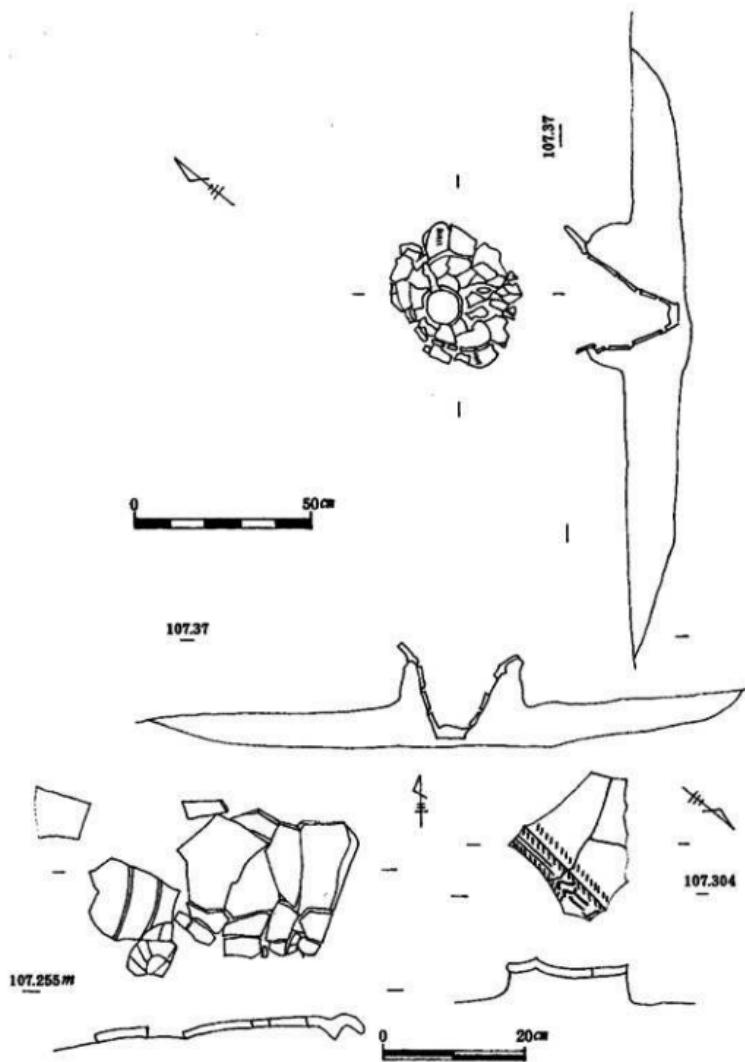
第60図 遺物の出土状況(3層<sup>b</sup>)



第61図 遺物の出土状況（3層a）



第62图 土器出土状况实测图



第68図 土器出土状況実測図



図版 1. 遺跡の遠景（西より）



図版 1. 遺跡の近景（東より）



図版2 発掘状況



図版2 発掘状況



図版3. 遺物の出土状況( A-1 )



図版3. 遺物の出土状況( A-1 )



図版 4. 遺物の出土状況 ( A-1 )



図版 4. 遺物の出土状況 ( A-1 )



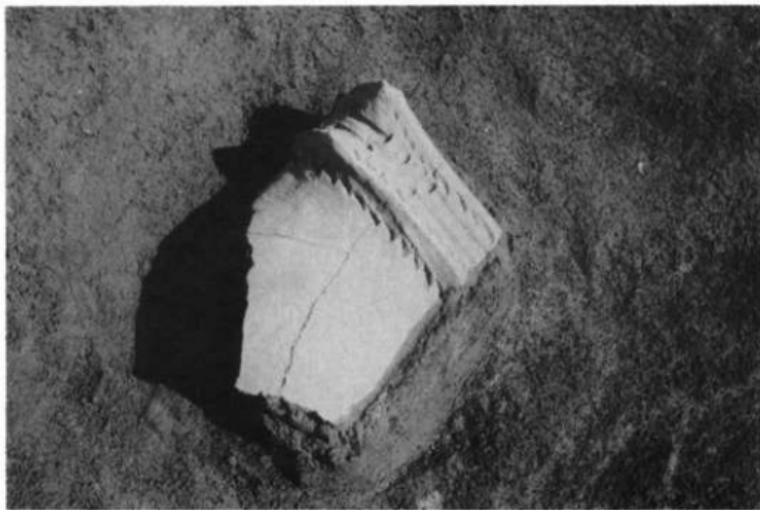
圖版 5. 土器出土狀況



圖版 5. 土器出土狀況



圖版 6. 土器出土狀況



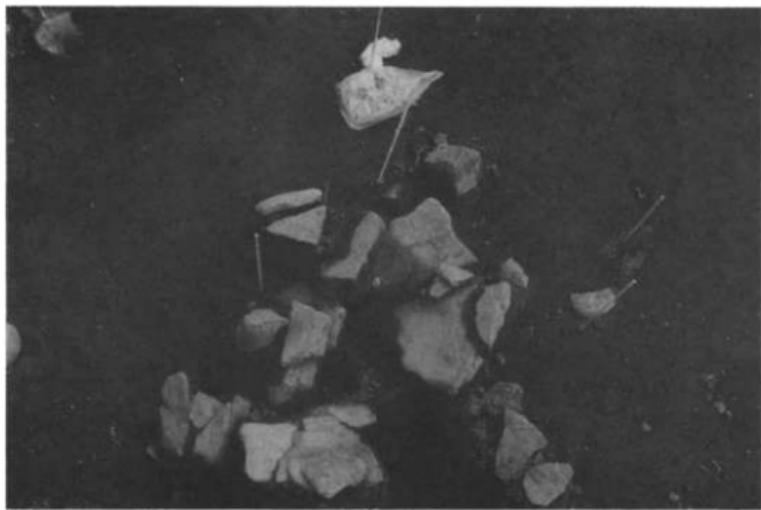
圖版 6. 土器出土狀況



圖版 7. 土器出土狀況



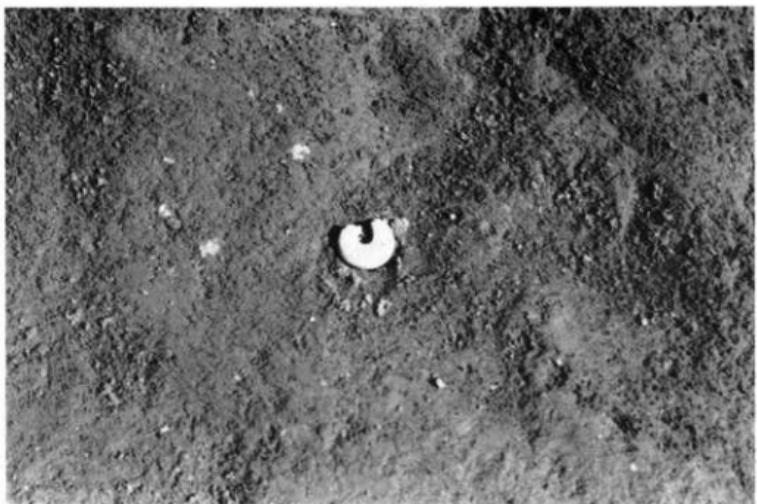
圖版 7. 土器出土狀況



図版 8. 遺物の出土状況



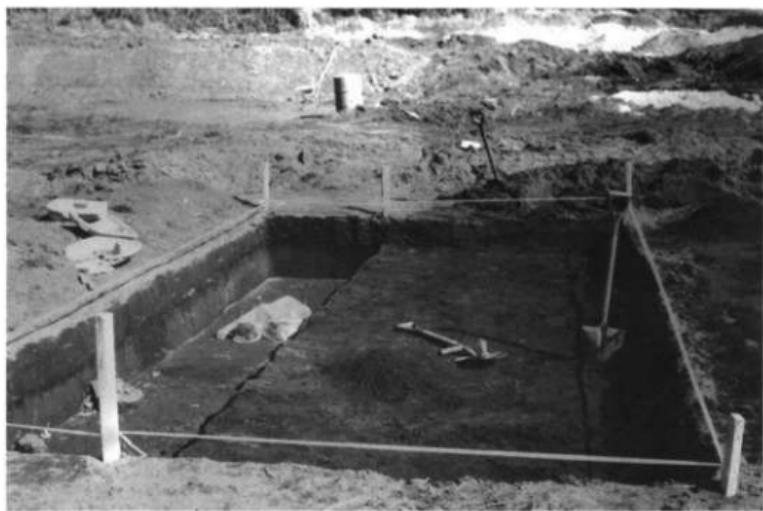
図版 8. 壁面露呈の石皿



图版 9. 球状耳饰出土状况



图版 9. 底部出土状况



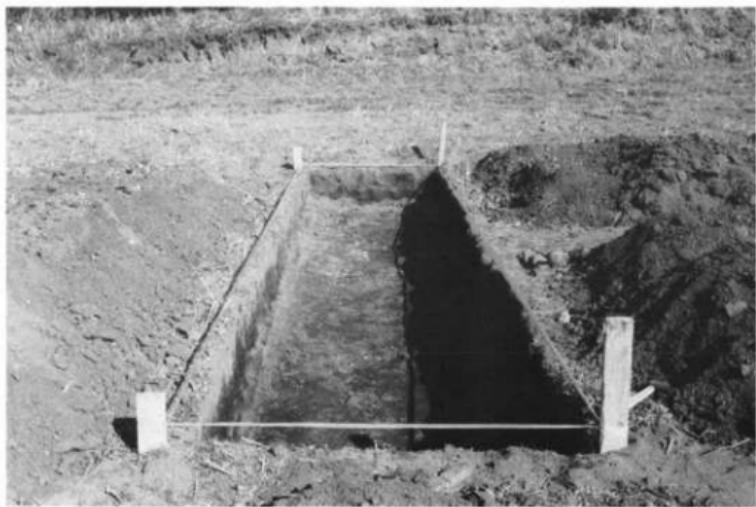
図版10. A-3 トレンチ



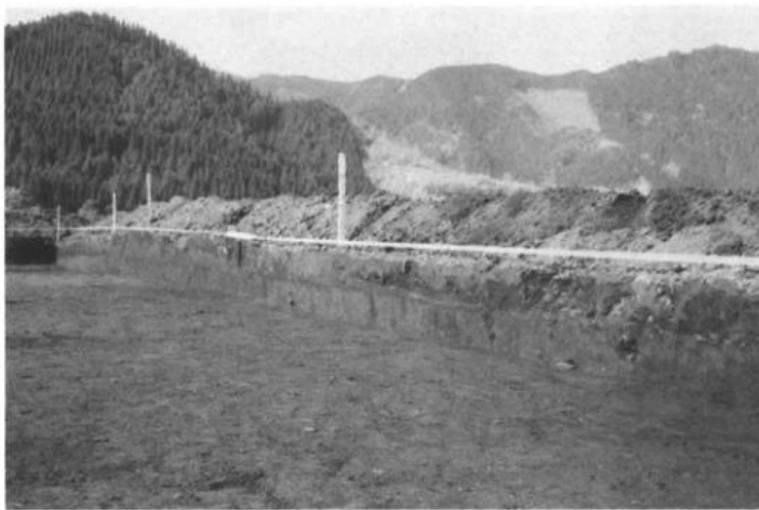
図版10. 遺物の出土状況（A-5）



図版11. 第6トレンチ終了



図版11. 第7トレンチ終了



図版12. 北拡張トレンチ終了



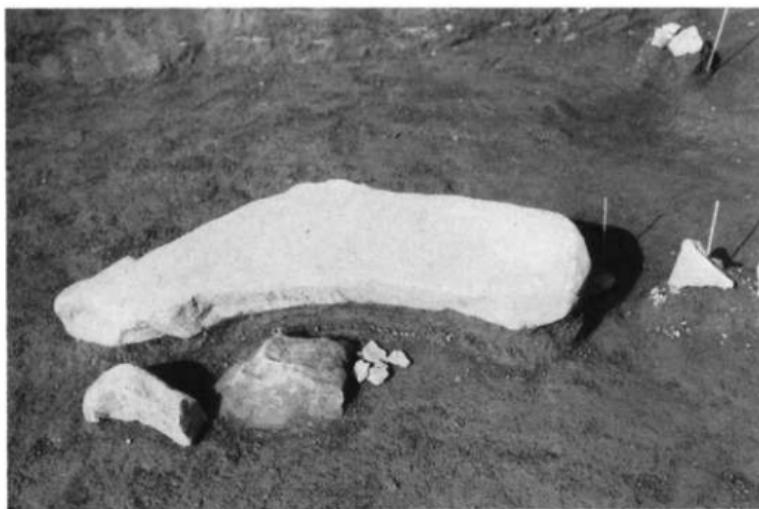
図版12. 第5トレンチの壁面(北)



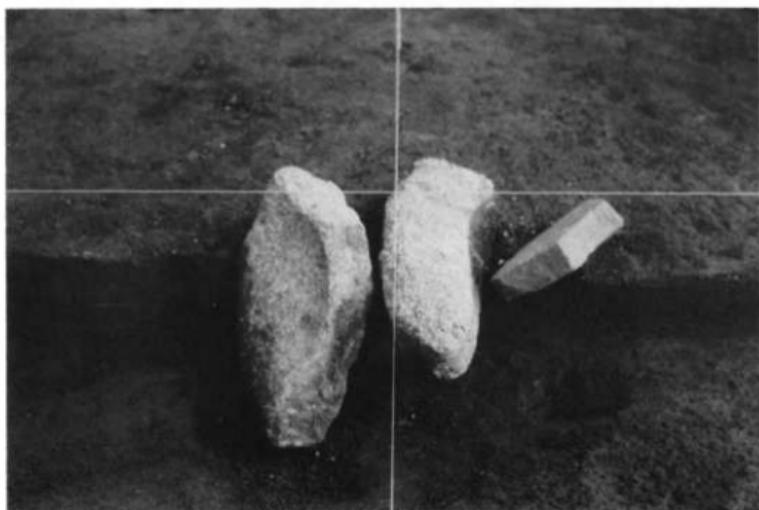
図版13. B-1 トレンチ



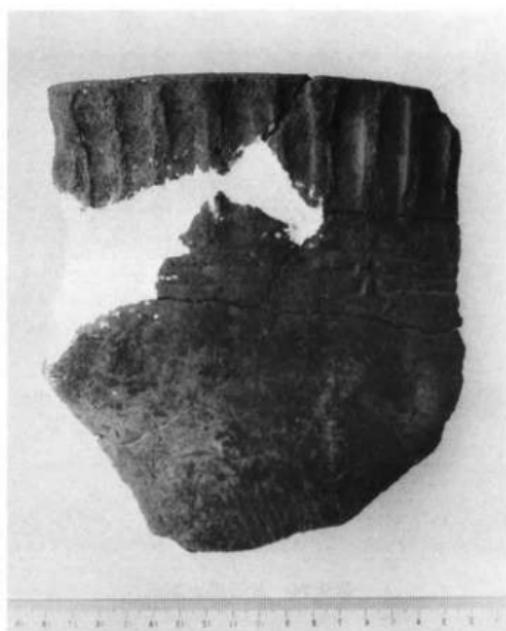
図版13. B-2 トレンチ



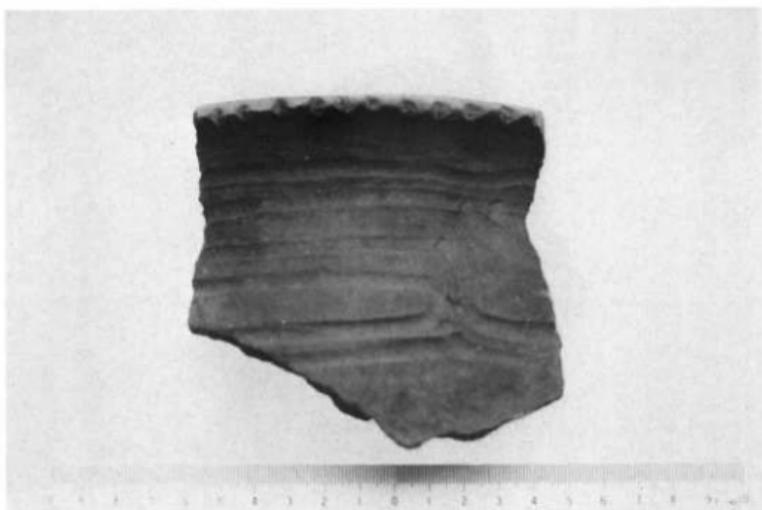
図版14. 台石出土状況



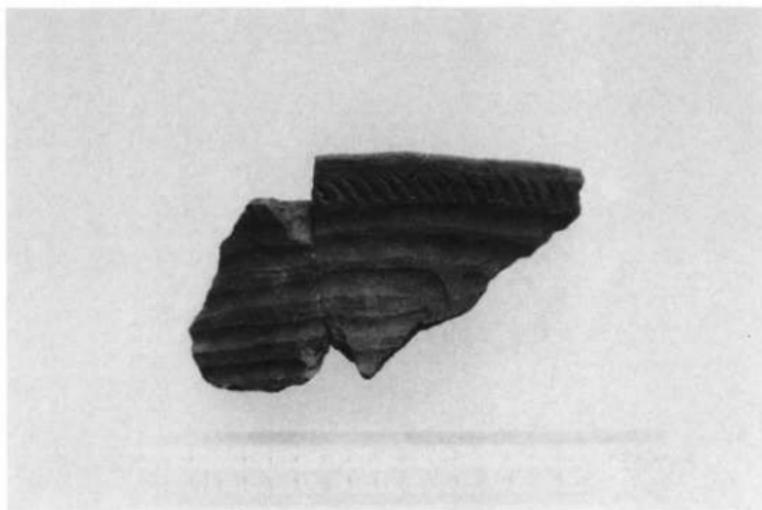
図版14. 石組遺構



図版15. 第1類並に第2類土器



図版16. 第2類土器



図版16. 第2類土器



図版17. 第2類土器



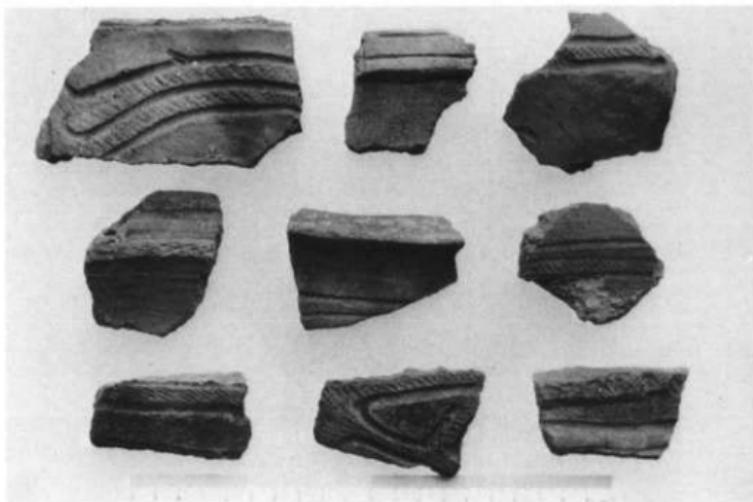
図版17. 同裏面



國版18. 第3類土器



國版18. 第3類土器



図版19. 第5類土器

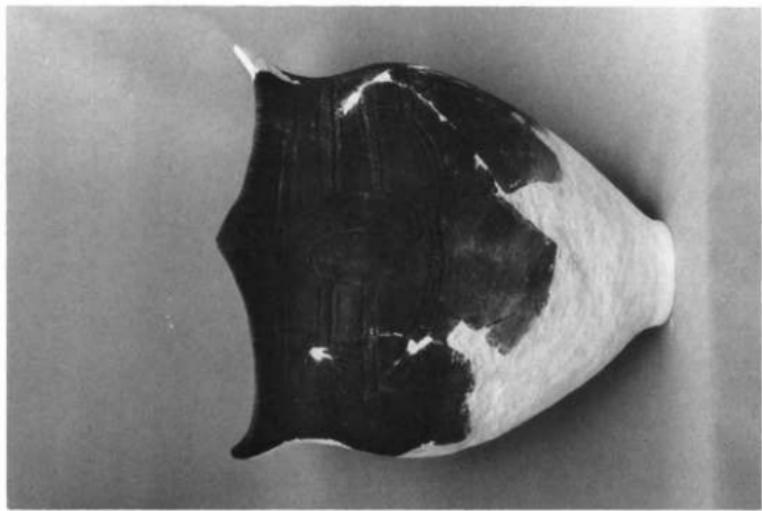


図版19. 第3類土器

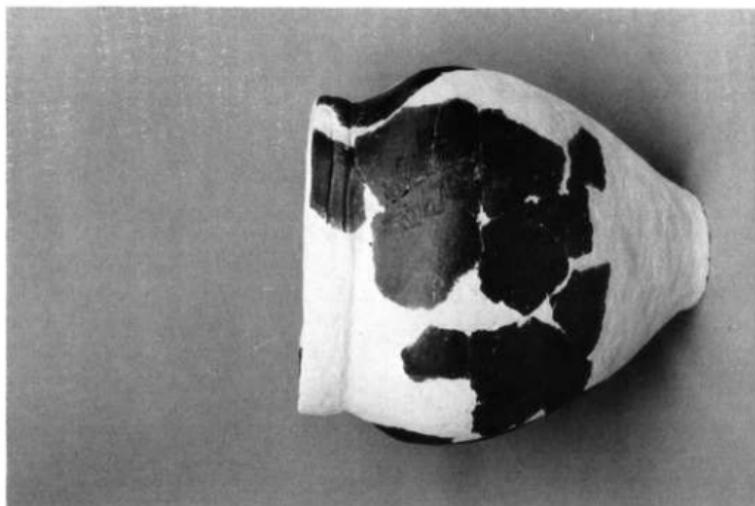
圖版 20. 同樣起部擴大



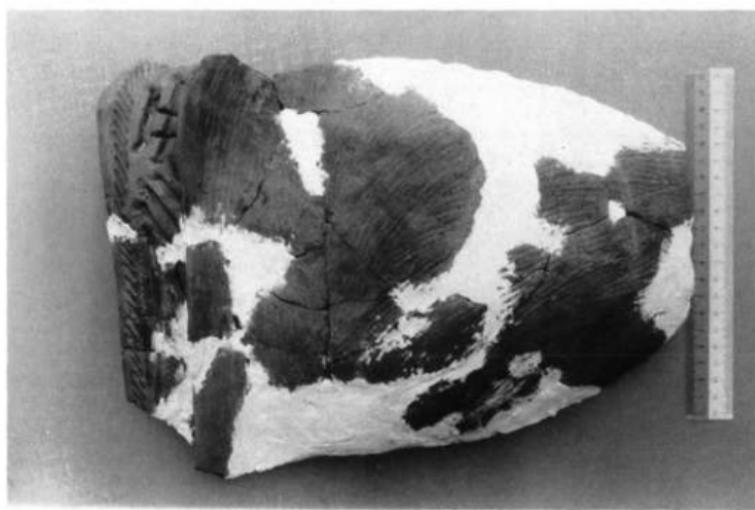
圖版 20. 第 4 類土器



圖版21. 第5類土器

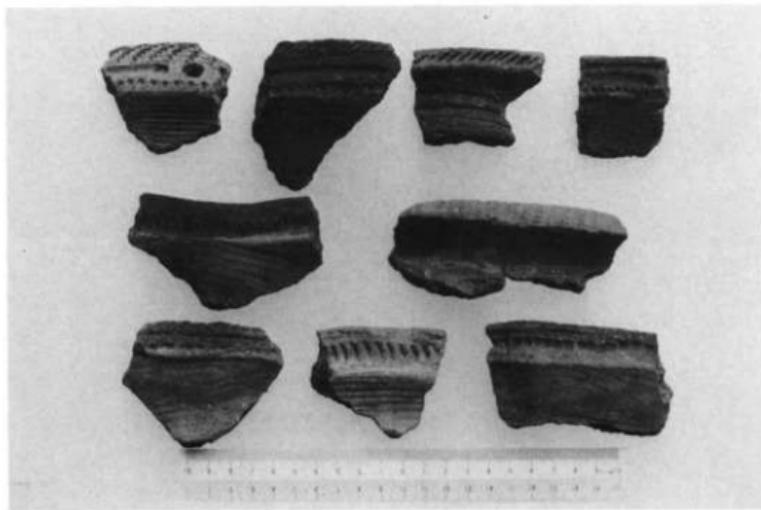


圖版21. 第7類土器





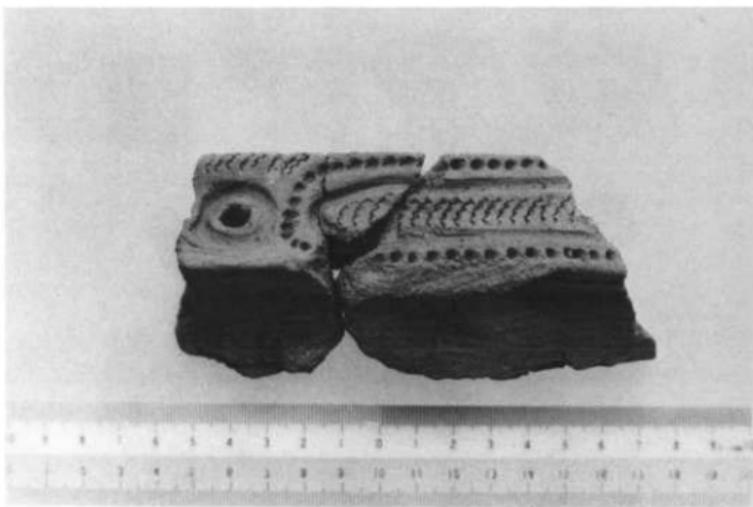
図版22. 第6類土器



図版22. 第6類土器

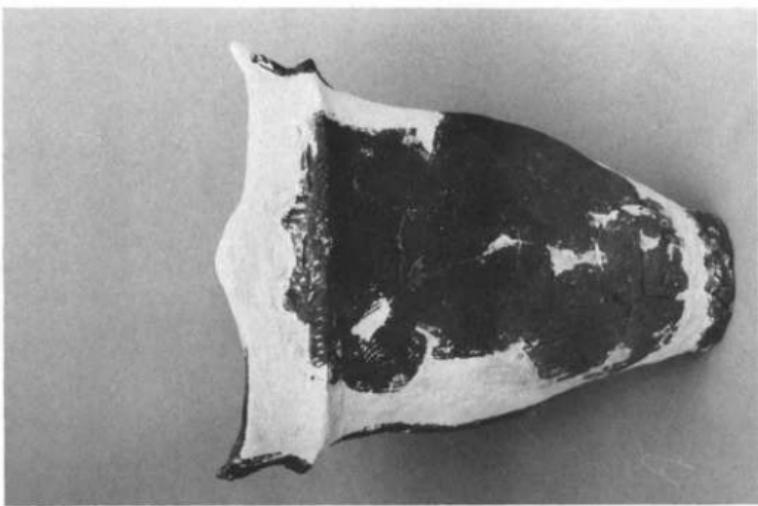


図版23. 第3類土器



図版23. 第6類土器拡大

圖版24. 第7類土器

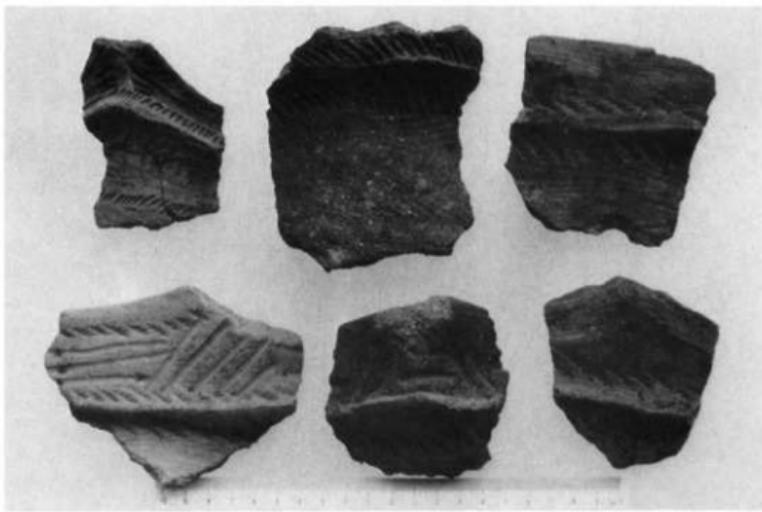


圖版24. 第9類土器

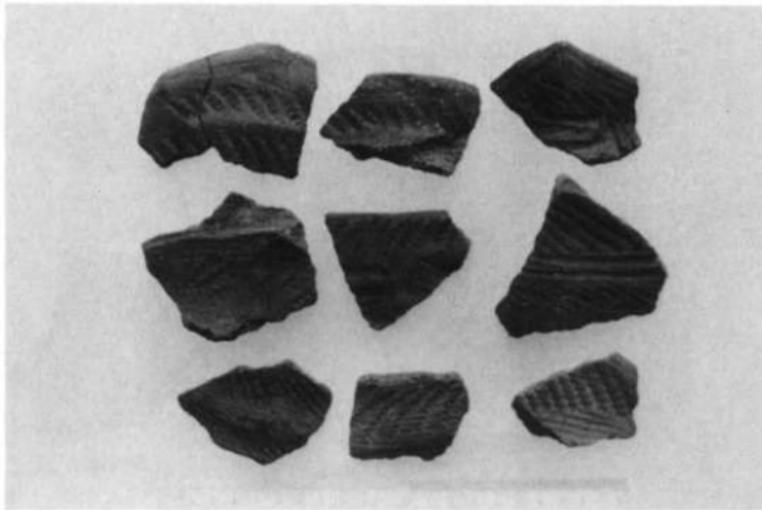




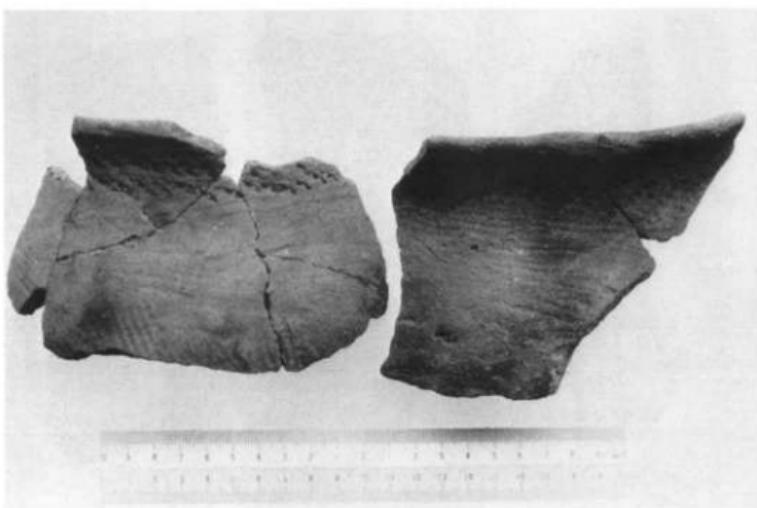
圖版25. 第7類土器



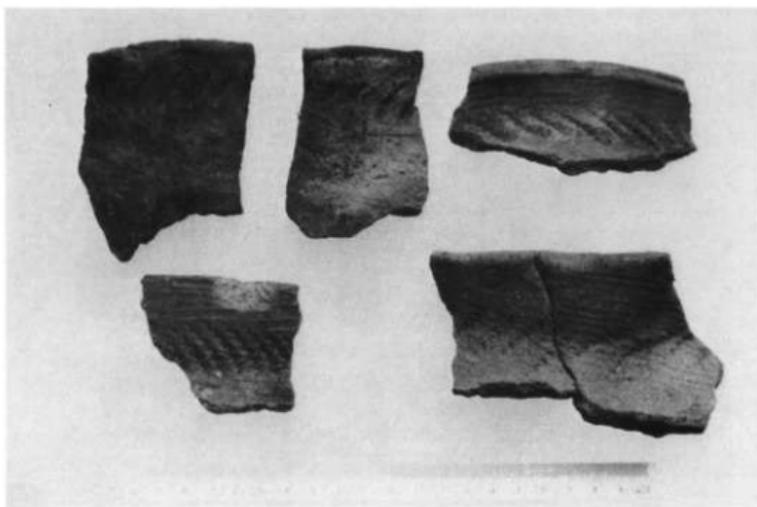
圖版26. 第7類土器



圖版26. 第7類土器



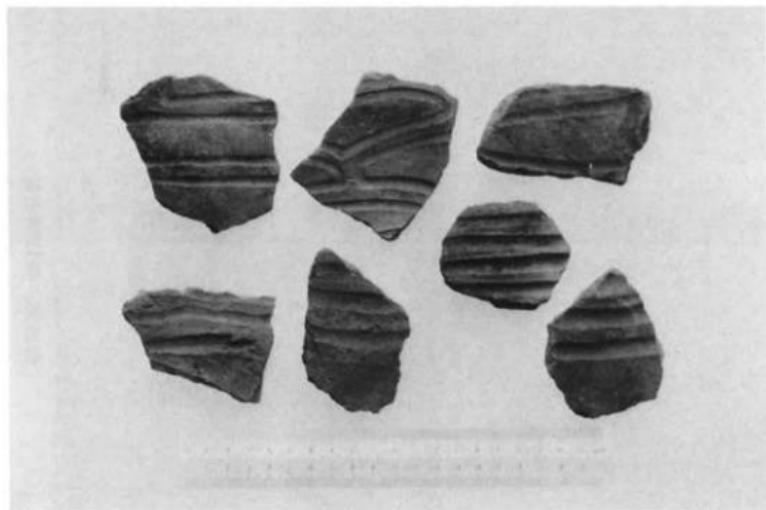
圖版27. 第8類土器



圖版27. 第8類土器



圖版 28. 第10類土器

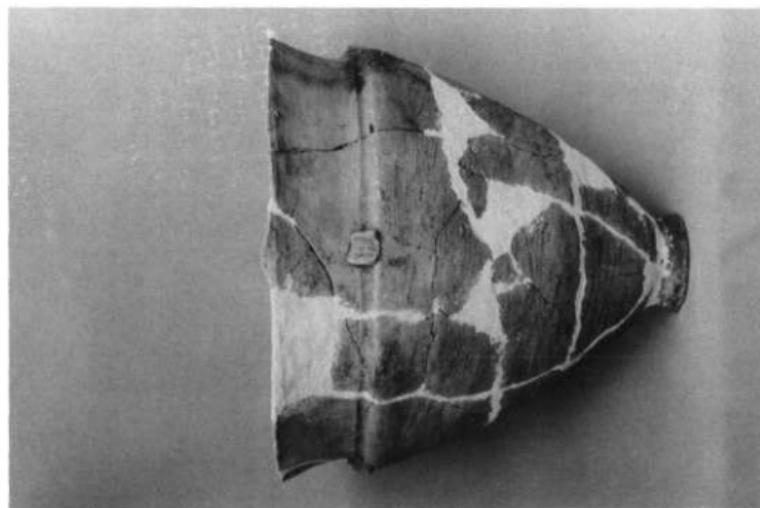


圖版 28. 第3類土器

圖版28. 同樣起部放大

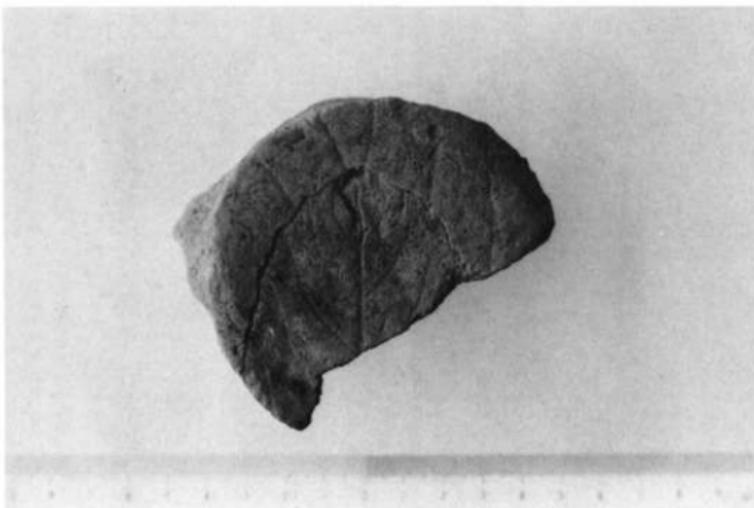


圖版29. 號12標本

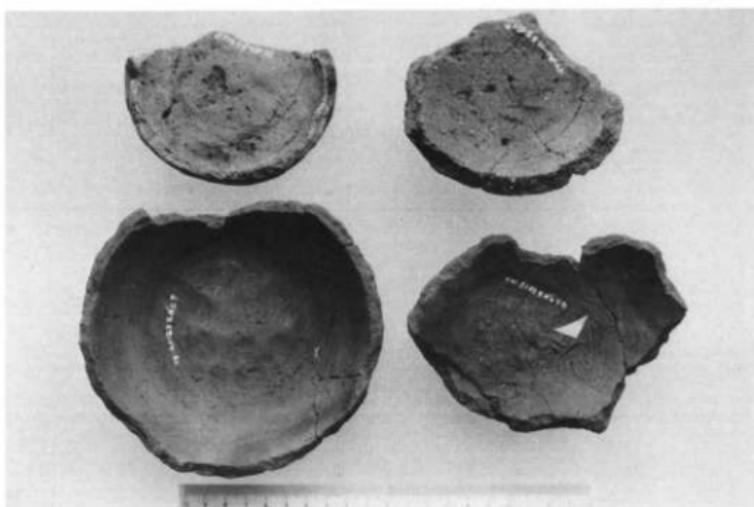




図版30. 第5類土器



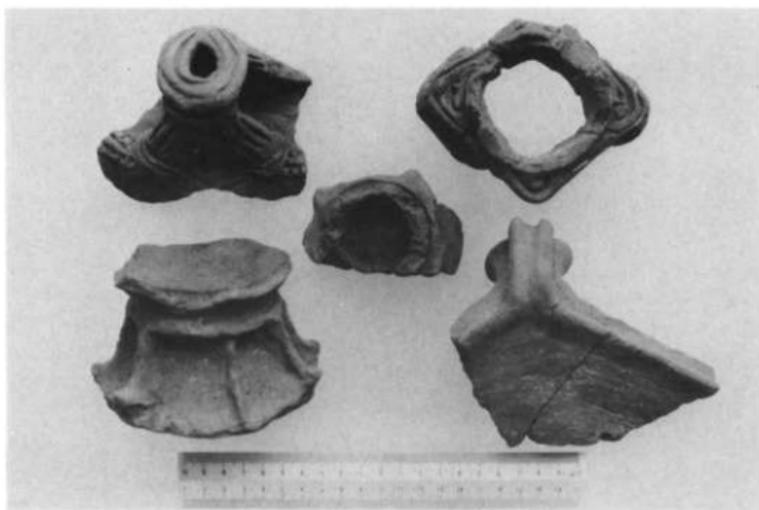
図版30. 木ノ葉圧痕底部



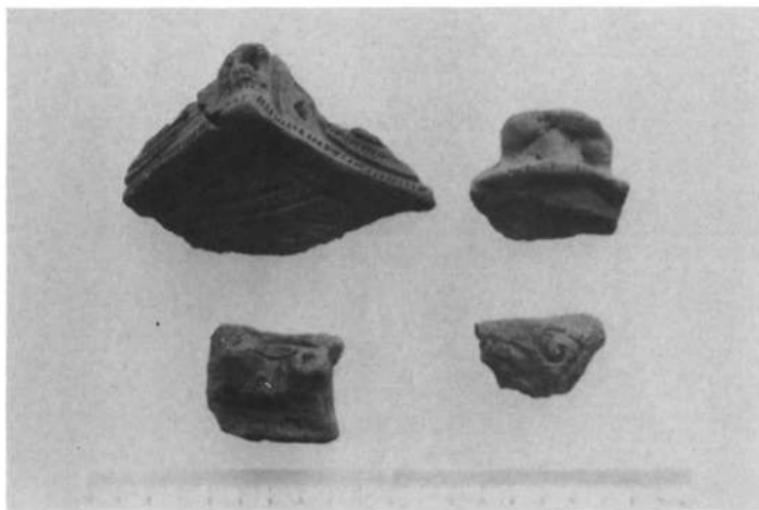
図版31. 底 部



図版31. 底 部



図版32. 装飾土器



図版32. 装飾土器



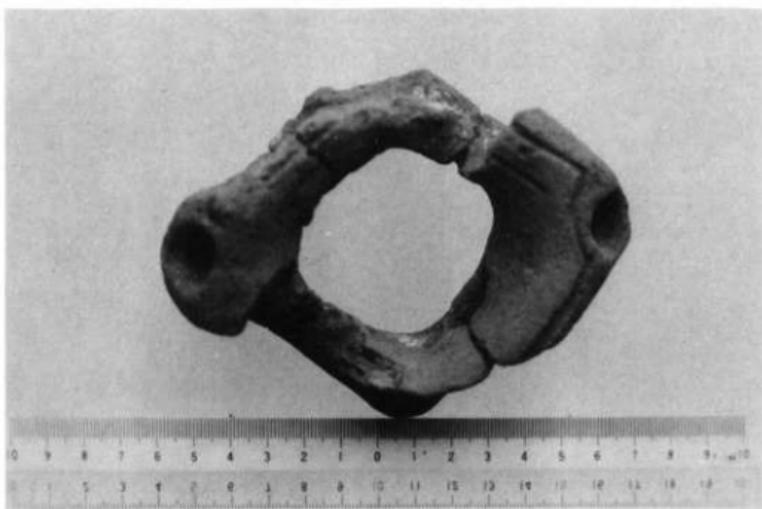
图版33. 装飾土器拡大



图版33. 装飾底部拡大



図版34. 装飾底部 側面



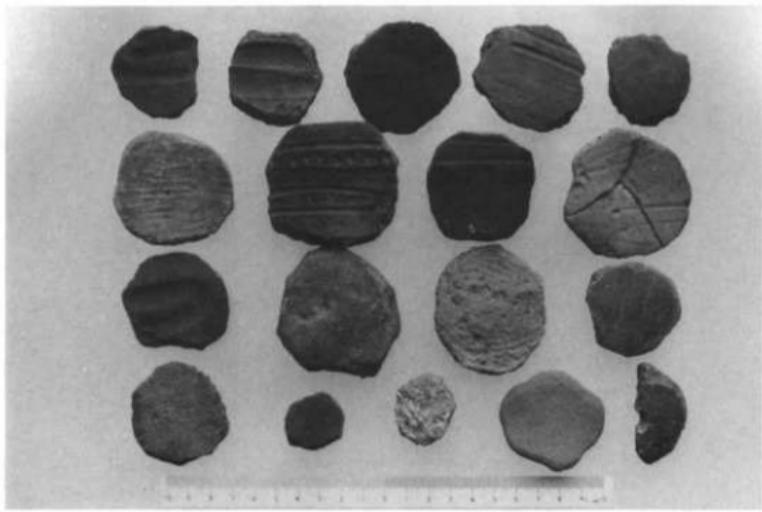
図版34. 装飾底部 底面



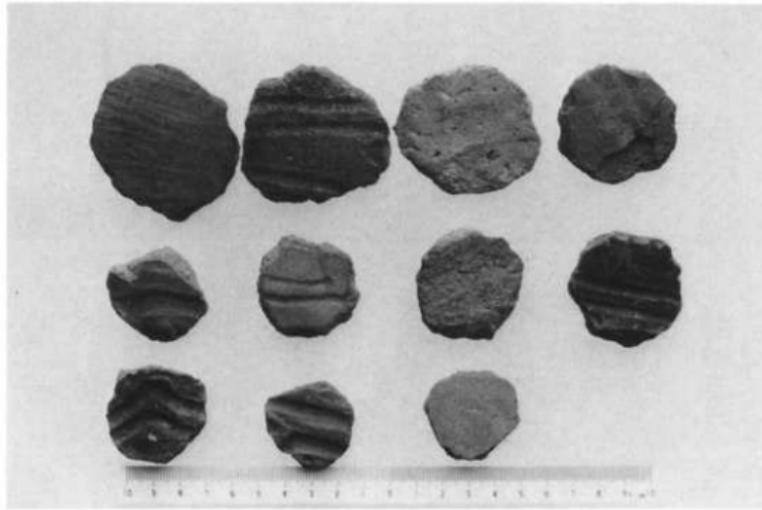
図版35. 装飾土器



図版35. 装飾土器



図版36. 土器破片の加工品



図版36. 土器破片の加工品



图版37. 黑曜石剥片



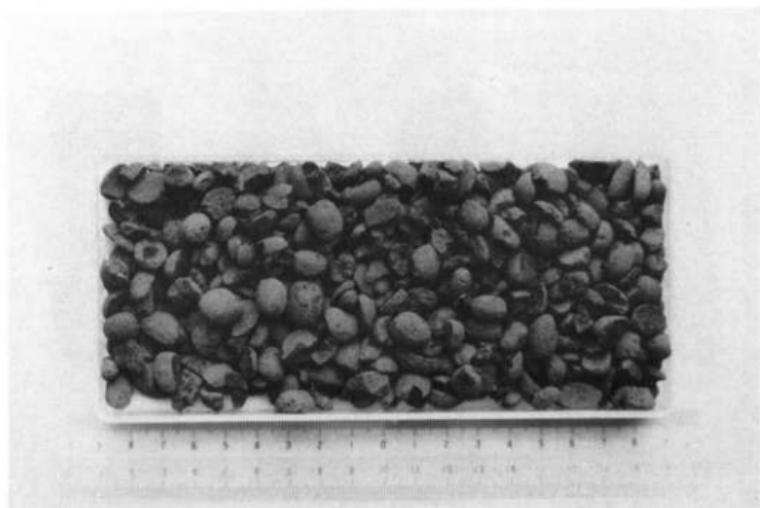
図版38. 円盤状石器



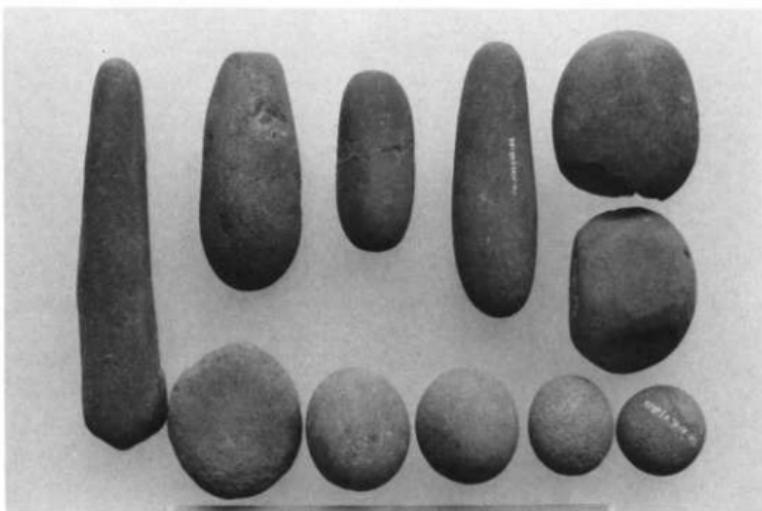
図版38. 石斧



圖版39. 痊狀耳飾、石器



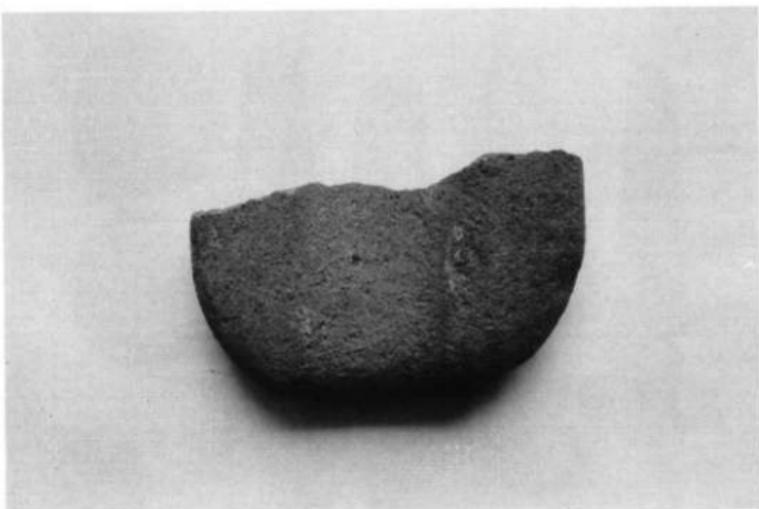
圖版39. 炭化物



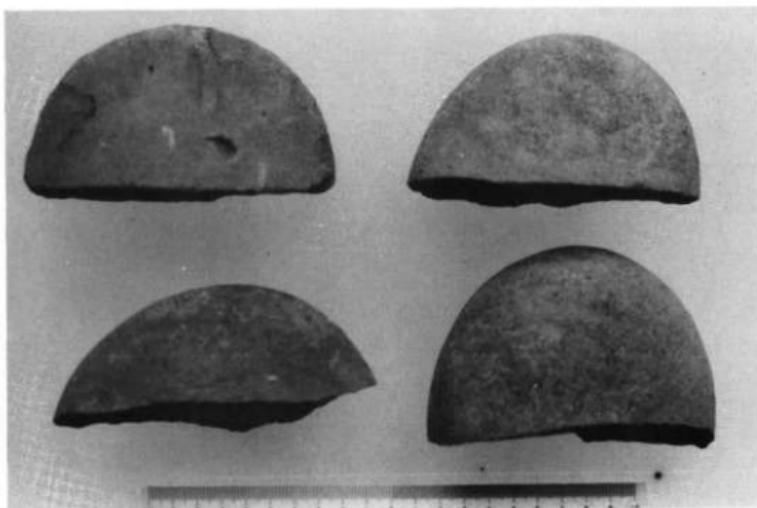
図版40. 槌石、玉石



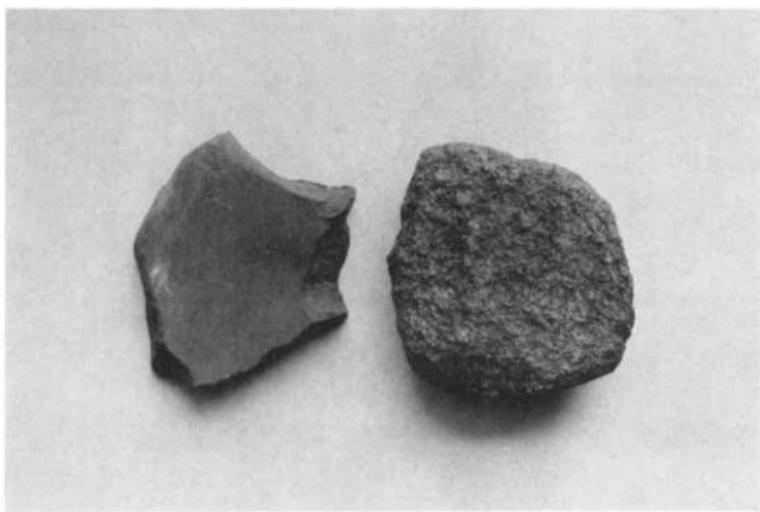
図版40. 石 鍤



図版41. 石皿



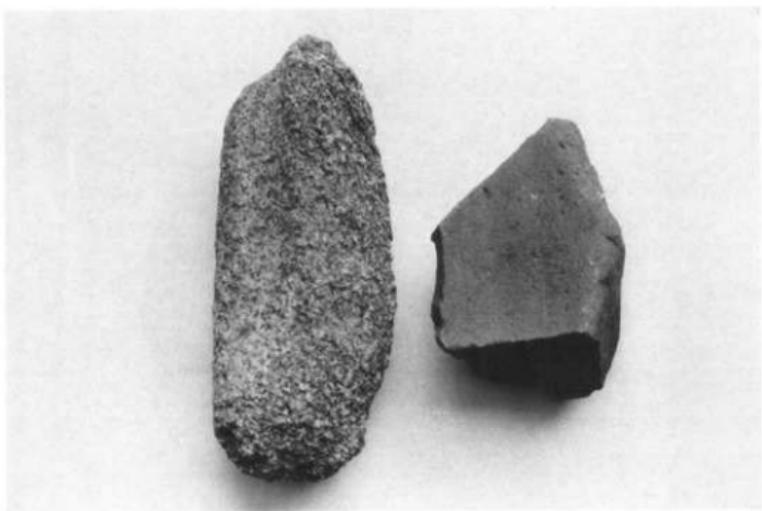
図版41. 破片



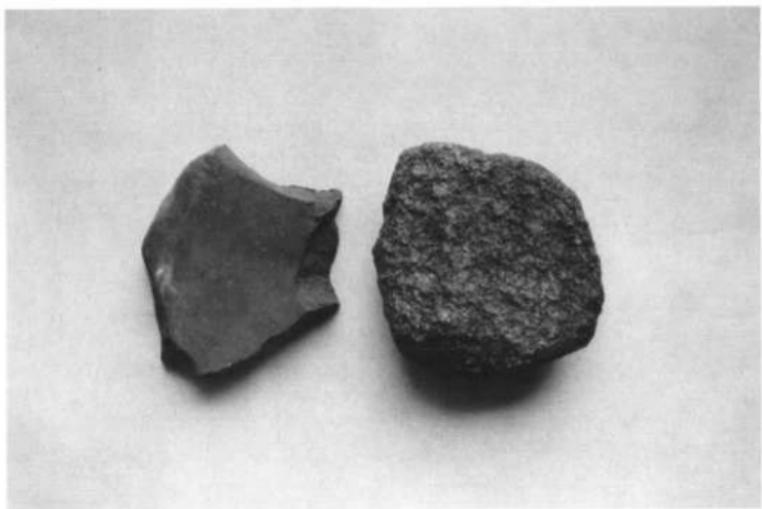
図版42. 石 盆



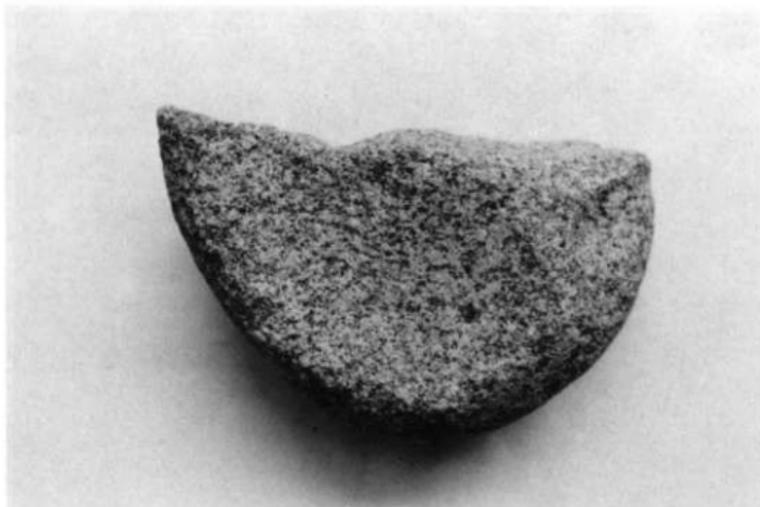
図版42. 石 盆



図版43. 石皿



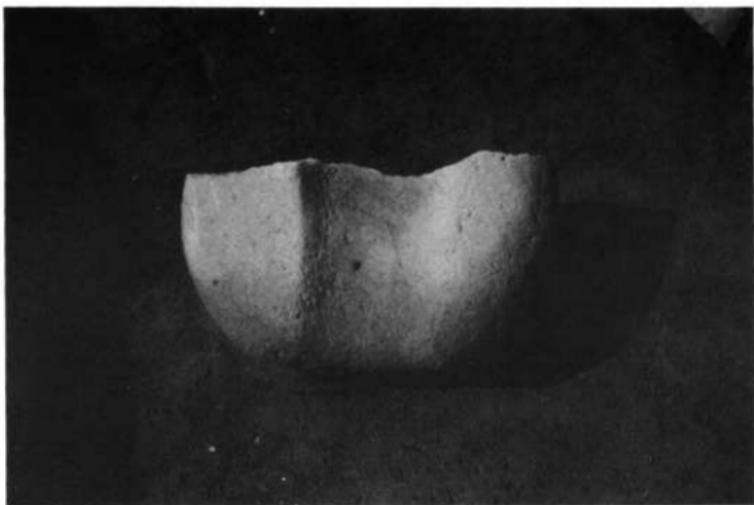
図版43. 石皿



図版44. 石 盆



図版44. 石 盆



図版45. 石　皿



図版45. 石組遺構

## あ　と　が　き

1月24日から2週間の予定で柳井谷遺跡の発掘調査を開始した。毎日毎日寒い日が続き、油断をすると実測用紙やラベルが吹っ飛ぶ状態で、時には砂ぼこりが目にはいったりもした。普通の所はそうまでもないが、現場は西向きで、それに、風に弱いシラスが掘りくり返されてむき出しになっている。その上、ブルドーザーの騒音もまたうるさかった。何かおおい被って来るような、追い立てられているような気がして、おちつかない。しかし、こうした中でも、作業員の人等はこまめに働いて下さった。柳井谷の人等は、近郊では働き者で通っているが、まさにその通りであった。みんな初めての経験である。中には、発掘地の所有者、自分の畑を自分で発掘調査する訳である。遺物の出土する度毎に喜びの声が飛びかい、負けじと熱心に掘る。説明会の際などには聞きもらさないように熱心に耳を傾け、質問も多かった。お陰様で、補助員も無く、担当者一人というハンデーを、こうした地元の作業員の手できさせていただいたのである。厚く御礼を申し上げる次第です。

2月8日、曲りなりにも発掘を終え、早速執筆にとりかかったが、途中、機報の早期作成をしいられ、越ヶ谷の発掘調査の参加、県文化課重富収蔵庫への遺物受領等の諸用に追われ、ようやく本報告書の刊行にこぎつけることができた。何分にも単独の担当で、後日になって若干の手落ちが生じたことも気づいたが、この間、多くの人等の御指導や助言をいただいた。収蔵庫で註記や接合をしていただいた作業員の皆さんにも御礼を申し上げたい。また、友人本田輝国君には無償で労働作業の提供、峯崎幸清君には、休日を利用して一部実測、レベル等の助勢を贈わった。甚大な謝意を申し上げたい。

### 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書

#### 柳井谷遺跡

発行日 昭和59年3月

発行者 志布志町教育委員会

〒899-71 鹿児島県曾於郡志布志町 2542

T E L 09947-2-1111

印刷所 梅上印刷株式会社

〒891-01 鹿児島市南栄3-1

T E L 0992-68-1001